2
成田良悟
Narita Ryohgo
イラスト／森井しづき
原作／TYPE-MOON
Illustration:Morii Siduki
Original Planning:TYPE-MOON
Fate strange Fake
フェイト／ストレンジ フェイク
電撃文庫

CONTENTS

間章　　『蝉菜マンションの赤ずきん』
二章　　『零日目　深夜　英霊事件』
三章　　『一日目　未明　群像ＶＳ虚像』
四章　　『一日目　夜明け前　英霊なき戦い』
五章　　『一日目　夜明け　闇の中の影法師』
六章　　『一日目　昼　二人のアーチャー、そして』
接続章　『ある日、森の中』
あとがき

それは、どこにでもある怪談話。

×　×

『冬ふゆ木き』と呼ばれる土地がある。

街まちの中央に大きな川が通り、そこを境として高層ビルやショッピングモールが立ち並ぶ都会的な『新しん都と』と、昔からの家屋や自然が多く残る『深み山やま町ちよう』に分かれ、同じ土地の中で様々な色合いを併せ持つ地方都市だ。

しかし、この土地には別の顔がある。

ここは日本で有数の霊れい地ちであり、かつて『アインツベルン』『遠とお坂さか』『マキリ』という三つの家系の魔まじ術ゆつ師し達が、とある儀式の基き盤ばんを練り上げた土地だ。

つまりは、魔術師達の儀式──『聖せい杯はい戦せん争そう』の戦場となってきた場所である。

五回に渉わたる聖せい杯はい戦せん争そうの中、様々な生と死、奇跡と破滅が繰くり返かえされてきた地。

だが、第五次聖杯戦争から数年が経過した冬ふゆ木きでは、そのような殺さつ伐ばつとした色とは程遠い、実に平穏な空気に包まれていた。

もっとも、それは表面上のものだけなのかもしれないが──

少なくとも、部活動に勤いそしむ高校生達が、休憩時間に雑談を嗜たしなむ程には平和だった。

×　×

穂ほ群むら原ばら学がく園えん　弓道場前

　放課後のひととき。
　弓道部の部員達が、休憩時間にたわいも無い噂うわさ話ばなしに興じていた。
「……本当だってば。柳りゅう洞どう寺じで昔、着物来た幽ゆう霊れいが出たんだって！」
「聞いたことないなぁ。昔って……今はいないの？」
「うん、霊感ある人とかでも、今は全然見えないって」
「成仏したの？」
「まあ、寺だからな」
「そういえば、あの寺の池にワニガメがいるって噂あったよね」
　そんな、怪談とも与よ太た話ばなしともつかない話が続く中、一人の少女が、冬木の街まちに近年生まれた怪談話を口にする。

「ねぇ、『蝉せみ菜なマンションの赤ずきん』って知ってる？」

「あの、美み綴つづり先せん輩ぱいの怪談？」
「そうそう、ああ、一緒に聞いたんだっけ？」
　上級生同士の会話に、下級生達が首を傾かしげながら割り込んだ。
「あ、俺おれ、知らないですその話」
「美綴先輩？　美綴先輩って、たまにここに遊びに来るＯＢの？」
　すると、話を切り出した上級生が、楽しそうにその『怪談』を語り出す。
「うん。あの人から聞いた怪談なんだけどさ……。ほら、新しん都との玄くろ木き坂ざかに、蝉菜マンションってあるじゃない？」
　だが、すぐにその顔から笑みを消し、神妙な調子で言葉を続けた。
　彼女は理解していたからだ。
　その怪談には、つい数年前に起こった、現実の心中事件が関わって

いるという事を。

「これは、そのマンションから広まった噂うわさなんだけどさ……」

×　×

　その都市伝説は、怪談の語り口を排除して語るならば、実に単純な話だった。

　玄くろ木き坂ざかにある蝉せみ菜なマンションに越してきた、一組の夫婦。
　その夫婦の間には、虐ぎゃく待たいを受け続ける娘が居た。
　いつも赤いフードを被かぶった、幼い少女。
　少女の境遇に気付きながらも、彼女の隣りん人じんである『Ａ氏』は、他人事だと無視し続けた。
　虐待によって腕も上がらなくなっていた少女から、エレベーターの中で『ボタン押して』と頼まれるだけの、限り無く他人に近い関係。
　しかし、幼い少女にとっては、自分の為ためにボタンを押してくれる隣人は、両親よりも頼りとなる存在に思えたのかもしれない。
　だからこそ━
　少女の母親が無理心中を図った時、少女は血ち塗まみれの状態で逃げ出し、隣人に助けを求めた。
　何度も何度も隣人の部屋の扉とびらを叩たたき、助けを求める少女。
　だが━またいつもの虐待だろうと思っていた『Ａ氏』はそれを無視した。
　他人事だと。
　自分には関わりの無い事だと。
　何度ドアを叩かれても、彼は無視し続けた。
　それでも、ドアは叩かれ続ける。

逃げ出した少女にとっては『Ａ氏』しかすがれる相手がいなかったのだから。
　しかし、『Ａ氏』はその少女の悲痛な叫びから――少女の命から、顔を逸そらした。
　テレビの音量を上げ、自分の世界に閉じこもる。
　所しよ詮せん、他人事だと。
　こうして、幼い少女は、最もつとも信頼していた人物に裏切られた。

　翌日、当の夫婦の死体が発見されたが、何な故ぜか、少女の行方だけが分からない。
　明らかに死は免まぬがれぬ量の出血の跡だけを残し、忽こつ然ぜんと姿を消してしまっていたのだ。
　虐待らしき音が消えるのと入れ替わりに、『Ａ氏』は毎晩、深夜のノック音に悩まされる事となる。
　そして、ある夜、耐えきれなくなった『Ａ氏』が扉を開けると、そこには赤いフードを被った少女が立っており――血ち塗まみれの顔で言うのだ。

『ねえ、ボタン押して』

×　　　　　　　　×

「……って話！」
　思い出しながら大おお雑ざつ把ぱに語り終えた少女に対し、隣となりにいた部員達が呆あきれたように言った。
「……あんたが話すと全然怖くないんですけど」
「同じ話でも、語り手が違うとこうも怖く無くなるんだね……」
「っつーか、何が怖いかって、お前の語り口の下へ手たさが一番怖ぇよ」

話を知る同級生の男女達からブーイングを受け、語り手の少女は手を強く左右に振る。
「いやー、美み綴つづり先せん輩ぱいみたいには無理だって！　あの人、すっげー話に入り込ませるしさ！」
「ああ、長い廊下の演出の下りとか、凄すごかったよね。……っていうか、ドアを開けた時は最初赤あかずきんは居なかったんだよ！　それで、振り返ったら長い廊下の奥に立ってたんだってば！」
「そうだっけ？」
「そうだよ！　他にも色々と飛ばしすぎ！　Ａ氏は孤独な状況が好きだったとか、刑事さんとのやりとりとか、もー。心中は実際にあった事件なのに、その事件自体が嘘うそっぽくなったよ」
　その言葉に合わせ、他の部員達も次々と会話に加わり始めた。
「不ふ謹きん慎しんですよ先輩。いや、実際の事件を怪談にしてる時点でもうかなりアレですけど」
「え、一家心中は本当にあったんですか？」
「そういえば、その心中事件、他にも色々と変な噂うわさあったよね」
　怪談を初めて聞いた者も含めてワイワイと盛り上がった所で、中ちゆ途うと半はん端ぱな怪談を聞かされた下級生達が不満の声を上げ始める。
「でも、どうせならそのＯＢの先輩から聞きたかったなぁ」
「そうですよ、オチだけさらっと話されたみたいで最悪っすよ」
　すると、語り手の少女がケラケラと笑いながら答えた。
「やー、少なくともここじゃあもうしてくれないよー」
「え？」
「あの人の怪談、怖すぎるからって、タイガーに直じき々じきに禁止されたんだよ。ほら、タイガー苦手じゃん？　こういう話」
「そういえば、陸上部でも確かそういう話は禁止されてるって聞いたけど……。やっぱり凄い怖がりな先輩がいたからとかなんとかでさー」

「タイガーって普段は図太いのに、変なとこでメンタル弱いよね」
　弓道部の顧こ問もんである女教師の渾あだ名なを口にしていると、遠くから『ほらー！　休憩時間は終わりだよー！』という声が響ひびいてくる。
「うわ、噂うわさをすれば、藤ふじ村むら先生だよ」
「もうそんな時間かぁ」
「怪談で終わっちゃったよ休憩時間……」
　消化不良と思いつつも、生徒達は部活を再開すべく腰を上げた。
　準備を始めながら、休憩時間の会話の残ざん滓しが、二言三言だけ引ひき摺ずられる。
「……結局あれ、Ａ氏って最後どうなるんだっけ？」
　うろ覚えだった事を恥じたのか、こっそりと同級生に尋たずねる語り部の少女。
「失しっ踪そうしたんじゃなかったかな」
　あっさりとした調子で答えた後、不ふ謹きん慎しんだと思いつつも、ほんの軽い冗談を付け加えた。
「今でもまだ、赤ずきんから逃げてたりしてね」

　それは、どこにでもある怪談話。
　冬ふゆ木きの若者達がささめき合う、どこにでもあるような噂話。
　しかし、その話には、噂では語られぬ続きがあった。
　都市伝説の後日談は、遠い異国の地にて紡つむがれる事となる。
『蝉せみ菜なマンションの赤あかずきん』。
　その怪談の主役が巻き込まれたのは、生なま半なかな流言飛語などよりも遙はるかに荒こう唐とう無む稽けいな──

　偽いつわりだらけの、『聖せい杯はい戦せん争そう』だった。

某ぼう所しよ

「あーあ、そこかぁ、よりにもよって、『そこ』に来ちゃったんだぁ。捨すて駒ごまちゃん」
　暗くら闇やみの中、水すい晶しよう玉だまの中に映し出された光景を見て、フランチェスカは退屈そうに肩を落とす。
　水晶玉に浮かぶのは、スノーフィールドの古びたオペラハウスを映し出した映像だ。
「もー、そこはもう、喚よばれる英えい霊れいさんはアルトちゃんだって決まってるのに」
　映像の中には、こそこそとオペラハウスに忍び込む、一人の少女の影が見える。
「どうせなら、不確定要素の強いシグマ君の所に行けば良かったのになぁ。そしたら、相乗効果でもっともっと面白くなったかもしれないのに」
　ゴスロリ服を纏まとった少女は、そんな奇妙な独り言を呟つぶやいた後、すぐに笑顔を取り戻しながら言葉を続けた。
「ま、それはそれでいいか。面白い遊びを思いついたし」

　彼女は誰だれかと魔ま術じゆつ通つう信しんで連絡を取った後、暗くら闇やみの中でダラリとしながら10分ほど水すい晶しよう玉だまを眺めていたのだが──
　水晶が一ひと際きわ強い光を放った瞬しゆん間かん、彼女は映像内の異変に気付き、目を輝かせて口を開いた。
「あれ？　あれれ？　誰かな、あれ？　もしかして、アサシン⁉」

彼女の言葉が終わるか終わらぬかの内に、映像に更さらなる変化が訪れたらしい。
　フランチェスカは興こう奮ふんしながら、水晶玉の中の『死体』を見つめてケタケタと笑い出した。
「アハハッ！　すっごい、すっごい！　いきなりアクシデントだよ！　どうなるんだろう！」
　子供のように目を輝かせながら淫いん靡びに頬ほおを紅こう潮ちょうさせ、恍こう惚こつとした笑みを浮かべるフランチェスカ。
「ぁあ、あぁ、ああ！　どうするのかな、どうするのかなあ、アルトちゃん！　呼ばれた瞬間にマスターが死んでるなんて、なかなかドラマチックだよね？」
　物ぶつ騒そうな言葉を口にしながら、彼女は笑い、笑い、笑い──
　次に水晶玉の中に映し出された存在を見て、笑顔のまま、首をグニャリと横に曲げる。
「……あれれ？」
　そして、頭に疑問符を浮かべながら呟つぶやいた。

「あの『セイバー』……誰？」

×　×

アメリカ　スノーフィールド

　建物の一部が崩ほう落らくしたオペラハウスの中で、アヤカ・サジョウは自分の運命を呪のろっていた。
　例えそれが自業自得の末路だとしても、運命というものを呪わずにはいられない。

　現在の彼女を取り巻く状況は、異常に異常を重ねた、神か悪魔の悪戯いたずらとしか思えない状況だったからだ。

彼女の横に転ころがっているのは、人間の死体だ。
外傷らしきものはないが、まるで心しん臓ぞうを握にぎり潰つぶされたかのような苦く悶もんの表情で固まっており、生命活動が欠片かけらも感じ取れない。
アヤカの目には、実際に何者かの手で心臓を握り潰されていたように見えたのだが──その心臓は既すでに無く、胸元にも傷跡は疎おろか、服が破れた跡すら見当たらなかった。
そして、その『心臓を握り潰した何者か』は、既にここには存在していない。
彼女の眼前に現れた不思議な男の手によって、何処いずこかへと退散してしまったからだ。

話は暫しばし遡さかのぼる。
数分前──アヤカは、囚とらわれの身だった。
死体が死体になる前の存在、一人のとある魔ま術じゆつ師しの呪じゆ具ぐによって全身を拘束されていたのである。
「あれで隠れていたつもりとは、随分と軽く見られたものだな」
呆あきれたように言う魔術師は、アヤカの身体からだをジロジロと睨ねめ回まわして首を傾かしげた。
「その令れい呪じゆにも似た刻印……貴様がファルデウスの言っていた奴やつか。何が目的だ？」
「……知らないよ。私はただ、変な白い女に言われて来ただけだから」
ぶっきらぼうな口調で語るアヤカの目には、世の中に対する諦あきらめと、理不尽な状況に対する怒りの色が湛たたえられていた。
それを見た魔術師は、ふむ、と考え、さして興味なさそうに言葉を紡つむぐ。
「なるほど、アインツベルンの『肉人形』から捨すて駒ごまにされた憐あわれなはぐれ魔術師……といった所か。まあ、儀式の邪魔をされ

ても困る。悪いが、先に始末をつけさせてもらおう」
　全身に奔はしる魔ま術じゆつ回かい路ろに魔力を走らせながら、殺意すらなく、作業のようにアヤカの息の根を止めようとする魔術師だったが──
「……む」
　急にその動きを止め、耳につけた呪具らしきピアスに指をあてた。
「はい。……。……この女を？　何なに故ゆえ？」
　呪具を通じて誰だれかと通話を行っているようだが、当然ながらアヤカに相手の声は聞こえない。
「……なるほど、承知した。あなたの遊びに付き合うとしよう」
　通話を終えた魔術師は大きく息を吐き、呪具で縛しばられたアヤカへと向き直った。
「気まぐれの遊びとは言え、確かに興味はある」
「……？」
「何、これから喚よび出だす英えい霊れいが、どの程度私に忠誠を誓うのか確かめるだけだ」
　魔術師は口元を僅わずかに歪ゆがませ、クツクツと笑いながら言葉を続ける。

「かつて円えん卓たくの騎き士し王おうと謳うたわれた高こう潔けつな英雄が、『無抵抗の女を斬きり捨すてろ』、と言う指示に従うかどうかをな」

　アヤカに理解できたのは、自分はこれから呼び出される高潔な英雄とやらに殺されるかもしれないという事だけだった。
「その円えん卓たくのなんとかさんが殺すのを拒こばんだら、私は助かる流れ……じゃないよね」
　皮肉げに、そして気だるげに言うアヤカに、魔ま術じゆつ師しはハッキリと答えた。
「令れい呪じゆを使ってみるというのも手だが、残念だが、私は遊び

で令呪を消費するほど享きよう楽らく的てきではない。その呪じゆ具ぐで首を絞しめ折おるだけだ」
「いいの？　先に殺さないと、あんたの儀式を邪魔するかもしれないよ？」
「声が震えているぞ？　強がりを言うな」
　半なかば捨すて鉢ばちとなったアヤカの皮肉に対し、魔術師は淡々とした調子で言葉を続ける。
「なぜ、これから喚よぶ英えい霊れいの真しん名めいも同然の情報をわざわざ口にしたか分かるか？」
「……？」
「私がこれから喚ぶ英霊も、『宣戦布告』のひとつだからだ。漏もれても問題ないどころか、お前の雇い主を通じて協会とアインツベルンへの壮大な皮肉とするそうだ。まったく無駄な行為だとは思うが、見合った報酬は受け取っているのでな」
　普段は情報の秘ひ匿とくを旨むねとする魔術師の常じよう識しきの中で、『情報を喧けん伝でんせよ』との依頼を受けたというその魔術師は、肩を竦すくめながら言い続けた。
「ようするに、お前の命がけの潜せん入にゆうは、こちらとしては織おり込こみ済ずみだったわけだ」
「……」
「その令呪モドキに召しよう喚かんを阻害する力があるか否いなかも確かめろとの話だが……まったく、フランチェスカは我々すら玩がん具ぐの一つとして見ているようだ。まあ、仮に君が何か抵抗して儀式を台無しにしたとしても報酬は変わらん。私はハズレクジを引いたと考え諦あきらめるとしよう」
　自みずからの首に巻き付いている呪具の一部が蠢うごめくのを感じながら、アヤカは静かに目を伏せる。
　そんな彼女を余所よそに、魔術師は舞台上に置かれた祭さい壇だんの前で、呪文を唱となえ始はじめた。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公——」

アヤカにとっては意味の無い単語の羅ら列れつ。同時に、それは死刑へのカウントダウンでもある。

「祖には我が大師××××××———」

—ああ、あっけない。
他人事のように魔術師の呪文を聞きながら、アヤカは小さく呻うめいた。
—私の逃亡劇は、こんな所で終わるのか。

「降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ———」

—これは単なる運命の悪戯いたずらか？　それとも、『あの子』の呪のろいなのか？
できる事ならば後者であって欲しいと思った。
—まあ……だとしたら、これで気が済んでくれるのかな。『あの子』は。
なにか理由があるだけ、少しだけマシかもしれない、と。
自分がこれから死ぬという現実から逃げるかのように。
「……？」
ふと、彼女は気付く。
魔ま術じゆつ師しの呪じゆ言ごんが周囲に響ひびくにつれ、自分の身体からだの中に走る奇妙な力の流れを。
自分の身体中の血管が鉄と化し、外の磁石に引き寄せられるかのような感覚。

アヤカはすぐに、それが血管ではなく、自みずからの身体の五箇所に刻まれたタトゥーのあたりから感じる脈動であると理解した。
怨えん嗟さか、あるいは歓かん喜きか。
タトゥーを軸として、自分の身体全体が叫び声を発しているかのような錯さつ覚かくを覚える。
徐々にその声は大きくなり、呪文が掻かき消けされているかのようだ。
しかしながら、魔術師はその異変に気付いていないらしい。
拘束呪具に絶えず魔力を送り続け警けい戒かいはしているが、召しよう喚かんの儀を中断する気はないようだ。
もっともアヤカには、ここで何か壮大な魔術が発動したとしても、この魔術師をやっつけたり自動的に安全な場所にワープする等という楽らつ観かん的てきな展開になるとは思えなかった。
──まさか、自じ爆ばくとかじゃないよね？
どちらにせよ、自分の死は免まぬがれないだろう。
その事実と相まって、アヤカの中に恐怖が走る。
死にたくないという渇望も。
しかしながら、その感情はどこか他人事のように感じられた。
──死にたくない？　なんで？
──生きる目的もない私が？
果たしてそれが自分の脳のう味み噌そが思い浮かべている疑問なのか、あるいは腕に刻まれたタトゥーや『白い女』に仕込まれた呪いが言わせているのか、アヤカには判別する事ができない。
初歩的な判断能力をマヒさせる程、彼女のタトゥーが奏でる騒そう音おんが大きくなっていたからだ。
まるで、これから現れる何かを歓声か、あるいは絶叫で迎え入れるかのように。

斯かくして、次の瞬しゆん間かん──
オペラハウスのステージ上に、『死』が形をもって舞い降りた。

ただし、アヤカではなく、彼女の処刑人であった筈はずの魔術師の背後に。

「抑よく止しの輪わより来たれ、天てん秤びんの守り手……よ……？」

いつから、そこに居たのだろうか。
少なくとも、アヤカの目には『それ』が突然現れたように見えた。
影のような黒い衣を纏まとった、小柄な人影。
黒い布地を全身に纏っている事は確認できたのだが、顔すらも良く解わからなかった。
ただ、その布地の合間から異様に長い腕が伸び、被害者の胸に触れた瞬しゅん間かんだけはハッキリと覚えている。
それを見た瞬間に、アヤカはハッキリと理解した。
自分が置かれているこの状況は、既すでに既知の世界ではなく──普通の人生を送る者達の目に映る事のない、この世の影の裏側なのだと。
理解した瞬間、彼女の視界に小さな人影が現れる。

赤いずきんを被かぶった、幼い少女。

果たしてそれは幻影なのか実像なのか、混乱する彼女には理解できない。
──なんで、ここで出てくるんだ。
──この建物に、エレベーターは……ない、のに。
オペラハウスの舞台の上。死体を踏みつけるような形で現れた『それ』は、無邪気にこちらを向いて微笑ほほえんでいた。
その笑顔の意味を理解するよりも先に、全身を怖おぞ気けが走り抜ける。
アヤカが背骨をギチギチと震わせるのと、黒衣の乱入者が己おのれ

の長い手の中に現れた心しん臓ぞうのようなものを握にぎり潰つぶすのは、果たしてどちらが先だったろうか。

「がッ……ば……？」

　自分の身に何が起こったのか分からぬまま、魔ま術じゆつ師しは口から血を吐き出した。
　果たして彼は、誰だれが自分を殺したのか認にん識しきしていたのだろうか。
　アヤカは黒衣の人影と赤い少女の両方に恐怖を感じつつ、その裏側では「ああ、私が殺したって勘違いされてたら嫌だな」などと、やはりどこか他人事のような不安が頭の中に浮かんでいた。
　そうでもしなければ、恐怖に押し潰されると本能が理解していたのかもしれない。
　魔術師が動かなくなるのと同時に、アヤカの全身を拘束していた縄なわ状じようの呪じゆ具ぐがボロボロと崩くずれ落おちた。
　自みずからの身体からだが解放された事に気付き、一いつ瞬しゆんだけ意い識しきを逸そらした、その刹那せつな──
　彼女の視界から『赤いずきんの少女』が消え──
　代わりに、黒衣の人影が目の前にまで迫っていた。
「……ッ！」
　呼吸が止まる。
「……貴女あなたは、聖せい杯はいを求める魔ま術じゆつ師しか？」
　機械的な問い掛け。
　相手の声を聞くと同時に、先刻感じたものとは比べものにならない程の寒気が、無数の針となってアヤカの全身を駆け抜けた。
　声からして、若い女だという事は理解できる。もしかしたら自分より年下かもしれない。
　だが、その身が放つ気配は先刻「お前を殺す」と言った魔術師とは比べものにならぬ程に冷たく、鋭く、そして重厚だった。

初めて会う存在なのに、信じられる事がある。
答えをひとつ誤れば殺される。
嘘うそをついても殺されるだろう。
相手に現在『殺意』はまだ無い。だが、一つ選択を誤れば殺意を感じる間もなく、自分は目の前に転ころがる魔術師の死体と同じ姿になるであろう。
そんな確信を得たアヤカは、黒衣の女に正直に答えを返そうとした。
「私は……」
刹那──
オペラハウスのステージを包み込む形で、光が溢あふれた。
「！」
「!?」
黒衣の女は警けい戒かいして飛とび退すさるが、拘束から解放されたばかりのアヤカは立つ事すらできない。
目を細めながら、光源と思おぼしき方向に目を向けるのが精一杯だ。
光の中に影が見える。
人影が──複数。
不思議な光景だった。
ほんの数秒であったにもかかわらず、時が止まったかのように感じられる空間の中、その複数の影のうちのいくつかは、その場に跪ひざまずき──
最後に現れた、一ひと際きわ色濃い影を迎え入れる。
光が薄れていくと、いつの間にかその複数の影は消えており、最後に現れた色濃い人影だけがその場に残っていた。
荘そう厳ごんな装しよう束ぞくに身を包んだ、まだ若い金きん髪ぱつの男。
金色の髪かみの合間には所々赤毛が混じっており、美しい顔立ちの中に、獣けもののように爛らん々らんと輝く双そう眸ぼうが浮かんで

いる。
　一歩離れた位置でその男を睨にらむ黒衣の女性から色濃い『死』が感じられたのと同じように、光の中から現れた男からは、普通の人間が持たぬような尋常ならざる『熱』が感じられた。
　そんな男が、きょろり、ギョロリと周囲を見渡し、言った。

「これはこれは、少しばかり変わった状況らしい」

　足元に転ころがる魔ま術じゆつ師しの死体と、警けい戒かいの目を向けている黒衣の女性に交互に目を向けた後──
　男は、ニヤリと笑いながら言った。
「その出いで立たちと、今感じた『力』の流れ……、もしかして、『山やまの翁おきな』に連なる者か？」
「……ッ!?」
　空気が、一いつ瞬しゆんで変わった。
　アヤカにはまったく意味の解わからない言葉だったが、黒衣の女にとっては何かの核心に触れる一言だったらしい。
　男はニヤリと笑い、黒衣の女を挑発するように言った。
「どちらにせよ、俺おれも君も聖せい杯はいを求める以上、敵味方の関係なのは確かだが、どうする？」
　言葉と同時に、黒衣の女が殺意を膨ふくらませながら跳ちよう躍やくする。
　まるで、地の影が空中に跳とび上あがったかのようだ。
　一息で舞台の袖そでまで飛ぶと、ステージを取り巻く柱から柱へと残像を残しながら跳躍を続け、天幕の合間を飛び交う頃ころには、数十人に分身したのかと錯さつ覚かくさせる。
「ははッ！　凄すごいな！　ロクスレイより身軽な奴やつは初めて見た！」
　子供のように目をキラキラと輝かせ、何者かの名を出しながら、男は自分に殺意を向けて飛び交う黒衣の女を賞賛した。

「……」
　そんな賞賛を挑発と受け取ったのか、黒衣の女は更さらに跳躍の速度を上げ──
　不意に、その姿が完全に無となって消きえ失うせる。
「消え……た……？」
　アヤカが上を見上げながら呆ぼう然ぜんとそんな事を呟つぶやくと同時に──

　黒衣の女は、その場にいた全すべての者の死角から現れた。
　ステージの上ではなく、現れた男の背後、その床に映る影から飛び出す形で。
　背のあたりから異様に長い腕が伸び、男の背の中心、心しん臓ぞうの辺りに迫る。
　つい１分ほど前に魔術師を屠ほふり去さったのと同じ、明確なる死の腕。
　だが、男の身体からだにその腕が届く事はなかった。
　何処いずこかから放たれた矢が、女の手を弾はじき飛とばしたのだ。
「……ッ!?」
　黒衣の女が、僅わずかに目を見開く。
　彼女にとって、まったく死角からの一いち撃げきだった。
　何しろその矢は、男の足元──それこそ、舞台の床に映る影の中から唐突に現れたのだから。
「ははッ、比べられた事が不満か？　だが、相変わらず見事な腕だ」
　貴族風の青年はそんな言葉を誰だれともなく呟つぶやくと、笑顔を浮かべながら剣を抜く。
　豪ごう奢しやな作りの剣で、アヤカにもひと目で王侯貴族が使う類たぐいの剣だと理解できた。
　そして、笑顔のまま、力ある言葉と共に──振り抜く。

──『×××××勝利の剣エクスカリバー』。

　再び、光がオペラハウス内部を包み込んだ。
　魔ま力りよくを帯びた男の剣から雷らい撃げきの如ごとき光が奔ほとばしり、距離を取ろうとしていた黒衣の女へと一直線に突き進む。
　そして──

　目が眩くらんでいたアヤカの耳には、激はげしい衝しよう撃げき音おんと、続いて何かが崩ほう落らくするような音が聞こえてきた。
　恐る恐る彼女が目を開けると、そこには──
　半壊したオペラハウスの姿と、崩くずれた天井から覗のぞく星空が目に映る。
「……」
　放心している少女に対し、男が言った。

「問おう、汝なんじが俺おれのマスターか？」

　その言葉を聞き、移りゆく状況について行けなかったアヤカの脳のう味み噌そが、ようやくまともな状態に復帰し始める。
　彼女は改めて、現在の状況について考えた。
　どうやら、魔ま術じゆつ師しが執とり行おこなおうとしていた『儀式』は無事に完かん遂すいされたらしい。
　だが、どうにも事前に聞いていた話と違う。
　自分をこの場に無理矢理連れてきた『白い女』の話通りならば、この場の儀式によって現れるのは、昔の英雄かなにかの霊れいのようなものらしい。白い女は『英えい霊れい』と説明していたが、現れるのは一体だけだと聞いていた。
　ならば先刻、光の中に複数の人影が見えたのは何だったのか。
　男が危機の際に、あの矢を撃うち放はなったのは彼自身なのだろう

か？
　他にも矢継ぎ早に疑問を思い浮かべるアヤカだが、すぐにどうでも良くなった。
　冷静になるにつれ、自分の置かれている立場を理解し、吐き気を催す。
　目の前に転ころがる魔ま術じゆつ師しの死体。
　彼は死んだのだ。自分の目の前で。本当にあっさりと。
　そして、男は魔術師の死体を確認はしたものの、僅わずかに首を傾かしげただけで、特にショックを受けた様子もなく語りかけた。
「安心しろ、巻き込んだ民衆の気配はない。代わりに、賊ぞくにも逃げられたようだが……ふむ、俺おれから逃げ切るとは見事な奴やつだ。しかし、今いま更さら引き返してはくるまい」
　人の死が、当たり前なのか？
　アヤカにとって、受け入れがたい状況だ。
　──ああ、ああ、そうか。
　──あの『白い女』は……私にこんな事をさせようとしていたのか。
　──『聖せい杯はい戦せん争そうに参加しろ』か。
　──なるほど、戦争なら人が死ぬのは当然だ。
　どうしてこうなった？　彼女は考える。
　何故なぜこんな事になってしまったのか。
　何故、自分はこんな人生を歩むハメになってしまったのか。
「それを踏まえた上で、もう一度問おう」
　過去を悔やむアヤカに対し、男が問い掛けてくる。
　どうやら、自分が何故ここに来たのかをじっくりと思い返す時間はくれないようだ。
「……」
　何もかもが混乱に包まれたこの状況の中──
　ただひとつ、心に決めた事はあった。
　もう、誰だれかの死を受け止める事などできない。
　そんな事を私に強しいるのが運命だというのならば。

逆らえば自みずからが死を迎えるというのならば。
せめて、抗あらがいながら死んでやろうと。
どのみち自分は、生きる価値など無い人間なのだから。
「君が、俺のマスターという事でいいのか？　俺は、見ての通りセイバーのクラスだ。納得できたなら、早速契約を済ませ──」
男の言葉を遮さえぎる形で、アヤカは即答する。
「違う」
覚悟を決めたというよりは、半なかば自棄やけに近い形で、喉のどの奥から声を絞しぼり出だした。
「断じて違う」
「なに？」
男の声に反応して、自分の身体からだのタトゥーが僅わずかに輝き、目の前の男と共鳴しているのが分かる。おそらくは、ここで『私がマスターだ』と言えば、『白い女』の言っていたように、英えい霊れいを簒さん奪だつする事もできるのだろう。
だが、彼女はそんな『白い女』の意図を無視し、男を睨にらみ付つけた。
「私はもう……お前達の思い通りにはならない」
恐怖による震えを無理矢理押さえ付けながら、彼女はそれこそ、自分の命すら捨てる覚悟でその言葉を言い放つ。
「私に……干渉しないでくれ」

アヤカはそう言った瞬しゅん間かん、自分が男の剣によって斬きり殺ころされるだろうと思っていた。
先刻の黒衣の女とは違うが、目の前の男からも、通常の人間とはまったく違う、桁けた外はずれに強い存在の力が感じられる。
男にとって、普通の人間など蟲むしケラも同然に違いない。アヤカはそう考えた。
だが──その推測に反して、男は困ったように首を傾かしげ、剣を鞘さやにしまいながら口を開く。

「なるほど、マスターじゃないのか。それじゃしょうがないな」
　そして、溜ため息いきを吐きながら半分近く崩ほう落らくした天井を仰ぐ。
「ここは歌劇場か？　まいったな……」
　何故なぜかショックを受けたように目を細め、考え込むように腕を組んだ。
「現代の劇場はこうも脆もろいものなのか……。『座ざ』に与えられた知ち識しきだけでは分からないもんだな……」
　独り言をブツブツと呟つぶやきながら、舞台の袖そでに消えて行く。
　後に取り残されたアヤカは、ポカンと口を開けた後、数秒待ってからハッと気付く。
「助かった……？」
　だが、そう思ったのも束つかの間ま――
「動くな！」
　劇場の入口のひとつから、男の怒声が響ひびいてくる。
　先刻の男とは別人のものだったが、こちらはすぐに正体を判じる事ができた。
　入口から現れたその男達は、お揃そろいの装しよう束ぞく――すなわち、警けい察さつの制服を身に纏まとって、アヤカに暴ぼう徒と鎮ちん圧あつ用ようのテイザーガンを向けている。周囲に人がいないのに拳けん銃じゆうの方を抜かなかったのは、一見してアヤカが非武装だったからだろうか。
「両手を頭の後ろに組んで床に伏せろ！　ゆっくりとだ！」
「……えぇー」
　気だるげな声をあげつつも、アヤカはゆっくりと言われた通りにした。
　どう見ても私は被害者だろう。彼女はそう考えたが、爆ばく弾だんテロらしき現場にいた不法侵入者という事を考えれば、まあ当然の対応かもしれない。

しかも、横には魔ま術じゆつ師しの死体があり、彼が儀式に使用した怪しげな祭さい壇だんなども残っていた。

これは相当ややこしい事になりそうだと思いつつも、彼女はふと、他人には理解しがたい事を考えていた。

──警けい察さつ署しよって……エレベーターあるよね。

──ああ……憂ゆう鬱うつだ。

──いや、その前にあの『白い女』の呪のろいで死ぬのが先かな。

そんな事を考えている間に、警官達はアヤカを取り囲み、傍そばにあった魔術師が死んでいる事を確認する。

「おい！　お前がやったのか」

「違う違う。私は被害者だよ」

流りゆう暢ちような英語でそう答えたアヤカの腕を押さえながら、警官の一人が言った。

「なら、ここで何があった。何故なぜ改装工事中のオペラハウスの中にいた」

「あー……いや、それは」

魔術師に攫さらわれてきたと嘘うそをつく事も考えたが、周辺の監視カメラでも調べられればすぐに嘘がバレて、尚なお更さらややこしい事になるだろう。

しかし、正直な事情を話すわけにもいかない。

言いい淀よどんでいるアヤカをやはり怪しいと判断したのか、警官の一人が手て錠じようを取り出した。

「不法侵入並びに、建けん造ぞう物ぶつ破は壊かいテロの容疑で逮捕する。いいか、お前には黙秘権が……」

──あ、これ、本当に言うんだ。

アメリカのテレビドラマなどでよく見かけるミランダ警告を聞きながらそんな感想を抱いているアヤカ。この先どうなるかは分からないが、死ぬにしても、魔術師殺害とオペラハウス破壊の冤えん罪ざいをうけたまま死ぬのは些いささか納得がいかない。

そう思っている彼女が伏せられたまま目を開けると──そこに、また

『彼女』が現れた。
　赤いずきんを被かぶった、幼い少女。
　警官達には見えていないようで、少女の周りを普通に素通りしていく。
　赤いフードは深く被られ、鼻から上は伺うかがい知しれない。
　だが、少女は顔をこちらに向け、薄く微笑ほほえみながら何か喋しやべろうと口を開いた。
　聞きたくない。これ以上見たくない。
　そう思いつつも、視線を外す事ができなかった。
　アヤカはその理由を理解している。
　これは、何年も前から自分の身を縛しばる、自業自得の呪のろいなのだからと。
　赤いフードの少女が何かを彼女に伝えようとした、その時──
「おい、待て」
　凛りんとした声がオペラハウスの中に響ひびき渡わたり、同時に、赤いフードの少女の姿が消え去った。
　アヤカと警けい官かん達が声の方に目を向けると、三階席の崩ほう落らくから免まぬがれていた部分、孤立しているＶＩＰ席に豪ごう奢しやな貴族服の男が立っている。
　──あれ？　さっきの……。
　──なんでまだいるんだ？
　アヤカが疑問に思うが、男はアヤカと警官達に向かい、一方的に宣言した。
「俺おれが証言しよう。そいつを殺したのは、その眼鏡めがねをかけた女じゃない」
「誰だれだ！　そこを動くな！」
　距離の関係だろうか。警官の数人がテイザーガンではなく、拳けん銃じゆうを向けながら叫ぶ。
　だが、男は意に介した様子もなく、堂々と口上を述べ続けた。
「ついでに言うなら、この歌劇場を破は壊かいしたのもその女じゃな

い」
「なに？」
「俺がやった、この剣でな」
　腰に下げた剣の鞘さやをポンと叩たたきながら言う男に、警官達が眉まゆを顰ひそめる。
　彼らは視線で合図を交わし合い、数人が男のいるＶＩＰ席へと向かって走り出した。
　剣でやったという話は信じていないようだが、犯人だと名乗る男に警けい戒かいはしているらしい。
「気を付けろ、まだ爆ばく弾だんを仕掛けているかもしれん」
　そんな警官の囁ささやきを耳にしたのか、男は困ったように口を開いた。
「爆弾と一緒にされても困るんだがな。……ん？」
　言葉の途中で、半壊していた天井の一部が再び崩落を始める。
「危な……」
　アヤカが思わず呟つぶやき、警官達もそれに気付いて逃げようとするが、数名は間に合いそうもない状況だ。
　すると、ＶＩＰ席の男は腰の剣に手をかけ、日本刀の居合いに近い形で抜刀する。
　先刻とは比べるべくもない威力だが、やはり光の筋が刀身から伸び、落下する石の塊かたまりを粉みじんに破壊した。
　何が起こったのか分からず、間かん一いつ髪ぱつで助かった警官達も、安全な場所から何もできずにいた警官達も揃そろってその場に立たち竦すくむ。
　尋じん常じようならざる技を成なし遂とげた男は、堂々と立ち振る舞いながら、目を白黒させている警官達に言った。
　一いつ瞬しゆんだけ視線をアヤカの方に向け、軽い微笑ほほえみを浮かべながら。

「これで、俺おれが犯人だという証拠になるか？」

×　　　　　　　　　　　　　　×

同時刻　スノーフィールド西部　大森林

「……変わった気配を感じるね」
　マスターである銀ぎん狼ろうと共に、１日かけて森の結けつ界かい化かを進めていたランサーの英霊エルキドウは、街まちの方角から流れてくる魔ま力りよくの乱れを察知し、不思議そうに呟つぶやいた。
「強い魂たましいの周りに、七つの魂が従属してる。その傍そばにも、やっぱり奇妙な魂がいるのを感じるよ。なんだろうね？」
　やや緊きん張ちようしたエルキドゥの心を汲くみ取とったのか、クォン、と不安げに鳴く銀狼。
　そんなマスターの背筋を撫なでつつ、エルキドゥは優やさしい声で言った。
「大丈夫だよ。今夜は僕は動かない」

「最後にギルを全力で迎える為ために、僕もそれなりの準備をしないといけないからね」

×　　　　　　　　　　　　　　×

オペラハウス前

「こちら、建物の一部が崩ほう落らくした市し街がい中心部のオペラハウス前です。50年以上の伝統を誇るこのオペラハウスに、一体何が起きたのでしょうか！」
　スノーフィールドの地元ケーブルテレビ局のレポーターが、半壊したオペラハウスの前で実況を続けていた。
　レポーターは数人にインタビューを行った後、更さらに手近にいた

青年に声をかける。
「ちょっとすみません。現場で何があったのか御ご存ぞん知じですか？」
「え？　これ、テレビですか⁉　うわー、教授やライネスちゃん、見てるかなあ！」
　声をかけられたのは、スチームパンク風の腕時計を着けた若い青年だ。
「市民の方ですか？」
「あ、いえ！　ここにはたまたま観かん光こうで来てて……。ええと、俺も何が起きたのか分からないんですけど、寝てたら急に胸がざわめいて、オペラハウスの方を見たら、ドーンって音がして、そのまま壁が崩くずれ始はじめたんです！」
「胸がざわめいた？」
「ああ、ええと……虫の知らせって奴やつです！　はい！」
　何かを隠しているような素振りの青年に、レポーターは訝いぶかしげな視線を向けたが──
　オペラハウスの方に動きがあったのを察知し、青年にはそれ以上追及せず、小声で謝しゃ礼れいだけ告げて走り出した。
「今、内部に入っていた警けい官かん隊たいが出て来ました！　警官隊が何者かの身柄を拘束しています！　オペラハウスの爆ばく発はつは事故ではなく、事件だったという事でしょうか⁉」
　テレビカメラは現場から出て来た存在を映し出しており、ライブ中継でスノーフィールド全体に放映されている。
　すなわち、警察に手て錠じようをかけられて出て来た、時じ代だい錯さく誤ごな服を纏まとった青年を。

×　　　×

同時刻　スノーフィールド北西　　コールズマン特とく殊しゆ矯きよう正せいセンター

「やれやれ、厄やつ介かいな事になりました。まさか肝かん心じん要かなめの『セイバー』の召しよう喚かん場所でトラブルとは……。フランチェスカさんの管かん轄かつでしょうに、また彼女の悪い癖くせがでましたかね」
　溜ため息いきを吐きつつも、この程度のトラブルは想定内だとばかりに、各所に連絡を取り始めるファルデウス。
「私です、オペラハウスの件は、改装工事に使った塗料に引火した事故と……」
　そこまで言いかけた所で、思わず言葉を止めた。
「……失礼、また後ほど連絡します」
　通話を切り、無数に並ぶモニターのひとつ、市内のケーブルテレビの生中継を映した画面に目を向ける。
　そして、そこに映し出されていた存在を観みて、彼はまず、自分が敵てき対たい魔ま術じゆつ師しによる幻覚でも見せられているのではないかと疑った。
　恐らく、聖せい杯はい戦せん争そうを詳くわしく知る魔術師であればあるほど、同じ疑念を抱く事だろう。
　なにしろ、市内限定のケーブルテレビとは言え——
　テレビの生中継の中に、本物の『英えい霊れい』が映し出されていたのだから。

×　　　　　　　　　　×

オペラハウス前

　野次馬達は青年の時じ代だい錯さく誤ごな姿を見て、ざわめきながら互いの顔を見合わせた。
　どう見ても、オペラハウスでの公演の準備をしていた役者という出いで立たちである。

練習中にガスか何かが爆ばく発はつしたのではないか？

今朝けさ方がた報道されていた砂漠のパイプライン事故の事も考え、野次馬達の中にはまだ『事故ではないか』と思っている者も多い。

レポーターも、やはり事件ではなく、改装中の事故なのだろうかと思い始めていた。

ところが──

警けい察さつに連れられていた男が、手て錠じようを嵌はめたまま不意に跳ちよう躍やくし──その場で最もつとも高い車両である消防車の上へと僅わずか数歩で飛び乗ったではないか。

手を一切使わず、足の膂りよ力りよくだけで駆け上がった事に野次馬達は驚おどろき、警官達がざわめきながらテイザーガンを男に向ける。

そんな喧けん噪そうと騒そう音おんの中──

「聞け、民衆よ！」

男の声は、不思議と遠くまで響ひびき渡わたった。

「詩し吟ぎんと物語を奏でし不可侵の場である歌劇場を破は壊かいした事は、慚ざん愧きの念ねんに堪たえない。全すべては俺おれの不覚だ。言い訳はしない」

まるで脳のう味み噌そを直接揺らされているかのように、聞いた者達の心にその言葉の意味がすんなりと入り込んでくる。

まるで、魔ま術じゆつの誓せい約やくのように。

「だが、弁明の代わりに約束しよう！　我らが騎き士し道どうの偉大なる祖そ、アーサー・ペンドラゴンと、我が故郷に響ひびきし偉大なる騎士達の凱がい歌かに誓おう！　この歌劇場の破壊は、俺の名誉にかけて必ず贖あがなうと！」

市民達は、黙り込んでその話を聞いていた。

わずか30秒にも満たぬ、演説とも言えない演説。言葉の内容だけを

考えれば、『何を馬ば鹿かな』と一笑に付すような内容なのだが、男の口を通して放たれたその言葉は、不思議な真実味を伴ともなって人々の鼓こ膜まくと心を震わせる。
　本当に、オペラハウスの弁べん償しようなりなんなりやってのけてしまうのではないか？
　一体この男は何者なのだ？
「静せい聴ちよう、感かん謝しやする！　君達の人生が佳か絶ぜつなる歌声に満ちたものである事を祈ろう！」
　疑問による沈黙が場を支配する中、言いたい事だけを言って、男は満足げに消防車を降りた。
　そして、そのままパトカーに乗せられて連行されていく。
　誰だれもが、男の発していた空気に圧倒されて声を出せずにいた。
　ただ一人、先刻インタビューを受けていた若い青年を除いて。

　青年は拍手をしながら、腕に着けた時計に向かって目を輝かせて囁ささやく。
「凄すごい凄い！　かっこいい！　あれ、多分どこかの王様ですよね！　カリスマ半はん端ぱないですし！　もう、あれですよジャックさん！　貴方あなたの正体もどこかの王様って事にしましょうよ！」
　そんな声に対し、腕時計に化けたバーサーカーこと切り裂きジャックは、念話の中で大きな溜ため息いきを吐いて答えた。
『まあ、確かに貴族や王族が私の正体だという説も多々あるが……。敵対すべき英えい霊れいを初めて生で見た感想がそれというのは如何いかがなものだろうか？　今、アーサー王がどうこう、色々な真しん名めいの手がかりを残していったような気がするのだが？』
「やだなあ、正体は後で分かった方がワクワクして面白いじゃないですか！　そうだ、敵対しないでいっそ友達になっちゃいましょうよ。かっこいいですし」
『君が聖せい杯はい戦せん争そうの意味を理解しているのか本当に不安になってきたぞ？』

一組の英霊とマスターがそんな会話を紡つむぐ中、ひっそりと後から出て来た眼鏡めがねの女性が、手て錠じようをかけられないままパトカーへと乗せられていく。
野次馬達はその直前に現れた男の事で頭がいっぱいとなり、彼女の事など気付いてもない者が殆ほとんどだった。
ただ、その若いマスターこと、フラット・エスカルドスだけは奇妙な反応を見せる。
「あれ？」
『どうかしたのかね？』
「いや、今の人……気のせいかな？」
フラットは首を傾かしげたままパトカーを見送り、そのまま再び英えい霊れいとの念話に興じ続ける。
もっとも、念話といってもフラットは実際に声を出していた為ため、周囲の野次馬からは『独り言を言いながらはしゃぐ危ない奴やつ』として見られていたのだが。

かくして、僅わずか数分の出来事であったが、スノーフィールドの市民にとって、『謎なぞの男の演説』はとても印象深い出来事として深く心に刻み込まれた。
現場にいた野次馬のみならず、市内のケーブルテレビを通じて男の声を聞いた者達にも。

そして、使つかい魔まや監視カメラ越しに覗のぞいていた魔ま術じゆつ師し達の心にも。

×　×

同時刻　スノーフィールド北西　コールズマン特とく殊しゆ矯きよう正せいセンター

「やれやれ、想定外にも程があります」
『偽いつわりの聖せい杯はい戦せん争そう』の立役者の一人である男──ファルデウスは、厄やつ介かいな現状を前に嘆息を交えながら首を振った。
「隠いん避ぴもへったくれもない。召しよう喚かんされた時点で聖杯から魔術の秘ひ匿とくに関する知ち識しきも得ているでしょうに……」
　ケーブルテレビの中継映像と、使い魔から送られてきた映像を同時に観みながら、ファルデウスは頭を抱えた。
「協会と教会を敵に回す事は想定済みでしたし、魔術師達には喧けん伝でんしましたが……まさか、テレビに映って一般市民相手に賠ばい償しよう宣言する英霊がいるなど、誰だれが想像できますか？」
　横にいた部下のアルドラに愚ぐ痴ちるように言いながら、ファルデウスは小さく首を振る。
　使い魔を通して感じ取った気配だけでも、あの男が英霊だというのは間違いない。
「霊体化すれば手錠どころか、警けい察さつに見られる事すら無かったでしょうに、一体何を考えているのか……」
　次いでファルデウスは、男の後からひっそりと現れた眼鏡めがねの女に注目する。
「……タトゥーの女……」
　半日前に街まちにやって来た、令れい呪じゅに似たタトゥーを身体からだに施していた女だ。
「フランチェスカさんには報告した筈はずですけどねえ、オペラハウスに彼女が向かっていると」
　なんの為ために監視レベルを上げていたのかと嘆きつつ、ファルデウスは脳内にいくつかの疑念を浮かべる。
　──警けい察さつに捕まらせたのが、この女の作戦だとしたら？
　──セイバー担当の魔術師カーシユラはどうした？　やられたの

か？　あの女に？
　──警察署が我々とグルだと感づき、英えい霊れいを潜せん入にゅうさせたという可能性もあるのでは？
　──いや、それにしても、もう少しやり方があるだろう。
　疑問はつきないが、今は考えても答えはでないと判断し、ファルデウスは忌いま々いましげに天井を仰ぎ見ながら呟つぶやいた。

「……これも全すべて、あなたの手の平の上想定内というわけですか、フランチェスカさん」

×　　　　　　　　　　　　×

某ぼう所しょ

「ああもう！　想定外想定外！　完ッ全に想定外だよ！　でも、こういう事があるから人生って止められないよね！　楽しいよね！　アハハハハハ！」
　暗い部屋の中で、フランチェスカは一人笑わらい転ころげていた。
「キハ、キハハハハッ！　キハハ！　ああ、ああ、もうやだ、最ッッ高だよ！　ヤダヤダ、胆たん管かんと脾ひ臓ぞうがよじれちゃう！」
　仰向けに寝転がったままバタバタと足を振り、心の底からの笑みを浮かべている。
　同時に、フランチェスカは興こう奮ふんで頬ほおを紅こう潮ちょうさせながら叫んだ。
「あぁ！　あぁ！　今まで何度か聖せい杯はい戦せん争そうは見て来たけど、流石さすがに『警察に捕まったサーヴァント』なんていうのは初めて見たよ！　もう、なんであの媒体を使ったのにアルトちゃんが来なかったのかとか、どうでも良くなっちゃった！」
　その後、３分ほど笑い続けた後、涙を拭ふきながら起き上がり、水すい晶しょう玉だまに目を向ける。

水晶玉に映し出されているのは、その『セイバー』の英霊がパトカーを降ろされ、警察署内部へと連れられていく光景だ。
「ああ、そっか、そうだよねー」
　フランチェスカはウンウンと頷うなずきながら、楽しそうに楽しそうに独り言を紡つむぎ続つづける。
「少なくとも英えい霊れいの一人が警けい察さつにいるって事が分かったわけだし、これって他のマスター達が警察を狙ねらうって事だよね！　わあ大変！」

「私はここで御お菓か子し食べながら応援してあげるから、頑張ってね！　警察署長新米君！」

×　　　　　　　　　　×

同時刻　警察署

「あれはアーサー王……なのか？」
　署長室のブラインドを指で広げ、駐車場を覗のぞき見みる警察署長──オーランド・リーヴ。
　駐車場の中を『連行される』というには、あまりにも堂々と歩いているその『セイバー』らしき英霊を見て、署長は普段通りの仏頂面で溜ため息いきを吐きだした。
「クラン・カラティンのメンバーを送り込むのは間に合わなかったか」
「現場は市の中心部です。処理を行う前にパトロールの警官達が駆けつけたようです」
　女性秘書が淡々とした調子で報告した後、今後の展開について署長に問い掛ける。
「如何いかがしますか？　署内で始末を？」
「クラン・カラティンの面子メンツは署に集めておけ。……だがまず

は、共に連行してきたという女がマスターかどうかを調べろ。場合によっては共きよう闘とう関係を結ぶ事ができるかもしれん」
「共闘、ですか」
「フランチェスカが事前に言ってた情報が正しいなら、あれはアーサー王の筈はずだが……。奴やつはテレビで『アーサー・ペンドラゴンに誓う』と言っていたんだな？」
「はい、現場にいた警官からもそう報告を受けています」
「だとするならば、自分で自分に誓うとは妙な話だ。アーサー王に連なる英雄……円えん卓たくの一人という可能性もあるが……どのような出自の英霊にせよ、『セイバー』を相手どってこちらが無害で倒せるという事はあるまい。マスターを始末してから消えるまでの間に、一度でも宝ほう具ぐを撃うたれれば厄やつ介かいな事になる」
　署長は机の上で手を組み、口元を隠しながら部下に続けた。
「そもそも、その女が『セイバー』のマスター権を奪う程の魔ま術じゆつ師しならば、当然何かしらの策があっての事だろう」
「どうでしょう。単なる魔術的な素養がある素人しろうとという可能性も」
「アインツベルンの傀かい儡らいか」
　夕刻の時点で、アインツベルンのホムンクルスが街まちに入っているという報告は受けている。
　ファルデウスやフランチェスカも既すでに把握している事だろうが、その点に関してまだ情報交換はなされていなかった。
　ただ、アインツベルンが直接動いていないとしても、誰だれか外部の魔ま術じゆつ師しを雇い入れている可能性はあるだろう。裏切りを畏おそれるなら、何らかの方法で魔ま術じゆつ回かい路ろがあるだけの素人しろうとを意のままに操あやつっている可能性もある。
「アインツベルンではなく、フランチェスカが裏にいる可能性も考えておけ。奴やつは自分が楽しむ為ためなら５秒でこちらを裏切る女だ。ファルデウスも、我々と共きよう闘とう関係ではあるが、奴の上層部の意向次第では簡かん単たんにこちらを切るだろうしな」

署長は僅わずかに目を伏せ、砂漠で起こった英えい霊れい同士の激げき突とつと、その結果生まれた巨大なクレーターを思い浮かべながら言葉を続けた。
「なんにせよ、ギルガメッシュだけではなく、アレと互角に相対した英霊がいる以上、保険は多いに越した事は無い」
　そして、警けい察さつ署しょ長ちようとマスター両方の立場から今後を見み据すえ、秘書に対して淡々と指示を出す。
「女からも英霊からも監視の目を離すな。とりあえずは、事情を知らん刑事を選んで、妙な格かつ好こうをしたテロ容疑の不審者として取り扱え」
　最後に彼は、自分にとって最重要となる指示を付け加えた。
「……キャスターの監視を怠おこたるな。奴の事だ。これを知れば『その英霊を自分が取り調べる』と言いだしかねん」
「キャスター殿どのからは、先刻また『カジノで遊ばせろ』という要求がありましたが」
　秘書の淡々とした報告に対し、署長もまた表情の無い顔で即答する。
「却下だ。食事の質だけ要求通りにしておけ」
　そして、秘書が去ると同時に、こめかみに指をあてながら忌いま々いましげに呟つぶやいた。

「まったく……闘争中にカジノに行く英霊など居てたまるものか」

×　×

スノーフィールド市内　カジノホテル『クリスタル・ヒル』

　スノーフィールド市内でも随一の高さを誇るビル、『クリスタル・ヒル』。
　一流ホテルであると同時に、市内最大のカジノ設備を有しており、

その設備の広さと豪ごう奢しゃさではラスベガスの一流カジノにも決して見劣りはしないと言われている。
　もっとも、本当にカジノを楽しむ者はスノーフィールドの南の砂漠を越えた先にあるラスベガスに向かうのが普通なので、海外からの客が多いわけではなかった。
　それでも、スノーフィールドという新興都市に集う富ふ豪ごう達からはそれなりに愛されており、街まち最大の娯楽施設として、『クリスタル・ヒル』は堂々と街の中央に鎮ちん座ざしている。

　そんなカジノの一角で、ひとつの大勝負が行われようとしていた。
　もっとも、賭ける側からすれば、それは単なる座興に過ぎなかったのだが。
「赤に全すべてだ」
　無造作に言われた言葉により、山のようなチップがルーレット台の上を移動した。
　周りにいた高そうな服を纏まとった者達は、静かなどよめきと共に、大勝負に挑む者に注目する。
　視線の中心にいる男──アーチャーの英えい霊れいであるギルガメッシュは、可視化した状態で、さほど楽しくも無さそうにルーレット台の椅い子すに座っていた。
　優ゆう雅がに座ってはいるが、ディーラーの腕前を値踏みするかのような鋭い目つき。その様は、一流のギャンブラーというよりも、寧むしろこのカジノのオーナーであるかのような佇たたずまいである。
　普段とは違って髪かみを下ろし、金色の鎧よろいではなく派手な柄のスーツを身に纏っていた。
　カジノにやってくるや否いなや大勝ちを続けたギルガメッシュは、自然と人の目を集め、現在はちょっとした富豪でも躊躇ためらうような額のやり取りに到っている。
　やがて、ルーレットの球が赤の数字に落ちると同時に歓声と拍手が巻き起こった。

ギルガメッシュは僅わずかに口角を上げたが、それは大おお儲もうけをした事ではなく、純粋なる賞賛に機き嫌げんを良くしての事だろうか。
　彼は獲得した最高額のチップの数枚を無造作に握りこむと、通例の五十倍ほどの額のチップを置いて席を立った。
　そして、カジノガールからカクテルのグラスを受け取り、人の気配の薄れた場所で口に含む。
「……あまりいい酒ではないな」
　彼が独り言を呟つぶやくと、彼の頭の中に、申し訳無さそうな少女の声が聞こえてきた。
（申し訳ありません）
「お前が謝あやまる理由はない」
　酒を口に含んだまま、念話で答えるギルガメッシュ。
　彼の横に佇んでいるのは、マスターである少女、ティーネ・チェルクだ。
　この州では、21歳さい以下の人間がカジノに入る事は許されておらず、もし違反すればカジノ側にも厳きびしい罰則が科せられる。
　だが、誰だれもティーネがカジノ内に居る事を咎とがめてはおらず、それどころか、彼女の方に視線を向ける者すら存在していなかった。
「どうだ？　誰もお前の姿など見えてはおるまい？」
　周囲に人がいないからか、あるいは単に念話が趣味ではないのか、酒を味わう時以外は直接言葉を口にするギルガメッシュ。
（……はい、ギルガメッシュ様より賜たまわったこの指輪の御ご加か護ご、本当に素晴らしいものです）
　ティーネが小指に嵌はめているのは、シュメールの古代文字が刻まれた指輪だ。
「加護と言う程大したものではない。視線を避けるただの玩具おもちゃだ。有う象ぞう無む象ぞうの雑種はともかく、魔ま術じゅつ師しどもとサーヴァントの目を誤ご魔ま化かす程の力はない」

ギルガメッシュは砂漠に巨大なクレーターを生み出してから半日ほど、『自分の身ぐらいは自分で護まもれ』と言い残し、どこかに姿を消してしまっていた。
　魔力の繋つながりは感じていた為ため、消え去ったり契約解消をしたわけではないと考えていたが、何をしているのかは見当も付かなかった。
　夜になって、街まちの北側にあるティーネ達『土地守の部族』の本拠地に戻って来た時には、どこからか私服などを調達しており、下ろした前まえ髪がみの下に不ふ機き嫌げんそうな表情を浮かべて呟つぶやいた。
　──「この街の中で、最もつとも人と財が行き交う場を見せよ」

　結果として、ティーネは街一番のカジノ『クリスタル・ヒル』と、そこを取り囲む歓かん楽らく街がいへとギルガメッシュを連れて来る事になった。
　意図は汲くみかねたが、ティーネには逆らう理由もない。街の中心部は敵の拠点とも言え、普通の魔術師ならば行くのを躊躇ためらうだろうが──ティーネも状況は理解しつつも、不安はそこまで強くなかった。昨夜砂漠で見せたギルガメッシュの力を心の底から信じていたからであり、寧むしろ自分が足手まといになる事を不安に思った程である。
　そして、カジノの入口でティーネが係員に止められた時に、ギルガメッシュにその指輪を渡されたのだ。
「お前を視認できる者がいれば、それなりの眼がん力りきを持つ輩やからという事だ。聖せい杯はいを狙ねらう賊ぞく以外の扱いはマスターであるお前が決めよ。我オレの関する所ではない」
（……畏かしこまりました）
　ティーネはギルガメッシュに対して恭うやうやしく一礼した後、彼がこの１時間の間に成なした偉業について口にした。

（それにしても、この一時の立ち回り、実にお見事な腕前でした）
　するとギルガメッシュは、手元にある最高額のチップを指で宙に弾はじきつつ、つまらなそうな顔で答える。
「腕など関係ない。我オレの庭の全すべての財は我オレに帰結するのだ。賭と博ばくなど、我オレにとっては自分の金蔵から金きん子すを雑ざつ嚢のうに移し替えるのと変わらん。行為に意味はあろうと、遊ゆう戯ぎとして興じる理由は欠片かけらもない」
　現代の私服を身に纏まとった英えい霊れいは、改めて周囲の様子を観かん察さつしながら言葉を続けた。
「しかし……これが、この街まちで最もつとも富が行き交う場所か？」
（銀行や株取引所などはギルガメッシュ様の望む光景とは違うと判断し、除外しました）
「なるほどな。だが、悪くはない。この遊技場は貨か幣へいを更さらに別の貨幣へと移し替え、独自の世界を造り上げている」
（世界ですか）
「ああ、貨幣とは雑種に成長と堕だ落らくを同時にもたらした最高の発明品まじないだ。我オレも嫌いではない。それ程の逸品でありながら、最大の使い道が『浪費』とはなかなかに滑こつ稽けいな在り方よ」
　そんな事を言いながら、肩を竦すくめて笑うギルガメッシュ。
　どうやらこの英霊は豪ごう壮そうな物が好きなようで、現在の服装も、典型的な『ラスベガスで使い切れない大金を手に入れた若者が調子に乗った』という表現がぴったりくる雰囲気の代しろ物ものだ。
　妙に馴な染じんでいるギルガメッシュとは対称的に、ティーネは当然ながらカジノに入ること事態が初めてである。
　不安げに周囲を見渡しているティーネの耳に、ギルガメッシュの声が響ひびき渡わたる。
「苟いやしくも我オレの力を利用しようという女が、我オレ以外のものに萎い縮しゆくするな」

（申し訳ありません）
「言った筈はずだぞ。幼よう童どうは幼童らしく、目に映る物に目を輝かせておれば良い、まあ、我オレの前では世の全すべてが霞かすんで見えるだろうがな」
（仰おつしやる通りです）
　冗談とも本気ともつかない言葉の前に、ティーネはただ頭を垂れる。
　その様子を見たギルガメッシュが、やや不ふ機き嫌げんそうに目を細めて言った。
「我オレを敬うやまうのは構わん。当然のことだからな。だが、我オレを盲信はするな？　目を輝かせたなら、その眼めをもってして、己おのれの道を見み極きわめる事だ」
（？）
「いや、我オレに限らん。『神』だろうと、お前達の言う『大自然の恩恵』とやらであろうと、『先祖代々の悲願』だろうと同じ事よ。思考を放棄し、何かを崇あがめ縋すがる事は、魂たましいが腐り落ちているも同然だ。それと比べるならば、不快ではあるが、我オレを正面から踏み台にしようとする無礼者の方が、まだ相手のしがいがあるというものだ」
　先祖代々の悲願、と言われ、ティーネは自分の事を指摘されているのだと気付く。
　ギルガメッシュは身を強こわばらせるティーネに、酒のグラスを空にしながら問い掛けた。
「雑種の娘よ、お前はどちらだ？　この土地を魔ま術じゆつ師しどもから取り返すというのは、貴様が選んだ意志か？　選択を放棄し、命運の流れを言い訳にした他者の傀かい儡らいとしての言葉か？」
（……！）
「友がいる以上、我オレは本気でこの聖杯戦争戯れ事に興じるつもりだ。仮にお前が幼童らしさを捨て、この我オレを利用しようというのならば、少しは底意地を晒さらす覚悟をする事だな」

（私……は……）
　ティーネはそれ以上念話で答える事ができなかった。
　少なくとも今のティーネには、ギルガメッシュの問いに対する答えを持っていない。
　己おのれの命を賭ける覚悟はある。
　他人を殺す覚悟もあるし、既すでに手は汚した身の上だ。
　だが、それが自分の意志なのか、それとも運命の濁だく流りゆうに押し流されたものなのか、彼女自身にも分からなかった。そもそも、今ギルガメッシュに問われた事で、初めて思考を巡らせた懸けん案あんである。
「まあよい。ウルクの民ならばお前ぐらいの年とし頃ごろには心根が完成している者も多かったが、この時代の雑種にそこまで期待はすまい」
　ギルガメッシュもさして答えを欲していたわけではないようで、特にティーネに対して会話の続きの強要はしなかった。
　最後に一つだけ付け加え、彼は別のギャンブルのテーブルへと足を向ける。
「もっとも、自みずからの強固な意志で何かに魂たましいを捧ささげたならば、それはそれで賞賛しよう」
　誰だれか特定の存在でも思い出しているのだろうか、どこか過去を懐かしむような笑みを口元に浮かべながら。

「例えそれが、雑種共から見れば狂人と呼ばれる類たぐいの者だとしてもな」

×　　　　　　　　　　×

市内某ぼう所しよ　建築途中のビル内

　スノーフィールドの中心部からやや離れた所にある、建築途中のビ

ル。
　ただでさえ工事の人間がいなくなる夜間だが、現在は黒衣を纏まとった女━アサシンのサーヴァントが独自の結けつ界かいを張っており、一般人は入口すら認にん識しきできない状態となっている。
　身体からだを休めつつ、女アサシンは静かに目を閉じ、歯を強く嚙かみしめた。
　謎なぞの相手を前に、一度身を退ひいた自分の弱さを恥じたのである。
　如何いかなる秘技を用いたのか、『セイバー』の英えい霊れいが放った強きよう烈れつな一いち撃げきに巻き込まれつつも、彼女の身体には傷ひとつ付いていなかった。
　とはいえ、相手の戦力も宝ほう具ぐも、真しん名めいすらも分からぬ状況。
　一度退いたのは戦略的には正解だったのかもしれない。だが、敵を前に一度でも退いたという事実が、彼女の心を深い水みな底そこに押し沈めた。
　━あの男は、『山の翁我らが長』の事を知っていた。
　━如何いかなる存在だ？　偉大なる長おさ達の御み業わざを、奴やつはどこまで知っている？
　━……だが、あの男が聖せい杯はいに惑わされし者の一人である事は確かだ。
　━始末する手順を考えなければ。
　あの『セイバー』が、単なる強力な光の斬ざん撃げきを繰くり出だし続つづけるしか能の無い男ならば、そのままこちらの宝ほう具ぐを多用して始末する事はできただろう。それで魔ま力りよくを使い果たし消滅する可能性も高いが、それで後悔する事はない。
　まだ自分がマスターと魔力が繫つながっている事に気付いていない女アサシンは、そんな決意を固めながら男の対策を思い浮かべる。
　セイバーが召しよう喚かんされた瞬しゆん間かんから、不ふ穏おんな空気は感じていた。

彼が現れる直前、確かにあの光の中には、複数の気配が存在していたのである。

中には、明らかに人ならざる者の気配も含まれていた。

その後、人影はひとつに集約されたが──『妄想心音ザバーニーヤ』の腕かいなを弾はじき飛とばしたあの矢は、あの『セイバー』が撃うち放はなった物とは思えない。

更さらに言うならば、あの時の矢には、強力な毒が仕込まれていた。

修行の末に耐性を身につけた身体からだ故ゆえにまったく効かなかったが、常人ならば筋肉が麻ま痺ひして動けなくなる類たぐいの毒だろう。

毒を好んで使うような男には見えなかったし、何なに故ゆえ影より矢が飛び出したのかなど謎なぞは残るが、それ故に、迂う闊かつに戦う事はできない。

自分が未熟故に、相手に必然の死を呼び込めなかった。

偉大なる長達ならば、あの状況でも眉まゆひとつ動かさず、あの謎の英えい霊れいの命を刈り取る事ができただろう。

それができないのは、自分が未熟である証明に他ならない。

──あの男を、如何にして始末するべきか。

自みずからの毒耐性にも関わる宝具──かつて『静せい謐ひつ』と呼ばれた長が使用していた毒を散布するという手もあるが、それではターゲット以外の民衆も巻き込む事になる。

彼女は生前、暗殺者たるべく自分を鍛きたえ続つづけてきたが、全すべては信仰の敵を滅ぼす為ためだ。

無む辜この人間を虐ぎやく殺さつする為ではない。

街まちを歩く者達の中には、同胞もいるかもしれない。あるいは、今後心を改め、同胞となり得る者達がいるかもしれないのだから。

彼女はこの一日、魔ま術じゆつ師しの気配を探し続け、スノーフィールドに入り込んでいた魔術師を数多く相手取った。

異教徒である上、あからさまにこちらに殺意を向けてきた者の場合

──彼女はその命を刈り取った。聖せい杯はい戦せん争そうに関わっている魔術師でない以上、彼女の必殺のターゲットではない。だが、殺意ある術式を向けてきた相手を見逃す理由はなかった。

　敵対的ではなかった魔ま術じゆつ師し達は、こちらがサーヴァントだと分かるや否いなや『令れい呪じゆはなんとかするから、自分と契約しろ』『ともに聖せい杯はいを目指そう』『聖杯があれば願いは思うがままだ』と言い出す者達が殆ほとんどであり、そうした者達は舌を刺し、暫しばらく堕だ落らくの言葉を喋しやべれぬようにする。

　ただの物もの見み遊ゆ山さん気分の魔術師の場合は、『この街まちの儀式は世の流れの異端だ、関わるな』とだけ忠告してその場を立ち去った。

　時間さえあるならば改宗を勧める所だが、今の自分の身にそこまでの余裕はない。

　──この聖せい杯はい戦せん争そうの裏にいる者達を排除する。

　──私がやるべき事は、ただそれだけだ。

　彼女は気持ちを切り替えてビルの端に立ち、再び夜の街へとその身を高く躍おどらせた。

　魔術師の気配はまだ多く、尽きる事はない。

　その中から、この聖杯戦争の黒幕を探し出し、長おさ達への侮ぶ辱じよくに報むくいを与える為ために。

×　　　　×

同時刻　某ぼうビル　屋上

　そんな女アサシンを遠くから見守るマスター──ジェスター・カルトゥーレは、恍こう惚こつとした笑みを浮かべ、ゆっくりと拍手をしながら独り言を捲まくし立たてる。

「ああ……素晴らしい！　正しき撤てつ退たいだったにもかかわらず、君は自分の未熟さを恥じている。だが、それは王や騎き士しのプ

ライドだ。君が気に病む事ではない！　だが、そんな事にまで恥じ入るその姿は実に美しい！」
　ジェスターも、オペラハウス内の事は闇やみの中から観かん察さつしていた。
　完全に気配を遮しや断だんした状態で一部始終を目もく撃げきしていたが、確かにあのセイバーらしき英えい霊れいは些いささか異常な存在であると言える。マスターの目から見ても、宝ほう具ぐを除けばアサシンに勝ちの目は薄かっただろう。
「確かに君は正面からの撃うち合あいでは負けていたかもしれん。だが、恐れる事はない。君は暗殺者だ。影から隙すきを窺うかがい、背後から必殺の一撃を食らわせる、その不名誉によって君が信じる物の名誉を護まもる事こそが君の生き様だ！」
　勝手に彼女の戦い方を語り、勝手にその人生を賞賛する。
　ジェスターは一人で興こう奮ふんしながら、欣きん喜き雀じやく躍やくといった調子で闇の中でクルクルと舞い踊った。
「なんという純粋さか！　人という種にまだ、このような希望の果実が残されていたとは！　全人類が彼女の人生を観察し、理解し、心を通じ合わせて見習うべきだ！　いや、嘘うそだ！　私は今嘘をついた！　人間などに彼女は勿もつ体たい無い！　私だ、私こそが彼女を目で舐ねぶり、壊こわし、心を貪むさぼり尽つくすに相応ふさわしい！」
　身勝手極きわまりない事を叫んだ後、ジェスターは興こう奮ふんを鎮しずめながら、夜の闇やみに浮かぶ街まちの灯あかりを見下し舌なめずりをする。
「他の誰だれにもくれてやるものか。あの砂漠の凶悪な英えい霊れい達にも、新たに現れた剣士の英霊にもな。彼女をいたぶるのは許そう。どうか彼女を絶望させてくれ。だが、最後に彼女を喰くらうのは私でなければならない！」
　そこでジェスターは一度笑みを止め、目を細めながら夜の闇そのものに視線を向けた。

まるで、人の目には見えぬ何かを睨にらみ付つけるかのように。

「街を取り巻く星の従僕死の運び手め、貴様にもあの娘は渡さんぞ？」

×　×

ゆめのなか

　ライダーは心を持たない。
　人に死を運ぶシステム。それがライダーの本質だ。
　マスターである繰くる丘おか椿つばきが安らかな眠りに落ちている間、彼も夢を見る。
　今日きょう起こった出来事を思い返し、蓄積された情報を整理する為ための行為だ。
　そこに望みも後悔もない。
　聖せい杯はいのシステムに従い、マスターの安全と願いを護まもる為の情報整理に過ぎなかった。
　砂漠に様子を見に行ってからほぼ丸一日。
　ライダーの整理する情報は、昨日きのうと特に代わり映えはなかった。
　ただ、夢の世界の中に数羽の『鳥』が飛び始め、それを見た椿が『鳥さんだ！』と喜んでいた姿が繰くり返かえされる。
　──「ねえ、あの鳥さんも、あなたが出してくれたの？」
　──「ありがとう！」
　──「わたし、動物ってだいすき！」
　そんな無邪気な椿の言葉が何度も何度も繰り返される。
　昨日一日の中で、それがもっともマスターである少女が興奮した瞬しゅん間かんだったからだ。
　マスターが望んでいるのはそういう方向性だ。

ライダーはそれだけを確認し、自分の成なすべき事を成し始めた。
　椿の意見と万が一相違があった場合、すぐに方向修正できるように。
　ゆっくりと。ゆっくりと。
　それ故ゆえに、静かに、凶悪に──彼は街まちへと広がり始めた。

×　　　　　　×

市内某ぼう所しよ

　周囲に古めかしい本が山ほど積み上げられた空間の中、キャスターは机にドカリと足を乗せ、楽しそうに笑いながらノートパソコンの画面を見つめていた。
「ほー、パソコンで音符と歌詞を入力すりゃ、この絵の嬢じようちゃんが歌うってのか！　すげえ時代だなおい！　こりゃ聖せい杯はい戦せん争そうどころじゃねえぞ！」
　そんな事を言いながら暫しばらくパソコンを弄いじっていたが、やがてパソコンから、その高性能ソフトの性能を台無しにするような、奇妙な音程の音楽が聞こえて来る。
「……」
　自分でその音を聞いた後、試しに他の人間が作ったという歌と聴きき比くらべ、納得したように頷うなずいた。
「やれやれ、ガキの頃ころにヴァイオリンの先公にも言われたが、やっぱ俺おれに音楽の才能はねえらしいな。しゃーねえ、聖杯戦争に集中すっか」
　嘆息と共に、彼はパソコンの画面を切り替える。
　するとそこには、通常ならば決してインターネット上などには転ころがっていないような、機密性の高い情報が次々と現れた。

『使つかい魔まとして使用していた各種鳥類、全すべて仮死状態から

蘇そ生せいを確認』
　どうやらそれは、スノーフィールドに関係するとある組そ織しきの報告書らしく、魔ま術じゆつ用よう語ご混じりの文章がつらつらと並んでいる。
『使い魔としての機能は失われ、身体からだの各所に病的組織と思おぼしき斑点を確認』
『病原菌の類たぐいは発見されないが、僅わずかな魔力の痕こん跡せきを確認。マナともオドとも取れる奇妙な性質を持っている。回収し損ねた鳥の数羽も同様に蘇生したと推測される』
『事案のカテゴリをＣクラスに上昇。以降はファルデウス・ディオランド氏の管かん轄かつとする』
　そんな不ふ穏おんな文字の後に、更さらに奇妙な資料と、スノーフィールド市内のケーブルテレビの映像が映し出された。
『英えい霊れいの一人を警けい察さつが確保したとの情報。セイバーの英霊との情報あり』
「ははッ、マジか。とんだ野郎が出て来やがったな！」
　ケラケラと笑いながら、その録画映像らしき『情報』を再生するキャスター。
　すると、その演説する姿を観みて、目を見開き、椅い子すを前後にゆらしながら両手をパチパチと叩たたいて叫んだ。
「こりゃいい！　また厄やつ介かいな奴やつを抱え込む事になっちまったな、警けい察さつ署しよもよお！」
　そして、自分のマスターについて、苦笑交じりで憐あわれみの言葉を吐いた。
「署長の奴もかわいそうに。胃に穴でも空いちまうんじゃねえか？」
　他人事のように言いながら、キャスターは更さらに多くの情報を眺めつつ、あくまでも軽い調子で独り言を続ける。
「さてお立ち会い、楽しい７日間の始まりって奴だ！　神様が７日で世界を作ったってんなら、こいつらは７日でどんな世界を生み出すのかね？」

そして、少しばかり残念そうに、キャスターは笑ったまま首を左右に振った。
「せめて結末を見届けるまでは生き残りたいもんだが、俺おれにも７日しか時間がねえんだよなぁ」
　ギシリ、と椅い子すを強くゆらし、高く積み上げられた周囲の本を見ながら、キャスターはどこか自じ嘲ちよう気ぎ味みな笑みを浮かべて呟つぶやき笑わらう。

「かの偉大な文豪シエイクスピアなら手前で話を書かき綴つづるんだろうが、俺はせいぜい、桟敷さじき席せきから観かん客きやくとして楽しませてもらうとしようかね！　いい女と美味うまい飯めしつきでな！　ハハッ！」

カジノ『クリスタル・ヒル』

「黒に全すべてだ」
　ギルガメッシュが再びルーレット台に座り、先刻と同じような賭け方を続けている。
　そろそろカジノ側としても無視できない金額になりつつある中、その勝負に横から入り込む者が現れた。
「俺おれも、黒に全部だ」
　横の席から高額チップの山を置いた男を、ギルガメッシュはジロリと睨ねめ付つける。
「ほう。コバンザメの如ごとく我オレの財を掠かすめ取とるつもりか？」
「まさか、金自体に興味はないさ。ただ、あんたの運を分けて貰もらおうと思っただけだ」
　派手な眼帯をつけた男は、ニヤリと笑いながら言う。
「これから大仕事なんで、景気づけにな」
　次の瞬しゅん間かん、ルーレットの球が黒の数字に落ち、再び周囲から歓声が上がった。
「ありがとよ、験げん担かつぎはさせてもらった。『財』は後であんたの庭に返すとしよう」
　男はそんな事を言いながら、ギルガメッシュと同じ高額のカジノチップを握りこむ。
『庭に返す』。
　その物言いを聞いて、ギルガメッシュが問い掛けた。
「ほう、先刻の独り言を盗み聞いていたのか？」

「独り言？　違うだろ？」

　男は軽く笑いつつ、ギルガメッシュの背後に佇たたずんでいたティーネに視線を向ける。

「もう夜中だぜ。そこのお嬢じょうちゃん、そろそろ寝かせた方がいいんじゃないか？」

（……！）

　突然意い識しきを向けられたティーネが息を呑のんだ。

　しかし、他の客やディーラーには現在も自分の姿は見えていないようで、眼帯の男の言葉に首を傾かしげている。

「なるほど、ただの雑種ではなさそうだな。名乗るがいい」

　眼帯の男に興味が向いたようで、ギルガメッシュが傲ごう岸がん不ふ遜そんな笑みを浮かべて問い掛けた。

　すると男は、ゆっくりと立ち上がりながら答える。

「ハンザ・セルバンテス」

　彼はルーレット台から一歩離れ、脇わきに抱えていた上着を身に纏まとった。

　黒い上着の上にはいつの間にか十字架のネックレスがぶら下がっており、ディーラーや他の客達が『神父が何故なぜこんな場所に？』と再び首を傾かしげ始はじめる。

　そんな周囲の視線の中、ハンザと名乗った神父は、ギルガメッシュとティーネにだけ意味が解わかる言葉を口にした。

「到着が遅れたが、この戦争の監かん督とく役やくだ。宜よろしく頼む」

　そのままカジノチップの換金を済ませ、出口へと向かうハンザ。

　彼の傍そばにはいつの間にか四人の女性が付き従っており、カジノという場所も相まって、神父服との違和感が強い光景を生み出していた。

「結局、神父服のままカジノに入っちゃったね、ハンザさん」

　カジノを出た所で、四人の女性のうちの一人が、そんな言葉を口に

する。
「私達は私服だから良かったけど、やっぱり悪目立ちしてたよ、ハンザ」
　別の女の言葉も聞き、ハンザは苦笑しながら答えた。
「仕方有るまい。マスターの一人だとの情報が入っている魔術師お嬢ちゃんが、英えい霊れいらしき男とカジノに入って行ったんだ。着替える暇ひまなどありはしない。……だが、まあ、師し父ふ殿どのには内密にな」
　肩を竦すくめつつ、ハンザは女性陣に言った。
「お前達こそ、今すぐ正装に着替えておけ。昨日きのうは砂漠にクレーターが出来た。今夜も何が起こるか分からんからな」
　そして、自みずからは市内のとある施設へと足を向ける。
「俺おれは一足先に、監督役として挨あい拶さつに向かうとしよう」

「この巫山戯ふざけた戦争を引き起こした、黒幕の一人と思おぼしき男にな」

×　　　　　　　　×

警けい察さつ署しよ　取り調べ室

　まだ夜明けまでは程遠い頃ころ合あい。
　スノーフィールド警察署の取調室では、とある奇妙な取り調べが行われている。
「……で、名前は？」
　仏頂面をした刑事の言葉に対し、手て錠じようをかけられた貴族風の男は、椅い子すに堂々と座りながら答えた。
「呼び名が困るなら『セイバー』とでも呼んでくれ」
「セイバー騎兵刀だぁ？　随分とまあ、洒落しやれた名前じゃねえか。お前から没収したあの剣、どこのドラッグストアで見つけたん

だ？」
　皮肉交じりの問い掛け。
　セイバーと名乗った男は、その意味を理解した上で、楽しげに笑いながら言葉を紡つむぐ。
「黙秘権とやらを使うとしよう。お気に入りの剣なんだ。客が殺到して売り切れたら困る」
「……あまり舐なめた口をきくんじゃないぞ、王様だか騎き士しみたいな格かつ好こうしやがってよう」
「なかなか鋭いな。なるほど、この国の官かん吏りは優ゆう秀しゆうらしい」
　感心したように言うセイバーに、警けい官かんが苛いら立だたしげに言う。
「お前、頭がいかれてるのか？　それともクスリか？」
「そうだな。若い頃ころは豹ひよう変へん居こ士じなどと渾名あだなされた事もある。周りから見れば俺おれはどうやらおかしい部類だったらしいが、俺にとっては褒ほめ言こと葉ばだ」
「なるほど、それで、煽おだてられた豚が調子にのって、オペラハウスをぶっ壊こわしたってわけか？」
「確かに、俺は調子に乗っていたな。豪ごう華か絢けん爛らんな舞台上に呼び出された事に気付き、意い気き高こう揚ようしていたのは事実だ」
　真剣な表情になりながら、セイバーは警官に対して言葉を紡ぐ。
「君が俺に対してやるべき事は、あのオペラハウスを修しゆう繕ぜんする為ための費用なり必要な職しよく人にんの数なりを調べる事だ。教えてくれれば、償つぐないはする」
「そいつは民事で相手がたの弁べん護ご士しに聞くんだな。大体、お前みたいなイカレ野郎に金を払うあてなんかあるのか？」
「無い……と言えば嘘うそになるな」
「金づるでもいるのか？」
　セイバーという男が来ている装しよう束ぞくも、その辺りのパー

ティーグッズショップで買ったとは思えぬ程に本格的なものだ。それなりの値段はする代しろ物ものだろう。
　そう判断した取り調べ担当の警官は、相手から何かしら情報を引き出そうと試みているのだが──
「なんなら君が出資してくれてもいいぞ。恩は忘れない」
「ふざけるのもいい加減にしやがれ！」
　手の平で机を叩たたく刑事に、セイバーはふむ、と僅わずかに考え込んだ後に口を開いた。
「ただとは言わない。手品を見せる事ができる。恐らくは、君達の常じよう識しきの埒らち外がいにあるものが見れるぞ？」
「手品だぁ？」
「ああ、ハッキリ言っておくが、……すごいぞ？　……驚おどろくぞ？」
　子供のように無邪気な笑みを浮かべながら言うセイバーに、取調室にいた警官達は互いに顔を見合わせ、ニヤニヤしながら頭のおかしな男に付き合う事にした。
「はッ、だったら、その状態で何ができるか見せて貰もらおうじゃねえか」
　警けい官かんの一人の言葉にセイバーは微笑ほほえみながら頷き、手て錠じようが嵌はめられた両手を上げてヒラヒラと振ってみせる。
「手には何も持ってないな？　よく見ていてくれ」
「……ああ」
「……今から、俺が消える」
「あ？」
　相手の言葉の意味が解わからず、警けい官かん達が首を傾かしげかけた瞬しゆん間かん──
　セイバーの姿が霧きりのように掻かき消きえ、宙に残された手錠が派手な音を立てて机に落ちた。
「……ッ!?」
「なッ……」

全員がパニックを起こしかけ、腰の拳けん銃じゅうやスタンガンに手を伸ばしながら周囲に目を向ける。

「どこに消えた⁉」

「何が起こった！」

「ドアを絶対に開けるな！」

警官達の喧けん噪そうが続くが──彼らが一瞬男の椅い子すの方から目を離した次の瞬間、いつの間にか彼の姿は元の位置に戻っており、先刻までと違うのは、外れた手錠が机の上に転ころがっている点だけだ。

「……」

警官達は皆冷や汗を掻きながら、男に銃を向ける。

「う、動くな！　動くんじゃあない！」

「俺おれは一歩も動いていない。だから言ったろ？　驚おどろくぞ、と」

それを言い終えた後、冗談はここで終わりだとでも言うかのように、セイバーは顔から笑みを消し、真剣な表情で警官達に語りかけた。

「もちろん、動いて壁を抜けて逃げ去る事も、君達をどうにかする事もできた。あのオペラハウスから、誰だれにも見られぬまま立ち去る事もだ」

爛らん々らんと輝く眼光は、まるで警官達の魂たましいを喰くらうかのような威圧感を放っている。

その上で、セイバーはあくまで自分に敵意が無い事を証明しようと試みた。

「これは、俺なりの君達への『敬意』だ」

「敬意だと……？」

「破は壊かいの罪を償つぐなう償わぬ以前に、その咎とがを他者に背負わせるなど騎き士しの名折れだ。そんな真似まねをすれば、俺は敬愛する故国の祖そ王おうに永遠に顔向けできなくなるだろう。だからこそ、俺の力の証明をもって納得してくれ。俺に償うつもりはある。

だが、拘束される気はない。俺はただ、あの女が無実だという事を証言しに来ただけだからな」
　静かに語るセイバーの言葉に、警けい官かん達が黙り込む。
　男の言葉の内容はあまりに場違いで荒こう唐とう無む稽けいなものだが、有う無むを言わさずにそれを呑のみ込こませる威圧感が目の前の男から放たれ続けていた。
「君達を力で排除しないのは、仕事に忠実であり、民の平穏の為ために身を捧ささげる尊い志こころざしへのせめてもの敬意だ。夜明けまでは君達の拘束に従おう」
　敬意という単語がセイバーの口から放たれるが、警官達は、逆に畏い怖ふの視線で目の前の男を見つめていた。蛇へびに睨にらまれたカエルのように、その場から動く事もできない。
　それでもセイバーを睨み続けるのは、彼らが己おのれの使命に対して本当に誠実だからだろうか。
　自分にまだ敵意が向けられる事を心地ここち好よく感じたのか、セイバーはやや嬉しげに口を開いた。
「夜明けと共に俺おれは消えるが、まあ、今の内にどう誤ご魔ま化かすかを考えておいた方がいいぞ」
　最後に彼は、無邪気な笑顔と共に、やはり巫山戯ふざけているとしか思えない言葉を付け加える。

「なんなら、俺も一緒に考えようか？」

×　×

警けい察さつ署しょ　会議室

　机のモニターに映る取調室の様子を見て、署長はこめかみを指で押さえて溜ため息いきを吐いた。
「……どうやら『聖せい杯はい戦せん争そうの秘ひ匿とく』という意

い識しきは皆無らしい」
　そして、眉み間けんに皺しわを寄せながら、横に居た女秘書に指示を出す。
「今後の監視と取り調べから、通常の警官隊は除外しろ。クラン・カラティンのメンバーを当たらせる。今奴やつと同じ部屋にいた面子メンツには暗示で記き憶おく操そう作さ処しよ理りをしておけ」
「承知しました」
　秘書が一礼すると同時に、署長は会議室の机の上に置かれていた一振りの剣を手に取った。
「……これが、奴から没収した宝ほう具ぐか？」
「はい、ただの装飾剣にしか見えませんが……真しん名めいを解放していないからでしょうか」
「いや、これは、正しよう真しん正しよう銘めいただの装飾剣だ。魔ま力りよくのかけらも感じられん」
　そこまで言った所で、署長はふと気付く。
「……今、奴が霊れい体たい化かした時に、この剣は消えていたか？」
「どうでしょう……私もモニターに気をとられていて気付きませんでした」
「ふむ……」
　ファルデウスの調査部隊からの報告によると、昨晩ギルガメッシュはそれこそ何百、何千という宝具を『射出』したらしいが、現在はその欠片かけらすら残っていないとの事だった。
　無論ファルデウスが嘘うそをついているという可能性もあるのだが、やはり何らかの力が働いて射出した宝ほう具ぐを蔵に回収しているという可能性が大きいだろう。
「まだ聖せい杯はい戦せん争そうにはブラックボックスも多い。英えい霊れいと装備の関係についても一考する必要がありそうだな」
　実際に手にとって触れるその『セイバーの剣』をマジマジと眺めながら、署長は今後について思案した。

「後でキャスターに意見を聞くか……。まともな答えを持っているかは疑問だがな」
　そこで剣をテーブルに置き、会議室の入口へと足を向ける。
「マスターらしき女に会うとしよう」
「直接接触するのは危険では？」
「……下手へたにクラン・カラティンのメンバーを接触させて何かを仕込まれても厄やつ介かいだ」
　不安を覗のぞかせる秘書に対し、署長は凜りんとした調子で答えた。
「自みずから矢面に立つ覚悟が無ければ、最初からこのような戦術は選ばんよ」

×　　　　　　　　×

同時刻　署内別区画

　取り調べを終え、俗に『ジェイル』または『ポリスセル』と呼ばれる留置所的な場所に押し込まれたアヤカは、余程疲れていたのか、眼鏡めがねをかけたまま仰向けでベッドに横になった。
　鉄格子ではなく壁と扉とびらに囲まれ、完全に個室状態となっている。
　アヤカが予想していたよりも遙はるかに綺き麗れいな部屋であり、狭いという点さえ除けば、テントによる野宿や、安宿で蚊かやダニを気にするよりも遙かに快適と思える環境だ。
　アメリカでは日本のようにハッキリと留置所と拘置所、刑務所の区別があるわけではないという話を聞いた事があったが、アヤカも詳くわしく知っているわけではない。
　どのみち、暫しばらくは出られないという事には変わりないのだ。
　彼女は諦あきらめて、天井を仰いで休息を取る事にする。

だが、興こう奮ふんの為ためかなかなか寝付く事ができず、先刻の取り調べの内容ばかりが頭を過よぎる。

　自分が何者で、どこから来たのか、どうしてあの場所に居たのか、日本人のようだが、アメリカに滞在している目的はなんなのか。

　単純な問い掛けで容疑者の過去を探る質問の数々。駆け引きもなにもない至し極ごく当然の行為ではあるのだが、アヤカにはそれは苦痛で仕方なかった。

　━ああ、嫌だ。嫌だ。

　━思い出すのも億おつ劫くうだ。

　━いや、違う。億劫なんじゃない。

　恐ろしいから思いだしたく無いだけだ。

　この国の広い土地を旅している時は、過去を忘れる事ができた。

　罪から逃れる事ができた。

　━暫しばらく、見てなかったのに……。

　先刻、オペラハウスに現れた赤いフードの少女。

　彼女のフードの下の微笑ほほえみを想像して、アヤカは全身に汗を滲にじませた。

　この署内を連行される間に、何度かエレベーターに乗せられたのだが、正直気が気では無かった。エレベーターに乗り込むなど、何年振りの事か解わからない。そもそもが、エレベーターのある建物には極力入らないようにしてきたのだ。

　エレベーターを目にした時点で、『赤いフードの少女』が背後に立つと知っていたからだ。

　警けい官かん達には見えなかったようだが、アヤカはこの署内のエレベーターの中でも、確かに彼女の気配を感じていた。恐怖に青ざめながら、絶対にそちらを向かないようにしていただけだ。

『自分とあの少女は他人だ。全すべては他人事だ』と、自分自身に言い聞かせながら。

　結局の所、赤いフードの少女が『幽ゆう霊れい』なのか、それとも自分の意い識しきが見せている『幻覚』なのか、あるいはまったく別

の『何か』なのかは理解できない。
　アヤカにとって重要なのは、赤いフードの少女が見えるという事実だけだ。
　その少女から逃れる為ためにこの街まちに来た筈はずなのに。
　何故なぜ、こんな事になってしまったのだろうか。
　改めてそれを考えようとした所で、状況に変化があった。

「大丈夫か？　随分と疲れた顔をしているな」

　突然、視界の隅にオペラハウスの男が現れたのである。
「!?」
　ビクリとして飛び起きたアヤカに、いつの間にか部屋の中に入っていた男が声を掛けた。
「そう驚おどろくな。霊体化すれば壁ぐらい抜けられる。取り調べが一いつ旦たん休憩になってね。ここから少し先の独房に入れられたんで、君の様子を見に来たんだ」
　狭い独房の中に現れた男は、どうやら本当に霊の類たぐいらしく、外部から閉ざされた空間の中にあっさりと入り込んできた。
　オペラハウスの時よりも遙はるかに距離が近づいており、アヤカは警けい戒かいするように立ち上がり、壁に背をつけながら口を開いた。
「……干渉しないでくれって言った筈だけど？」
「君は俺おれのマスターじゃないんだろう？」
　無愛想に尋たずねるアヤカに、男は質問を返した。
「……そうだよ。私は貴方あなたのマスターなんかじゃない」
　突き放すように断言するアヤカ。
　だが、男はその答えを聞き、悪戯いたずら小こ僧ぞうのように笑いながら答えた。
「なら、君の命令に従う必要はないという事だな！」
「なッ……」

「これで俺は君に干渉し放題というわけだ。身の回りの世話を焼くから覚悟しろ？」
　楽しげに言う男に、アヤカはうんざりしながら首を振る。
「頼むから、放っておいてくれ」
「民たみ草ぐさの願いはできるだけ叶かなえてやりたい所だが、そうもいかない理由がある」
「理由？」
　訝いぶかしむアヤカに、英えい霊れいの男は単刀直入に告げた。
「君のそのタトゥーに仕込まれた術式のせいだと思うが……令れい呪じゆを持っていた魔ま術じゆつ師しの代わりに、君と魔力の『線』が繋つながってしまったらしい」
「……は？」
　唐突な物言いに、アヤカが眉まゆを顰ひそめる。
「つまり、君に魔力を貰もらって、俺はこの世に顕けん現げんしている形になる。マスターとサーヴァントの関係でもないのに、君と俺は一いち蓮れん托たく生しようになってしまったというわけだ」
　あっさりと告げた後、呆ぼう然ぜんとしているアヤカに男が続けた。
「君が居なければ、マスターから魔力を得られずにこの世に顕現する事もできなかっただろうな。恩に着るよ、ありがとう」
　男が握手しようと差し出した手をパシリと払いのけ、アヤカは相手を睨にらみ付つける。
「……恩に感じてるなら、放っておいてくれ」
「それは断る！　世話を焼くぞ。お節介もしよう。君が泣いて嫌がっても色々と助けてやる。君が死ねば俺も消えて、聖せい杯はいが手に入らなくなってしまうからな」
「私を何から助けてくれるって……？」
「無論、他の戦争参加者だ。君がマスターであろうが無かろうが、俺と魔力の線が繋がっている以上、自然と狙ねらわれるだろうからな」
「最悪だね……」

頭を抱えるアヤカに、男は言った。
「前向きに考えればいい。例えば全身の皮を剝はがれて塩をすり込まれたまま同じ状況になっているのよりは、痛みが無い分マシだろう？」
「極端な事を言うなあ……」
「良く言われるよ。なにをするにしても極端な奴やつだとな」
　褒ほめられたかのように照れる男に、何を言っても無駄だと悟ったのか、アヤカは別の話題を切り出して相手を探ることにした。
「あんた、貴族か何かでしょう？　警けい察さつに逮捕されるとか、プライドが許さないんじゃないの」
「山の上の城に幽ゆう閉へいされていた時と比べればマシさ。自由に外を出歩けるんだからな。それに、君が俺おれの代わりに罰を受ける事になったとすれば、その方が余程プライドに傷が付く。ああ、だが、別にプライドの為ために君を助けるんじゃないぞ？」
「だから助けなくていいっていうのに……」
　呆あきれて溜ため息いきを吐くアヤカに対し、男は消防車の上で演説した時とはまるで違う、軽い調子で言葉を紡つむぐ。
「俺の事はとりあえずセイバーと呼んでくれ。恩人に名乗らぬままなのは不名誉ではあるが、いずれ機を見て真しん名めいは教えよう」
　そして、セイバーは改めてアヤカに向き直り、真剣な調子で問い掛けた。
「君も教えてくれないか。どうしてあんな場所にいたのか。その刺青いれずみはなんなのか」
　だが、一いつ瞬しゆん難しい顔をした後、首を振ってもっと重要な疑問を口にする。

「……すまない、まずは君の名前を教えてくれ」

×　×

署内　通路

　セイバーとアヤカが独房内で会話している事を知ってか知らずか、やや歩速を早めながら独房区画へと向かう警察署長。
　だが、エレベーターの前に来た所で、女性署員がひとりこちらに駆けてきた。
「あ、こちらにおられましたか！　署長に来客がいらっしゃってます」
「後にして貰もらえ……いや、待て」
　政治家などならば後回しにする事も考えたが、ファルデウスや繰くる丘おかという可能性もある。
　とりあえず名前を聞いてからだと判断した署長は、一度足を止めて署員に問い掛けた。
「……誰だれだ？」
「それが……教会の神父と名乗っているんですが、どうにも怪しい人で……」
　神父。
　眉まゆを顰ひそめると同時に、ひとつの可能性に思い至る。
　やがてそれは嫌な予感となり、次に署員が紡つむいだ言葉で的中する結果となった。

「なんでも、『日本から盗まれた杯さかずきについて話があると言えば解わかる』の一点張りでして……」

×　×

市し街がい地ち

　警けい察さつ署しよに隣りん接せつする中で、一ひと際きわ高いビルの屋上。

女アサシンは静かに呼吸を整えながら、眼下に見下ろす警察署に意い識しきを集中させた。

街まちで情報を調べた所、あのセイバーの英えい霊れいは警察署に連行されたらしい。

ならば内部に入り込み、今度は万全の状態から暗殺を実行するまでと考えていた女アサシンだったが、警察署を観かん察さつした結果、恐ろしい事実に気付く。

警察署の敷地にはいくつもの魔ま術じゆつ的てきな結けつ界かいが張られており、正規の入口から入る者以外を完全に拒こばむ要よう塞さいと化していた。

あるいは、正面入口から気配を消して入ろうにも、そうした隠いん術じゆつ破りの結界が五重、六重としこまれている。

昼間、傍そばを通り過ぎるだけでは気付かなかった。

それ程までに巧みに、周囲の魔ま術じゆつ師し達からも隠す形で結界が形作られていたのである。

更さらに集中して観察した結果、建物の内部からいくつかの『魔術師の気配』を感じた。

──信じられない。

彼女にとっての『異教徒』が圧倒的に多い街ではあるが、数多くの宗教から『異端』であると見なされている魔術師が、ひとつの街の司し法ほう・行ぎよう政せい組そ織しきを手中に収めているという事実は、彼女にとってにわかに信じがたい事だった。

時と計けい塔とうの権力を考えれば、現代では珍しい事では無いのかもしれない。

だが、少なくとも時計塔と縁えんを持たぬ彼女の中では衝しよう撃げき的てきな事実だった。

宗派は違えど、自みずからと同じ神を崇あがめる者達もこの街には存在する。

そんな中で、異教徒ですらない魔術師達が、街を裏側から支配しようとしているのだ。

見逃すわけにはいかなかった。
ここまで大掛かりな魔術結界を張る組織が、同じ街で行われている聖せい杯はい戦せん争そうに関わっていないなどとは考えられない。
何より、あの中には『敵』であるセイバーの英霊も存在しているのだから。
彼女は大きく息を吸い込み、敵陣の中へと突入する決意をする。
彼女の時代の長おさは、あらゆる結界を舞い踊るかのように擦すり抜ぬける事が可能だった。
自分がそこまで器用ではない事は分かっている。
己おのれが成なせるものは、先代までの技術を模も倣ほうした技を駆使し、戦う事だけだ。
壁にぶつかり砕くだけ散ちるまで、走り続ける事だけだ。
それで構わない。
未熟な自分にも何かが成せるのならば、それだけで自分の人生に意味はある。
いや、意味も要いらない。
何も考えずに、ただ、突き抜けるのみだ。
彼女は静かな決意を黒い衣の下に吞のみ込こみ、大きく空へと跳ちよう躍やくした。
落下と同時に、結けつ界かいを全すべて強行的に遮しや断だんする。
相手に存在は気付かれるだろうが、構わない。
敵はすべて排除する。
そう決意した彼女は、ひとつの砲ほう弾だんと化して警けい察さつ署しよの領域へと飛び込んだのだ。

数秒後、上空に張られていた結界が悉ことごとく撃うち砕くだかれ──
たった一人で戦い抜くと決めた、狂信者の戦いくさが幕を開ける。

ひとつだけ彼女に誤算があったとすれば──
　彼女は決して一人ではなく、凶悪な援軍が一人いたと言う事だろう。
　もっとも、それは彼女が決して望まぬ存在だったのだが。

×　　　　　　　　×

カジノ『クリスタル・ヒル』前　歓かん楽らく街がい

「カジノか、いいなあ」
　オペラハウスの前でインタビューを受けてから、目が冴さえてしまって歓楽街をブラブラしていたフラット。彼は煌きらびやかな大通りの中で、一ひと際きわ輝くカジノのネオンに目を奪われていた。
　そんな彼を、腕時計となったままの切り裂きジャックが窘たしなめる。
『この州ではカジノは21歳未満は禁止だった筈はずだが』
「あー、じゃあ俺おれは入れないや。残念だなあ。久しぶりに遊びたかったのに」
『前にどこかで入った事があるのかね？』
　意外そうに尋たずねるジャックに、フラットは過去を懐かしみながら答えた。
「俺の故郷ってモナコなんですけど、近くの海に浮かんでる凄すごく大きなカジノ船があるんですよ。そこで遊んだ事があるんです。本当はそこも年ねん齢れい制せい限げんがあったんですけど、ちょっと色々あった後に、そこのオーナーが特別に遊ばせてくれて……。代わりに、俺が使える魔術を見せて欲しいっていうから、いくつか見せたりしましたけど」
『……本当に、私の知ち識しきにある魔ま術じゆつ師し像とは正反対の生き方をしているな、君は』
「やだなあ、そんなに褒ほめないで下さいよ」

『いや、もう言うまい。それが君の生き方なら好きにしたまえ。他の魔術師に始末されないように祈るばかりだ』
　呆あきれたように言うジャックだが、やや興味を引かれた部分があったらしく、カジノ船の話を続ける事にしたようだ。
『だが、魔術を見たいとは……そのカジノ船のオーナーも魔術師だったのか？』
「うーん。元はまあ、そうだったらしいんですけど」
『……「元は」？』
　妙な物言いをするフラットに、腕時計の文も字じ盤ばんが僅わずかに傾く。
「ええ、魔術師から死し徒となったんですよ、その人」
『死徒？』
「吸きゅう血けつ種しゅ……ああ、吸きゅう血けつ鬼きって言えば解わかりますか？」
　唐突な事を言い出すフラットに、ジャックはますます文字盤を捻ひねる。
『確かに私の正体が吸血鬼だったという説もあるにはあるが……。いくら魔術師とはいえ、些いささかＢ級オカルトが過ぎるのではないかね？』
「現代に蘇よみがえった切り裂きジャックの方がよっぽどＢ級オカルトですよ？」
『ぐぬう』
　英えい霊れいが聖せい杯はいから与えられる知識は、聖杯戦争を戦う為ための必要最低限の知識だ。
　ジャックが知らないという事は、聖杯は『戦争に吸血鬼の情報は関係無い』と判断したという事なのかもしれない。
　フラットはそう考え、ジャックに対して簡かん単たんに説明する事にした。
「吸血鬼は実在しますよ。まあ、魔術的には吸血種とか死徒って言うんですけど。吸血種に噛かみつかれてから数年がかりで同族になった

人もいれば、不老不死とか根源とかを目指して自分からなった魔術師上がりの人とか、いろいろいるんですけどね」
『魔術師が吸血鬼になれるのか』
「ここだけの話、時と計けい塔とうの偉い人の中にも一人居るんですよ。魔法使いの死徒の人が」
『なんと……』
　驚おどろいたように言った後、ジャックはフラットに皮肉の言葉を投げかける。
『だが、君ならば「格かつ好こういいから」という理由であっさり吸血鬼になりそうだな』
　だが、フラットから帰ってきたのは、存外に真面目まじめな返答だった。
「確かに格好いいですけど、自分がなるのはちょっと。吸血衝しよう動どうとか色々ありますし」
『意外だな。君にもそんな常じよう識しきめいた倫りん理り観かんがあったとは』
「それにほら、効率悪いですから」
『……？』
　疑問の色を浮かべるジャックをよそに、フラットは街まちの一角を指差しながら言った。
「ああほら、噂うわさをすればなんとかですよ」
『どうした？』
　フラットの視線の先には、警けい察さつ署しよに向かう大通りの歩道に立つ、一人の青年の姿がある。
　どこか鋭い空気を纏まとったその青年を見ながら、フラットは事もなげに言い放った。

「あそこで警察署の方を見て笑ってる人……、あれ、死し徒との人ですよ。多分」

×　×

警察署　ロビー

「あんたがオーランド・リーヴ署長か？」
　深夜の警察署のロビーには、一般人の姿は殆ほとんどなく、夜勤の警官や連行されてきた不良少年などが時々通り過ぎていくのを見かける程度だ。
　スノーフィールド中央署のロビーは通常の警察署よりもかなり広めに作られており、三階部分までが吹き抜けとなっていて、二階部分と三階部分の廊下が署内のデザインのひとつとして機能している。
　カリフォルニアなどにある洒落しやれたデザインの警察署とは違い、荘そう厳ごんな城を無理矢理近代化させたという印象のあるロビーだ。
　妙な圧迫感を与えるロビーの中心で、その男は独特な存在感を放っている。
　派手な眼帯をした、神父服の男だ。
　そんな男が警察署にいるというだけで、自然と数少ない通行人の目を引いていたが――署長は、正体の分からぬ神父を前に堂々とした態度で答える。
「確かに、私がリーヴだが……君は？」
「ハンザ・セルバンテス。スノーフィールド中央教会に派遣された……『監かん督とく役やく』だ。こう言えばお解わかりだろう？　署長どの」
「何の話か分からんな」
　無表情で答える署長に、ハンザはニヤリと笑って両手を広げた。
「これだけの結けつ界かいを張っておいて、魔ま術じゆつはただの趣味だの、部下が勝手にやった事だの言い張るつもりならそれも結構。あんたのサーヴァントが敗退しても、逃げ込む場所が無くなるだけの事だ。あんたも命は惜しいだろ？」

「……」
　聖せい杯はい戦せん争そうの監かん督とく役やくは、戦争の進行を見届け、魔ま術じゆつや奇跡を一般の目から秘ひ匿とくすることなどが主な仕事だ。だが、その他に『敗退者の保ほ護ご』という仕事も担っている。
　サーヴァントが敗やぶれてもまだマスターをやる気があるのならば、同じくマスターを失い消滅を待つだけのサーヴァントと再契約をして戦線に復帰するという手もある。それを防ぐ為ために、サーヴァントを失ったマスターを始末しようとする魔ま術じゆつ師しも少なくない。
　だが、もうやる気がないマスターだろうと、他の参加者に狙ねらわれる可能性はある。そんな敗退マスターの身柄を保護するのも聖堂教会と監督役の仕事である。
　もっとも、後から『実はマスターだったから助けてくれ』と言っても教会としては保護する方針らしいので、いましがたのハンザの言葉は単なる嫌味やハッタリの類たぐいでしかないのだが。
　だが、署長はその台詞せりふを更さらに穿うがった見方で受け取ったようで、警けい戒かいするように目を細めた。
　そんな署長に対し、ハンザは軽い調子で肩を竦すくめる。
「おっと、カマをかけているわけじゃないぞ、オーランド・リーヴ署長。あんたが時と計けい塔とうとは無縁のはぐれ者だというのは既すでに分かってる。ついでに言うなら、不自然に人材収集をやらかしてるだろう？　三十人前後、あんたの口利きで近きん隣りんから色んな警官を集めているな。今回の戦争が始まるずっと前からだ。状況証拠だけでも十分だろう？」
「……僅わずか数日でそこまで調べ上げるとはな。大したものだな」
「凄すごいのは教会の情報屋連中さ。俺おれを褒ほめる暇ひまがあったら、次の日曜礼拝の時に寄付金を弾はずんでくれ」
　皮肉なのか本心なのか、そんな軽口を叩たたく神父に、署長は言った。

「どの道、ここで話す事でもあるまい。応接間に案内しよう」
「それは遠慮しておこう。あんたらは教会と連つるむ気はなさそうだからな。わざわざ得体の知れない連中の臓はら腑わたに飛び込む気はない」
　そのまま、ロビーの椅い子すにドカリと座るハンザ。
　彼はロビーの柱のひとつに取り付けられた薄型テレビを見て、言った。
「さっきからオペラハウスの事故だか事件の映像が流れてるが、何か妙な奴やつが映ってたな。あれが本物の英えい霊れいだというなら、あんたらはもう儀式の隠匿に失敗してるわけだ。言わんこっちゃない。泣いて謝あやまる気があるなら、第八秘ひ蹟せき会かいのお偉いさんの電話番号、教えてやるぞ？」
　笑ってはいるが、敵意丸出しの挑発をしてくるハンザに対し、署長は氷のように冷たい表情のまま答えた。
「心配は無用だ。あれの正体を正しく認にん識しきできる一般人などおるまい」
「そうかい、じゃあ話題を変えよう。あの英霊と、そのマスターはここにいるのか？」
「……そうだと言ったら？」
「教会の情報にないサーヴァントとマスターだ。顔だけでも確認しておきたくてな。できる事なら、挨あい拶さつも済ませよう。マスターが女性なら、食事に誘ってジョロキア・ジャンバラヤでも御ご馳ち走そうしたい所だ。あんたはともかく、横にいるお嬢じようさん、君も一緒にどうだ？」
　突然話を振られ、無表情のままチラリと署長の方を見る秘書。
　署長は大きく溜ため息いきを吐くと、あくまで自分の要求しか話さないハンザに対して言い放つ。
「断言しておこう。我々の儀式は冬ふゆ木きで行われたそれとは違う。聖堂教会お前達と足並みを揃そろえるつもりはない。大人しく神に祈りでも捧げていたまえ」

「話が済んだら、あんたに言われなくても教会で祈らせて貰もらうさ」
　あくまで軽口を叩たたくハンザに、署長が言った。
「祈る場所は教会じゃない。今、この場でだ」
「ほう？」
「……『教会の情報にないサーヴァントとマスター』……と言ったな」
　署長の声から、熱が徐々に失われていく。
「どこまで情報を摑つかんでいる？　我々も知らぬ情報を知ってるのか？　その情報格差を埋めるまでは、君を帰すわけにはいかん」
「悪いが、枕まくらが変わると眠れないんでね。取りに帰ってもいいか？」
「ハンザ・セルバンテスと言ったな。お前はミスを犯した」
　相手のジョークに耳を貸さず、ただ、淡々と言葉が続けられた。

「このロビーが既すでに私の臓はら腑わたの中だとは考えなかったのか？」

　署長の声色が、一段と冷ややかなものに変化する。
　同時に、ハンザは気付く。
　先刻までちらほら見え隠れしていたロビーの一般人が、綺き麗れいに姿を消している事に。
　──人払いか。
　一般人どころか、先刻まで屯たむろしていた警けい官かんや受付の人間等も綺麗にロビーから退出していた。
　代わりに、ロビーに続く複数の入口から、ぞろぞろと複数の警官達が現れる。
　皆、冷静な表情でハンザの事を見み据すえており、彼を取り囲むように立ち並ぶ。
　──こいつら……普通の警官じゃあないな。

佇たたずまいや歩き方だけで、それが『一般的な訓練を受けた警官』とは別物であるという事は理解できた。同時に、彼らが洗脳などされているわけではなく、明確な意志を持ってこの『人払いされた空間』に立っているという事も。
　周囲の状況を見て、ハンザは椅い子すに座ったまま署長の顔を睨ねめあげる。
「俺おれを拘束するとしたら、罪状はなんだ？」
「先刻『あんたも命が惜しいだろ』と言ったな。……私は君の言動に命の危機を感じてね。立派な脅きよう迫はくと受け取ったよ」
「……ドラマの見過ぎだぜ、署長さんよ」
「君に黙秘権はない。供述が法廷に持ち込まれる事もない。弁べん護ご士しの立ち会いも、公選弁護人の選出も君には認められない。覚悟しておく事だな」
　署長の皮肉の言葉と共に、警けい官かん達が徐々に距離を詰め始めた。
「聖堂教会我々を敵に回すのは、得策じゃあないぞ？　俺おれは君達に手も足も出そうにないが、そんな奴やつを一方的に虐いじめるのは、組そ織しき同士の関係にヒビが入る」
「同感だ。だからこそ、君と友好的に情報を共有したいと思っている」
　友好とは程遠い、冷たい視線でハンザを見下ろす署長。
「善良な一般市民をそんなに脅おどかさないでくれ。大声出して泣きわめくぞ？」
　ハンザもまた、挑戦的な笑みを浮かべながら、署長を睨にらみ付つける。
　一触即発か、と思われたその瞬しゆん間かん──
　署長の携帯が振動し、場の空気が一瞬緩ゆるんだ。

　眉まゆを顰しかめながら、署長は一歩下がって携帯を取る。
　当然ながら、ハンザに対して警戒を緩める事はない。

慎重に受話器を耳に当てると、そこからは場違いに明るい声が聞こえてきた。
『よう、元気にしてるか、兄弟！』
「用なら後にしろ。取り込み中だ」
キャスターの声を聞き、署長はあっさりと言い放つ。
だが、キャスターもまた、署長の話を聞かずにハッキリと告げた。
『今すぐ、そこから逃げな兄弟。それか、全力で迎むかえ撃うつ準備をしとけ。念話は兄弟が完全に遮断してやがるからよ、こうやって文明の利器で連絡してやったわけだ』
「……何？」
『俺もお前に簡かん単たんに死なれちゃ困るんだよ。今そこに、やべえのが向かったぜ？』
「どういう事だ。何故なぜ君にそんな事が分かる？」
『そいつぁ企業秘密だ。まあ、せいぜい頑張りな！』
そのまま通話が途切れ、署長は眉を顰める。
「まったく、扱いづらい男だ……」
だが、デタラメや嫌がらせの電話とも思えなかった。
キャスターの情じよう報ほう蒐しゆう集しゆう能のう力りよくが異常だという事は、署長も既すでに理解している。
だが、リアルタイムで警告を行うような事態まで把握しているとはどういう事だろうか？
署長が疑問に思うよりも早く──
ゾワリ、と、
署長の全身の血管が歪いびつな悲鳴を上げた。
正確には、彼の身体からだに走る魔ま術じゆつ回かい路ろが。
──結けつ界かいが……糞くそ！　どういう事だ！
幾いく重えにも張られた、対魔ま術じゆつ師し用の結界。
それが、正しくミサイルの直ちよく撃げきを受けたシェルターのような勢いで、一いつ瞬しゆんにして破は壊かいされたのである。
物理的に例えるならば、美術館や銀行等の警けい備びシステムを一

度も作動させずにかいくぐり、侵入した事すら気付かせぬまま盗みを働く。それが、署長の想定していた結界破りだ。
　だが、この破られ方は、爆ばく弾だんなどで直接建物の壁に入口となる穴を無理矢理開けられたようなものだ。
　つまり、結界を破った者は『結界を超こえた事を感知されても構わない』と考えているという事であり──侵入ではなく、まさしく『襲しゅう撃げき』にやってきたのだと。
「貴様の仲間か⁉」
　ハンザを睨にらみ付つけるが、当の神父は素知らぬ顔で肩を竦すくめた。
「そうだと嬉うれしいんだがな」
　ちらり、と、天井を見上げながらハンザが言った。
「俺おれの仲間が来るなら正面玄関か裏口だ。空の上じゃあない」
「……」
　──こいつ、感じ取っているのか？
　署長にも、結界が破られたのは警察署の上部だという事は認にん識しきできた。
　だが、何かの攻撃を受けたにしては、衝しよう撃げき音おんや振動などは特に感じられない。
　一体何が現れたのか。
　そう考えていたのも束つかの間ま──

　建物内の電気が全すべて消え、深い暗くら闇やみが署長達を包み込んだ。

×　　　×

独房

「やっと名前を教えてくれたか。ありがとうアヤカ。この恩はいつか

返そう」
　様々な手て練れん手て管くだを用いてようやく名前を聞き出したセイバーは、楽しげに笑いながら質問の続きを口にした。
「それで？　君はどうしてこんな街まちに？」
「私は……」
　この男を黙らせるには、全すべて話した方が早いかもしれない。
　そう考えたアヤカは、諦あきらめて自分の体験してきた事を話そうとした。
「元々日本で、いろんな所を逃げ回ってたんだ」
「逃げ回っていた？」
「何年そうしてたのかは分からない。色んな場所を転々としてさ……」
　忌いま々いましげというよりも、どこか怯おびえるように唇を噛かみながら、過去を遠回しに語るアヤカ。
「最後には結局、最初の街まちに戻ったんだけど、その街にある、森の中の変な城で……」
　そこまで語った所で、不意に独房の灯あかりが消失した。
「え？」
「うん？」
　セイバーとアヤカは同時に周囲を見渡すが、独房の扉とびらに付けられた小さな窓の外にも灯りは存在しておらず、警けい察さつ署しよ全体が停電しているのだと分かる。
「……停電かな。すぐに非常電源に切り替わると思うけど」
　暗くら闇やみの中、やや怯えながら言うアヤカに、セイバーの警戒混じりの声が響ひびいた。
「……ただの停電ならな」

×　　　　　　　　　　×

警察署　内部

非常電源とメインの配はい電でん盤ばんを立て続けに停止させ、署内を完全に停電させた女アサシンは、その闇に紛まぎれて風のように警察署内を駆け抜ける。
時折フラッシュライトを持って歩き回る警官や刑事とすれ違ったが、足音ひとつたてず、光そのものを避けながら、蠢うごめく影と化して署内を縦じゆう横おう無む尽じんに駆け巡る。
──あの英えい霊れいを相手どるには、こちらも命を賭ける必要があるだろう。
彼女はそう覚悟しつつ、署内の長い通路を疾はしり続つづけた。
特殊な訓練を積んだ女アサシン。移動に光など必要ない。
風の動きや魔ま力りよくの流れ、反はん響きようしあう風の音、身体からだ全体で周囲の状況は視えている。
同様に、彼女は周囲の空間のエネルギーの流れも感知することができた。
これも、偉大なる先せん達だつが生み出した御み業わざのひとつである。
魔力や水、電気や風といったエネルギーの流れを感知し、人工物の中だろうと大自然の中だろうと、自みずからの身体からだの一部であるかのように感じられる、異常なまでに鋭敏な知覚能力。
──『瞑想神経ザバーニーヤ』。
彼女はその力を用いて、電源の場所を察知し、破は壊かいする事ができた。
まずは魔ま力りよくの色が濃い場所を目指し、階段を滝が流れ落ちるかのように駆け下りた。
そして、この警けい察さつ署しよ内で、現在最もつとも色濃く魔力の流れが乱れている場所に辿たどり着つく。
すなわち、警察署で最大の広さを誇る空間、正面玄関のロビーへと。

「……！」
　女アサシンがロビーに飛び込むのとほぼ同時となるタイミングで、ロビーの中央にいた制服姿の男が、光源魔術をロビーの各照明の位置に合わせる形で展開した。
　──魔ま術じゅつ師し！
　そう判断した女アサシンは、咄とっ嗟さに己おのれの肉体を霊れい体たい化かさせる。
　だが、屈指の暗殺者である彼女とて、光の速さには敵かなわなかった。
　消えるまでの僅わずかな一いっ瞬しゅん、女アサシンの姿が魔術師を含めた数名の目に焼き付けられる。
　光に溶けいる影。
　そうとしか形容できぬ、亡霊にも思える何かが、確かにドアの入口に存在していたと。

「何……？」
　──サーヴァントだと……!?
　令れい呪じゅを持ったマスターである警察署長には、僅か一瞬の事ではあったが、それが『サーヴァント』であるという事を確認した。
　──セイバーではなかった……。一瞬だが、奴やつの身体能力……アサシンか!?
　マスターは、聖せい杯はい戦せん争そうに参加しているサーヴァントを直視すれば、ある程度の『情報』を得る事ができる。
　それは頭の中に魔術書の一頁ページや羊皮紙の一枚などの形で、当人の意い識しきに最適化されるのだが──当然真しん名めいなどは分からないとしても、大まかな身体能力や一部の特性を読み取る事は可能だ。
　一瞬だったので殆ほとんど解析する事はできなかったのだが、相手が気配を遮断し、隠おん密みつに長たけているという特性は察知できた。

消える直前に視みた黒ずくめの姿を見ても、アサシンのサーヴァントと見るのが妥当だろう。
―くッ……早速、テレビでセイバーを見たマスターがアサシンを送り込んできたというわけか……。
サーヴァントは霊体化している為ため、こちらから物理的に干渉する事はできない。
だが、ずっと霊体化したままこの場に残るという事も考えづらい。
英えい霊れいが霊体化している間は、一切の攻こう撃げき手段、防御手段を取る事ができない為、もしも魔術師やマスターに霊体を攻撃する術すべがあった場合、一方的に消滅させられる恐れがあるからだ。
それ故ゆえに、敵対サーヴァントや敵対マスターの周囲で霊れい体たいで在り続ける事は得策ではない。
霊体化と実体化の切り替えの瞬しゅん間かんも、刹那せつなの戦いの中では致命的な隙すきとなりえる。
―恐らく、既すでに実体化して、どこかに潜ひそんでいると考えた方がいいだろう。
ここは吹き抜けのロビーであり、せり出した二階、三階部分の通路などを含め、隠れる場所は無数に存在していた。
署長はそう考え、周囲に警けい戒かいする。
令れい呪じゆは手袋で隠している。自分がマスターだとバレている可能性はどのぐらいだろうか。
最悪、セイバーではなく自分を始末しに来たという可能性も考慮し、次の一手を読もうとしていた署長だったが―
いつの間にかロビーの隅の柱に移動していたハンザの一言が、次の一手を大幅に狭めた。
「ほお、今のがあんたのサーヴァントか？　署長殿どの」

あっさりと放たれた一言。
それがどのような意味を持つかを即座に理解し、署長は忌いま々い

ましげにハンザを睨にらみ付つける。
「貴様……監かん督とく役やくの領分を超こえているぞ……」
「教会の監督役は要いらないんだろう？」
　意地の悪い笑みを浮かべながら、ハンザは腕を組んで柱に寄りかかった。
　これから何が起ころうと、自分はただの傍ぼう観かん者しやだと主張するように。
「か弱い一般市民を脅おどしてきた権力者への、ささやかな抵抗って奴やつだ」

　──異邦の司祭か。
　あれが聖せい杯はいの存在を確かめに来た監督役だというのならば、アサシンにとっては警戒すべき対象だ。
　だが、本当に聖杯の真偽を確かめる為ためだけに派遣された中立存在ならば、彼は街まちにいる通常の異教徒と同じであり、命を狩る対象ではない。
　だが、その監督役に『あんたのサーヴァントか？』と声を掛けられた『署長』とやらについては見過ごせない。
　署に張られた幾いく重えもの結けつ界かい、そして、最初から地位のある人間がマスターであるという事を鑑かんがみれば、憲政に疎うとい彼女でも簡かん単たんに推測できる。
　この警けい察さつ署しよの『署長』らしき男は、恐らくこの聖せい杯はい戦せん争そうの根幹に関わっている人間だと。
　彼女の心中で優ゆう先せん度どが組み替えられ、現時点では、『オペラハウスの騎き士し』ではなく、目の前の『警察署長』が現時点での最優先ターゲットとして認定された。
　まずは捕らえ、この聖杯戦争を仕組んだ黒幕達の情報を引き出す。
　処断するのはその後だと決意し、彼女は三階の通路部分、階下から死角となっている部分に実体化し、署長に対して狙ねらいを定めた。
　そのまま、魔ま術じゆつ師しを捕らえるのに最適な宝ほう具ぐの使

用体勢へと移行する。

　この時点ではまだ、彼女は敵を署長一人だと考えていた。
　次の瞬しゆん間かん、彼女の身に、凶悪な魔力を帯びた矢が迫るまでは。

「……ッ！」
　完全に死角から撃うち放はなたれた一矢。
　闇やみを駆ける為ために身につけた鋭敏な感覚がなければ、直ちよく撃げきするまで攻撃された事にも気付かなかった事だろう。
　空間内の魔力のざわめきと、弓を引くようなかすかな衣きぬ擦ずれの音を感じ取り、とっさに自分が狙われている事を察したのだ。
　あり得ぬ程に関節を曲げて身を捩よじり、女アサシンは自みずからの心しん臓ぞうに迫っていた矢を躲かわす。
　避けた矢はそのまま通路を直進し──射手から見て最奥にあった壁へと突き刺さった。
　それと同時に、凄すさまじい破は壊かいが巻き起こる。
　壁が爆ばく散さんし、鉄筋コンクリートに穿うがたれた穴からその奥の部屋が顔を覗のぞかせる。
　如何いかなる作用において壁を爆散させたのかは分からない。
　ただひとつだけ確かなのは──
　それが、人、もしくは並の英えい霊れいを仕留めるには十分な威力の一撃だったという事だ。

×　　　　　×

独房

「……なに、今の音？」
　遠くから、しかし確実に同じ建物内から聞こえて来たと思おぼしき

破壊音。
　僅わずかに床が振動しているのも感じながら、アヤカは暗闇の中で不安げに言った。
「もしかして、あんたを狙って誰だれか来たんじゃないの」
「その可能性もあるな」
　セイバーがそう言うのと同時に、周囲に淡い光が灯ともる。
　ホタルのような柔らかい光が独房の中に満ち、キョトンとしたアヤカの顔を照らし出した。
　ビー玉程度の大きさの水球が宙に浮いており、そこから直接光が滲にじみ出だしている。
「あんた、魔ま法ほうも使えるの……？」
「魔法じゃない、魔術さ」
「違いが良く解わからないんだけど」
「人の手で時と手間をかければ成せる事を再現するのが魔ま術じゅつ。現代人の手では決して届かない奇跡を起こすのが魔ま法ほう……という事らしい。俺おれも魔ま術じゅつ師しじゃないから詳くわしくは知らないが、科学が進歩するにつれて魔法の多くは魔術へと変化したようだ」
　他人事のように話すセイバーの言葉に、アヤカは光源を放つ水球を見ながら首を傾かしげた。
　するとセイバーは、やや申し訳なさそうに首を振る。
「そもそも、これは俺が出したわけじゃないしな……」
「？　それってどういう……」
　アヤカが疑問を口にするより先に、セイバーは不意にその姿を消した。
「あ、ちょっと……」
　光る水球と共に独房に残されたアヤカは、大きく溜ため息いきを吐きながら再びベッドに横になる。
　すると、僅わずか数秒で再び身を起こす結果となった。
　独房の扉とびらがガチャリと開き、そこから普通にセイバーが顔を

出したからだ。
　手に鍵かぎ束たばをジャラつかせながら、ニヤリと笑う。
「こっそりと鍵かぎを借りてきたぞ」
「借りてきた……って」
「牢ろう破やぶりか、ふふ、なんだかワクワクするな！」
「騎き士しの名誉はどこに行ったの？」
　呆あきれたように言うアヤカに、セイバーは楽しそうに目を輝かせながら断言する。
「もちろん、歌劇場の弁済はするつもりだ。夜明けまでここの官かん吏り達に軟禁されるという約束も破るつもりはない。だが、その前に君を安全な場所に逃がす」
「……この独房が一番安全って可能性は？」
「どうかな。この警けい察さつ署しよは妙だ。あちこちに結けつ界かいが張られているそうだ」
　伝聞系の言い方をするセイバーに、アヤカは眉まゆを顰ひそめた。
「いるそうだって……誰だれが言ってたの？」
　するとセイバーは、不敵な笑みを浮かべながら独房の扉を開けた。
　外には看守達の気配はなく、他の独房の囚人達のざわめきや抗議の叫びだけが聞こえてくる。
　アヤカの手を引き、光る水球を前方に浮かべながら独房区画の外へと歩き出す。
「ま、色々あるって事さ」
「良く解らないけど……結界ってどういうこと？　この警察署に魔術師がいるの？」
「それどころか、建物の構造からして既すでに結界的なものらしい。最悪、この建物にいる全員が魔術師って事も考えてたが、さっきの取り調べの様子じゃ、それは無さそうだ」
　そして、やや真剣な表情になってアヤカに告げる。
「だが、この警察署が魔術師の為ために作られた事は確かだ。もしもそれが聖せい杯はい戦せん争そう絡がらみだとしたら、このトラブル

はあまり良い状況じゃないな」
「どうして？」
「最初は俺おれと君に共きよう闘とうを持ちかけるつもりか、何かを探るつもりだったかもしれないが……。今の振動が他のサーヴァントの襲しゆう撃げきだとしたら、共闘を結ぶ前の君を、敵に回る前に始末するかもしれない。その根拠もあるらしい」
「根拠って？」
　アヤカの問いに暫しばらく黙っていたセイバーだが、独房から暫しばし離れた所で誰だれかに抗議するように、小声で独り言を呟つぶやいた。
「おいおい……そういう事は先に言ってくれ。知っていたら、扉とびらを斬きってすぐに出てた」
「？　誰と話してるの？」
「ああ、悪い。独り言みたいなものだと思ってくれ」
　軽く謝あやまった後、アヤカの問う『根拠』について、やはり伝聞系の答えを口にした。

「今の独房の天井にな……。空気の組成を操あやつって、中にいる人間をいつでも酸欠で殺せる術式が仕込まれていたそうだ」

×　×

ロビー

　彼女は身を躱かわすと同時に、それを撃うち放はなった者の姿を確認した。
　警けい官かんの制服を纏まとった、まだ若い女性。
　その背には制服とはまったく調和していない矢筒を背負っており、通常装備の拳けん銃じゆうや警棒ではなく、自分の身長ほどもある長弓を構えていた。

━宝ほう具ぐ！
　━あの女が……『警察署長あの男』のサーヴァント。
　ひと目でその弓が『宝具』であると感じた女アサシンは、『署長と契約したアーチャーのサーヴァントが、警官の制服を着て署員に紛まぎれていた』と判断した。
　一見すると普通の魔ま術じゆつ師し程度の気配だが、英えい霊れいである事を隠いん避ぴするスキルを持っているのかもしれない。令れい呪じゆを持つ正規のマスターが見ればーいち目もく瞭りよう然ぜんなのだろうが、自分には魔術師のマスターなど存在していないので確認のしようがなかった。
　そう考えた女アサシンは、相手をサーヴァントだと断定して、即座に反撃の体勢に移る。
　着地と同時に移動すべく身体からだの重心をコントロールしていた女アサシン。
　彼女が着地した瞬しゆん間かん━
　靴くつ底ぞこが床を擦こする僅わずかな音が、彼女の真横から聞こえてきた。
「！」
　女アサシンは悪寒を感じ、弓の女から離れるでも近づくでもなく、全力で真上に跳ちよう躍やくする。
　身体を縦に半回転させ、そのまま吹き抜けの天井に着地した彼女が目にした者は、やはり警けい官かんの制服を纏まとった黒人の男が、薙なぎ刀なたのような形状の武器を横よこ薙なぎに振るう姿だった。
　もしも前後に動いていれば、あの刃やいばに捕らわれていた可能性はある。
　━あの刃も……宝ほう具ぐ……。
　━どういう事だ……？
　疑問に思いつつも、彼女はそのまま天井を蹴けり、薙刀の男を蹴りつけた。
「ぐむッ！」

間かん一いつ髪ぱつ、薙刀の柄つかで防いだものの、そのまま通路の奥へと蹴り飛ばされる。
—手応えが無い。
—英えい霊れいではないのか？
混乱しつつも、女性警官の弓を警戒しながら別の位置に着地する女アサシンだったが—
通路の先に目を向けた時、吹き抜けの反対側の壁にある、休憩室への扉とびら。
その前に下り立った瞬間—扉を勢い良く突き破り、巨大な盾を構えた大男が突進してきた。
「！」
大盾で自みずからの全身をカバーしながら、砲弾のような勢いでこちらに迫る巨漢。
だが、女アサシンが危機感を覚えたのは、その２ｍ近い男の巨体ではなく、同等に巨大な盾が纏っていた魔ま力りよくの密度だ。
—やはり、これも宝具…ッ！
だとするならば、単なる突進と考えるのは危険だ。
何かしらの効果が付随すると考え、女アサシンは跳躍し、吹き抜けたロビーの天井から下がる巨大な照明の傘へと着地する。
そして、彼女は状況を正確に認にん識しきした。
三階と二階部分の通路。そしてロビーに、いつの間にか三十名前後の警官達が集まっている。
騒さわぎを聞きつけて集まった警官達ではないのは一いち目もく瞭りよう然ぜんだ。
何しろ、彼らの手には様々な形状の武具が握られており、そのいずれもが異常に濃密な魔力を纏っていたからだ。
複数の異なる魔力の波動が滲にじみ出だし、部屋全体の空気を歪ひずませている。
即すなわち、それはひとつの事実を示していた。
彼らが持つ三十前後の武器の数々。

そのすべてが紛まぎれもなく宝ほう具ぐであるという、聖せい杯はい戦せん争そうの概念を覆くつがえしかねない事実を。

「……一いつ般ぱん職しよく員いんは裏手から避難させました。結けつ界かいを発動させたので、多少の騒さわぎは野次馬から隠いん匿とくできます」
　秘書がそう言うと同時に、後からロビーに来た警けい官かんの一人が、署長に長い布包みを渡す。
　署長はその中から己おのれの為ための武器を取り出した。
　それは、黒塗りの鞘さやに包まれた、一振りの日本刀。
「……面白い事になっているな」
　警官達が時じ代だい錯さく誤ごな武具の数々を装備している光景を見たハンザが、ヒュウ、と楽しげに口笛を鳴らした。
　署長が視線で指示を送ると、警官達の数人がその武器をハンザに向けた。
「見られたからには、ますます君を帰すわけにはいかなくなった。我々が奴やつを始末するまで、そこで大人しくしていて貰もらおう」
　照明器具の上からこちらの様子を観かん察さつしている黒衣の人影を睨にらみつけ、署長が淡々と言葉を紡つむぐ。
「始末……？　あれはサーヴァントだろう？　あんたのサーヴァントはどうした？」
　ハンザの問いに、署長は簡かん潔けつに答えた。
「情報を流すつもりはない。だが、逆らう気がなくなるように見せてやろう」
「何をだ？」
「魔ま術じゆつ師しの無様な闘とう争そう──」
　小さく呟つぶやいた後、署長は小さく息を吸い、呼吸と体内魔力を整えながらハッキリと告げる。
「上じよう級きゆう英えい霊れいどもを撃うち倒たおす為に練り上げし、外げ法ほう紛まがいの武の力だ」

「……」
　照明器具の上から眼下を眺め、女アサシンも呼吸を整えていた。
　その光景に、確かに彼女は驚おどろきはした。
　だが、彼女の心を、その信仰を憔しよう悴すいさせるには到らない。
　英霊は七柱、ないしは六柱。
　聖杯から与えられた知ち識しきの中で、何故なぜか英霊の人数については曖あい昧まいだった。
　だが、彼女は最初から気にしていなかった。
　例え聖杯を狙ねらう英霊が百であろうと千であろうと、自分のやる事は変わらない。
　たまたまこの場に、三十体程集まっているというだけの話だ。
　──全すべて、排除する。
　あっさりと決意すると同時に、彼女は小さく呟く。
　自みずからの意志で背負った業ごう。偉大なる先せん達だつから借り受けし力の名を。

「……狂想閃影ザバーニーヤ……」

　刹那せつな──彼女の顔を覆おおうフードの隙すき間まから、黒い闇やみが広がった。

「……ッ！」
　署長はアサシンらしき英えい霊れいから伸びた『闇』が自分に迫り来るのを見て、即座にその場を飛とび退すさる。
　間かん一いつ髪ぱつ。
　署長の立っていた場所に『闇』が到達し、大理石の床をチーズのように抉えぐり抜ぬいた。
　闇は黒衣のアサシンの頭部を中心として、ロビーの各所に広がって

いる。
　各種『宝ほう具ぐ』を持った警けい官かん達も、唐突な攻こう撃げきに対してそれを防ぐか躱かわすのが精一杯だった。
　と、所長の側にいた警官の一人が、腕をその『闇』に切り裂かれた。
「ぐあッ……！」
『闇』は触手のように男の腕に絡からみつき、そのまま身体からだ全体を持ち上げようとする。
「……」
　署長が無言のまま跳ちよう躍やくし、一いつ瞬しゆんで刀を抜き放った。
　艶なまめかしい輝きを見せる刀身が、鋭い刃鳴りと共に宙を走り、そのまま部下の腕に伸びた闇やみを両断する。
　確かな手応えと共に『闇』が切断され、その場にハラリと舞い落ちた。
　地面に着地した部下の横に落ちたそれを見て、署長は『闇』の正体を知る。
　──これは……頭とう髪はつか……!?
　自みずからの髪かみそのものを爆ばく発はつ的てきに膨ぼう張ちようさせ、己おのれの手足以上に自在に操あやつる魔ま技ぎ。
　そう考えたが、抉えぐられた床を見て、署長は僅わずかに考えを修正した。
　──いや、これはもはや、髪の毛ではない。髪を刃やいばの域にまで変質させているな。
　──なるほど、これが奴やつの宝ほう具ぐか。
「……まるで、ギリシャ神話のメデューサだな」
　だが、タネが分かれば対処できぬわけではない。
　一対一の勝負ならば、あるいはここに集まったのがただの警けい官かんの類たぐいならば、こちらの動きは完全に封じられていたかもしれない。

しかし、現在この場にいるのは、宝具の加か護ごを受け、英えい霊れいを屠ほふる事を目的として鍛たん錬れんを積んだ者達だ。
アサシンとの『正しよう面めん衝しよう突とつ』で負けているようでは、とても英えい雄ゆう王おうやまだ見ぬ騎兵ライダー、そして今日きよう顕けん現げんしたセイバーといった上級クラスのサーヴァントと闘とう争そうする事など不可能だろう。
「なるほど、試金石としては最高の相手だ」
署長は改めてアサシンを見み据すえ、周囲の部下達に凛りんとした声で指示を出した。
「恐れるな。ロビーを破は壊かいしても構わん。なんとしても奴を制圧しろ」
そして、署長は、右手に刀を持ちつつ、左手で懐ふところから銃を取り出した。
「君達が破壊する前に、私はこの区画を使い切る」
通常弾頭の代わりに、特定の呪じゆ文もんの『起動式』となる弾丸が籠こめられた呪じゆ具ぐを。
署長は一転攻勢の合図とばかりに、その銃を天井に向かって撃うち放はなった。
アサシンに向けてではない。
その周囲の天井に仕込んだ、オーランド・リーヴの『警察署魔術工房』の罠わなを起動させる為に。

仕込まれていた魔術が発動し、警察署のロビーの結けつ界かいが一時的に強力になり、まるで異界化したかのように外部から隔絶される。
この中で戦車が砲ほう撃げきを行ったとしても、外部に音ひとつ漏もれる事はないだろう。
同時に、アサシンの周囲に数体の魔ま獣じゆうと数十の悪あく霊りようが召しよう喚かんされ、明確な敵意を持って、署長が指定した『侵入者』に襲おそいかかる。

──あの神父も攻撃対象とするべきか。
署長はそう考え、ロビーの片隅にちらりと目を向ける。
するとそこでは、眼帯姿の神父が状況を意に介さずに歩き回り、受付の上にあったサイフォンからコーヒーを紙コップに注いでいるのが見えた。
──ええい、奴やつは後回しだ。
忌いま々いましげに舌打ちをした後、署長は改めて天井近くから髪かみの触手を繰くり出だしてくるアサシンへと目を向けた。
召しよう喚かんされた悪あく霊りようが宙を舞い、召喚された豹ひようのような魔ま獣じゆうが天井を逆さまに歩きながらアサシンを包囲している。
一斉に飛びかかるのに合わせ、射程の長い宝ほう具ぐを持つ者達で悪霊と魔獣ごと撃うち貫つらぬく。
力押しではあるが、英えい霊れいにこちらの攻こう撃げきが通じるかどうかを測るのには十分だろう。
そして、署長が使い魔を操あやつる呪じゆ言ごんを短く唱となえるのと同時に──悪霊達が一斉にアサシンへと躍おどり掛かった。
警官達が一斉に各々の宝具を構える。
その瞬しゆん間かん──

「……夢想髄液ザバーニーヤ……」

ロビーにいた誰だれも、黒衣の暗殺者の小さな呟つぶやきを聞きとる事はできなかった。
直後、アサシンの喉のどから漏もれた『歌声』を聞く事ができたのも、たった一人しか存在しない。
「……うおッ⁉　なんだ？」
停電の為ために温ぬるくなっていたコーヒーを口にしようとした所で、ハンザは思わずコップを落としかけた。
そのまま耳を押さえて、『音』の発生源に目を向ける。

するとそこでは、英霊が四方に伸ばした髪の隙すき間まから、歌声を響ひびかせているのが確認できた。
ハンザは目を細めながら、冷静にその『音』について分析する。
「こいつは……。普通の奴には聞こえない音域だぞ？」
彼の呟き通り、署長をはじめとする者達にその音は聞こえていなかった。
だが、アサシンの歌声は、確かに彼らの身体からだにも響いていたのである。
そして、その結果だけが彼らの目に映り始める。
「ぐ……？」
署長は、自みずからの魔ま術じゆつ回かい路ろが尋じん常じようならざる熱を発しているのを感じ取った。
同時に、酩めい酊ていしたように周囲の景色が回り始める。
──なんだ？　何をされた？
それを確認するよりも早く、変化した状況が署長達に襲おそいかかる。
「なッ……！」
警けい官かんの一人が魔ま獣じゆうに襲おそいかかられ、手にしていた曲刀でその牙きばを受け止めている。
一匹だけではない。アサシンに向かわせた筈はずの悪あく霊りようと魔獣が、それぞれ暴走したかのように周囲の警官達を襲い始めているではないか。
それだけではない、他の警官達も皆、自分と同じように目め眩まいに似た感覚を覚えているらしく、足元がどこかおぼつかない状態だ。
「これは……魔ま術じゆつ回かい路ろを暴走させられたのか……⁉」
身体からだをぐらつかせながらも、自みずからの使い魔である魔獣を斬きり祓はらう警察署長。
使い魔への指示程度でこの始末だ。もしも攻こう撃げき的てきな魔術を行使しようとしてたら、そのまま魔力が暴走して自ら身を破は壊かいしていたかもしれない。

──魔ま術じゆつ師し以外にも、脳に直接何かを仕込んでいるのかもしれん。
　酩めい酊てい状態の理由は魔術回路とは別の可能性もある。脳を何かに直接揺さぶられた可能性もあるが、少なくとも、髪かみの毛を伸ばす技とはまったくの無関係に思えた。
　──迂う闊かつだったな。
　──宝ほう具ぐと呼ぶべき暗殺の業わざを、一人で二つ持っていたという事か。

　女アサシンは、警官隊に生まれた隙すきを突き、照明器具の上から跳ちよう躍やくする。
　同時に、ロビー中に伸びていた髪が収束を始め、頭部を覆おおう黒衣へと吸い込まれていった。
　柱から柱へと、重力を無視するかのように跳躍し続ける黒衣の影。
　これは彼女がオペラハウスで見せたものと同じ動きであり、見る者達に『無数に分裂したのか』と錯さつ覚かくさせた。
　そして、やはりオペラハウスの時と同じように──
　警官隊の中心人物らしき男の背後の影から、砲弾の如ごとき勢いで跳とびだした。

「署長！　後ろです！」
「！」
　部下の叫びに反応し、署長は勢い良くその身を翻ひるがえす。
　すんでの所で、自らに迫る手を躱かわした署長。
　すると、暗殺者の手が署長の前にいた暴走魔獣の頭部に触れ──
「空想電脳ザバーニーヤ……」
　英えい霊れいが呟つぶやくのとほぼ同時に、魔獣の頭部が爆ばく散さんした。
「……ッ！」
　──今のも……宝具の力か？

——一体いくつの……。
　心中で呻うめくが、冷静に考える暇ひまは与えてくれないようだ。
　暗殺者はその爆ばく発はつの勢いを利用して転身し、その背から、異様に長い腕を署長に向かって差しのばす。
「妄想心音ザバーニーヤ……」
「ぬうッ！」
　相手の腕の長さを見て、署長は身を引いても追いつかれると判断した。
　—ならば……斬きり潜くぐるのみ！
　即座にそう判断し、日本刀を抜き放つ署長。
　切っ先が歪いびつに長い腕を切り裂くが—それでも、アサシンは止まらなかった。
　刃やいばをその腕に染みこませながらも、構わず署長の身体からだに向かって手を伸ばす。
　あと僅わずかで署長の胸に指先が届こうかという瞬しゅん間かん—
　派手な銃声が鳴なり響ひびき、暗殺者の身体がその場から吹き飛ばされた。
「……御ご無ぶ事じですか、署長」
　署長が視線を向けると、そこには大型のリボルバーを構えた女秘書が立っていた。
　明らかに警けい察さつの支給品ではない代しろ物ものであり、英えい霊れいを吹き飛ばしたという事実から、それもまた『宝ほう具ぐ』のひとつであるらしい。
　言い訳のしようがない程に近代の武装である筈はずなのだが、その銃からは、まるで神かみ代よの時代から存在していたとでも言わんばかりの色濃い魔力が滲み出している。
　そのような代物から放たれた銃弾が直ちよく撃げきしたのだ。
　英霊とて無事では済むまいと警官隊も思っていたのだが—
　あっさりと立ち上がった黒衣の暗殺者を目にし、全員が再び身構える。

離れて相対しつつ、署長が敵対英霊に声をかけた。
「驚おどろいたな。君のマスターは宝具を出し惜しみする気はないようだ。今しがたの連続使用を見るに、相当な魔力量を持つ魔ま術じゅつ師しらしい。マスターに伝えたまえ。ギルガメッシュを撃うち倒たおす為ために共同戦線を張るつもりはないかとな」
無駄だろうと思いつつ、署長は相手の性格などを読み取る為に、敢あえて共きよう闘とうを持ちかける事にする。成立はしないだろうが、この英霊とマスターの関係性を探るだけでも状況打破のヒントになると考えたのである。
「昨日きのうの砂漠の戦いは感知しているだろう？　あの規格外の連中を排除する事こそが、我らの共通の戦略だとは思わないか？　そうマスターに尋たずねるといい」
だが、アサシンから帰ってきたのは、署長にとっても想定外の言葉だった。
「……私にマスターなどいない」
黒衣の下から聞こえてきたのは、まだ若い女の声だった。
署長は先刻の宝具名らしき呟つぶやきを聞いていたので知っていたが、警官達の中には、意外だと目を白黒させる者もいる。
「魔ま術じゆつ師しに仕える気はない。聖せい杯はいも望まない」
「なに？」
訝いぶかしむ署長に対し、暗い瞳ひとみに明確な覚悟の色を浮かべながら女アサシンは言った。
「偉大なる先せん達だつを惑わした、この聖せい杯はい戦せん争そうそのものを撃うち砕くだく」

そう断言しつつ、女アサシンは周囲を取り囲む敵集団への警けい戒かい度どを更さらに引き上げる。
己おのれの皮ひ膚ふを『魔ま境きようの水すい晶しよう』の如ごとく硬質化させる『断想体温ザバーニーヤ』によって、銃弾による直接的なダメージはない。だが、宝ほう具ぐの効果なのか、そこから入り

込んだ力が、魔力を急速に体外へと排出させていた。
　もしも深い傷がついたり、銃弾が体内に食い込んだりしていたならば、並の英えい霊れいならば即座に魔力が枯渇してしまう事だろう。
　──こいつらは……。
　──戦いの中で、宝具を身体からだに馴な染じませている。
　彼女は、僅わずか数分の戦いの中で確信していた。
　今、自分と戦っているのは英霊ではなく人間だ。
　しかし、宝具は間違い無く本物だ。
　何なに故ゆえ人間が宝具を扱えるのかは預かり知らないが、彼らはまだ宝具での実戦になれていないらしい。
　だが、この短い戦せん闘とうの合間にも、彼らは自みずからの手に宝具を馴染ませつつあるのが分かった。
　戦えば戦うほど、宝具の力を引き出し始めるだろう。
　近接武器だけを見ても、ひとつひとつの斬ざん撃げきや打撃の威力が上がり始め、中には『切っ先から炎を放つ』など、通常の武具ではあり得ぬ特殊効果を放つ者すら現れ始めていた。
　──長く戦うわけにはいかない。
　相手の交渉に乗る理由などない。
　そのまま、この状況でもっとも有用な先達の御み業わざは何かと思案する。
　もう相手の話に耳を貸す必要はない。
　そう思っていたのだが──
「馬ば鹿かな事を言うな。単独行動のスキルを持つアーチャーならともかく、マスター無しで今のような戦い方をしていたならば、君はとっくに消滅している筈はずだ」
「……」
　敵集団のリーダーらしき男の言葉が、ほんの僅か心に引っかかった。
　確かに、自分でもおかしいとは感じている。
　休む事無く、霊体化する事も殆ほとんどなく、自分は丸二日も街ま

ちを駆け続けている。
　それなのにまだ消滅していないのは、まだ魔ま力りよくが満ちているのは━自分が未熟故ゆえに、効率的に宝ほう具ぐである御み業わざに魔力を乗せられていないのだろうと考えていた。
　━違う。
　━今はそんな事はどうでもいい。
　━まずは目の前の敵を……。
　疑念を強制的に心の隅に追いやり、再び心を戦せん闘とうに特化させようとする女アサシン。
　だが、彼女の疑念は、直後にその解を得る事となる。
　それは、彼女にとっては最悪に近い答えだったのだが。

「やあ、良きかな良きかな！　なかなかに私好みの泥どろ仕じ合あいだ！」

　唐突に拍手の音が鳴なり響ひびき、妙にテンションの高い声がロビー内部にこだました。
　それは妙に力のある声で、聞く者に粘ねばついた息苦しさを感じさせる。
　更に、その手拍子もまた、一打ち一打ちが、まるで遠くから聞こえて来るスナイパーライフルの狙そ撃げき音おんのような不気味な緊きん張ちようを感じさせた。
「何者だ？」
　署長は周囲を見ながら問い掛けるが、声の主は見当たらない。
　いや、声は寧むしろ、結けつ界かいの外━警けい察さつ署しよの駐車場の方向から聞こえて来たような気がする。
　だが、現在のロビーは外部からは隔絶された状態だ。
　ありえる筈はずがないと思いつつも、思わず正面玄関を見る警官隊。
　すると、それを待っていたかのように、結界に異常が現れた。

結界の影えい響きようで完全な暗くら闇やみとなっていた正面玄関の扉とびら。その漆しつ黒こくの闇を映すガラス部分に、スウ、と何者かの人差し指が縦に走り──
　その切れ目を広げるかのように、一人の青年が扉から姿を現した。
「外から観かん察さつしていたが、素晴らしい。実に素晴らしい戦いだった」
　楽しげに拍手をしながら語る青年に、警官達は顔を見合わせる。
　そんな部下達を代表する形で、署長がもう一度同じ問いを繰り返した。
「……何者だ？」
　だが、青年はそんな署長の言葉を無視し、朗々と自分の言葉だけを喋しやべり続つづける。
「いやいや、お見事お見事。如何いかなる手品で宝具の力を解放しているのかは知らんが、まさか人の身で英えい霊れいに挑むとは！　なんとも身の程知らずな話と思ったが、どうだ、なかなかにいい勝負になりそうじゃないか！」
　クツクツと楽しそうに笑いながら、青年は両手を広げてロビーの中央に歩み始めた。
「闇に生きる術すべを持ちながら正面きって挑む愚おろかで愛らしい英霊に、自みずからの英霊を後方に置き自みずからが矢や面おもてに立つ血気に満ちた魔ま術じゆつ師しか。なかなかに面白い見世物だ」
「……」
　相手の正体が分からず、署長は無言で相手を観かん察さつする。
　マスターという立場での視覚情報がまったく入ってこない事から、この男が英えい霊れいではないという事は明らかだ。
　では、アサシンのマスターかとも思ったが、当のアサシンが困惑したように男と距離を空けている。
　──ならば、他の英霊のマスターか？
　どちらにせよ、あっさりと結けつ界かいを裂いて入って来た事から、生半可な実力ではないだろう。

警けい戒かいを続けたまま、署長は相手の情報を探る為ためにその言葉を聞き続ける事にした。
無論、言葉の中に何か言こと霊だまや呪じゆ言ごんの類たぐいが仕掛けられていないかを警戒しながら。
そんな周囲の緊きん迫ぱくした空気などどこ吹く風で、野球の試合を観かん戦せんしている御お調ちよう子し者もののように、青年はペラペラと自分の見解を語り始めた。
「そうだな。俺おれの見立てでは、このまま続けていたら、君達が七割ほど彼女に惨ざん殺さつされた所で、残った面子メンツが宝ほう具ぐを完全に我が身の一部として受け入れ、覚かく醒せいするだろうな。そうなれば勝負は五分と五分。彼女の宝具の性質を正確に見破れる魔術師が一人でも残れば、警けい察さつ諸君にも勝ちの目が出るという感じかな」
勝手に戦せん闘とうの流れを予想しつつ、青年は更さらに語る。
「いや、見事だ。この戦闘の経験を生かし、新しい戦力を補充できるのであれば、それこそセイバーやアーチャーと言った戦いくさ狂いの為のクラスと正面切って闘たたかえるかもしれんな」
少なくとも味方ではなさそうだが、敵かどうかは分からない。
ファルデウスやフランチェスカの身内なのではないか。
署長はそうした疑念も持つが、警戒を解く理由とはなり得なかった。
警官の一人が恐る恐る青年に近づき、相手の動きを封じようと短刀の宝具を向ける。
その瞬しゆん間かん──
「しかし、だ」
短刀を向けた警官の手首を、青年が左腕で軽く払いのけた。
ザキュリ、と嫌な音が響ひびき──署長は、ひとつの異常な光景を目の当たりにする。
青年に払われた手首から先が、獣けものに噛かみ千ち切ぎられていたかのように消失していた。

「なッ……え……？」
　呆ほうけた顔で、血が噴き出す己おのれの手首を見つめる警官。
「困るんだ、そんな良い勝負の末に納得するような死に方じゃ」
　笑顔のままの青年の手には、斬きり千ち切ぎられた警官の手首が握られていた。
　そこでようやく、警官は自分の身に起こった事を認にん識しきし、同時に『痛み』を感知する。
　僅わずかに遅れて、ロビーの中に警けい官かんの絶叫が響ひびいた。
「……がッ……あああぁぁっ……あぁあぁあああぁぁぁ
あぁぁぁ！」
「ハハ！　いい悲鳴だ！　だが少々ありきたりだな。左手も千切ればもっと面白い痛がり方をするか？」
「そこまでだ！」
　手首を押さえて膝ひざをつく部下を目の当たりにし、署長は即座に銃を撃うち放はなつ。
　先刻天井に撃ち込んだものと同じ、周囲の魔ま力りよく炉ろやトラップを起動させる特殊弾頭だ。
「第二班までは男を囲め！　残りは英えい霊れいから意い識しきを反そらすな！」
　署長の号令と共に、床に仕込まれた魔ま術じゆつ式しきから、無数の悪あく霊りようと魔ま獣じゆうが生まれる。
　だが、その使い魔達が奇声を発しながら青年に襲おそいかかった瞬しゆん間かん──

「キイキイ囀さえずるな、気持ち悪い」

　笑ったまま軽い調子でそう呟つぶやくと、青年は右手首の先を上から下に向けてフワ、と仰いだ。
　それに合わせ、ロビーに生まれた全すべての使い魔達が見えない何

かに押おし潰つぶされ、割れた水風船のように床へと弾はじけ飛とぶ。
「なッ……」
　署長をはじめ、その場にいた警官達が絶句する。
　何らかの攻こう撃げき系けい魔術を行使した様子はない。
　まるで、男の放つ捻ねじれた圧力が、使い魔達の存在そのものを否定したかのようだ。
　実際、男の放つ気配は、警察官達の肌を理由の解わからぬ恐怖で震えさせている。
　ただ、そこに立っているというだけで。
　男は、左手に摑つかんでいた警官の手首を軽く握りしめる。
　すると、その手首が瞬間的にミイラのように萎しぼんだかと思うと──砂のように崩くずれ落おち、跡形も無く消え去ってしまった。
　更さらに、手首の中に握られていたダガーをつまみ上げた青年は、そのままダガーを口元に運び、クッキーのように嚙かみ砕くだいたかと思うと、そのまま破片を己おのれの喉のどに流し込んだではないか。
「ふむ、この感触、間違い無く宝ほう具ぐと呼ぶべき逸品だな。人には過ぎた玩具おもちやだ」
　信じがたい光景を見た警官達は、確信した。
　この男は、人ではない。
　英霊でもない。
　もっと異質な次元に立つ『何か』だ。
　鎮しずまり返かえったロビーの中で、男は静寂に感かん謝しやするように両手を広げた後、恭うやうやしい態度で、戸惑う黒衣のアサシンに向かって跪ひざまずいた。
「自己紹介が遅れたね、我が愛いとしの君よ」
「……？」
　黒衣のアサシンは、黒衣の奥で混乱したように眉まゆを顰ひそめる。

「私の名はジェスター・カルトゥーレ。マスターとして君の全すべてを肯こう定ていし……」
　マスターという単語に、周囲の人間達に更さらなる緊きん張ちようが走る。
　ジェスターと名乗った青年は、そのまま凶悪な笑みを顔面に貼はり付つけ、アサシンの全身を舌で舐なめ擦ずるように睨ねめあげた。

「人ならざる死し徒ととして、君の全てを奪い去る者だ」

　死徒。
　その単語を聞き、女アサシンは全身がゾワリと震えるのを感じた。
　吸きゆう血けつ鬼きと呼ばれる異形に対する恐怖ではない。
　自みずからの置かれた状況について、最悪の想像をしてしまったからだ。
　──徒いたずらに死を運ぶ者。
　──人を駆く逐ちくせし、破は壊かいの使者。
　彼女は、生前に直接『死徒』と出会った事こそなかったが、その逸話は伝え聞いていた。
　異教徒との大きな戦いくさが起こる度に、その戦場に現れては陣営を問わずに暴ぼう虐ぎやくの風を振りまく恐ろしき怪物。
　一度目の大おお戦いくさの時には、身体からだに無数の獣けものを飼う怪物が砂漠を血に染め上げたという。
　二度目の時には、一度目とは異なる複数の怪物が現れ、三日三晩暴れた後に去って行った。
　三度目の戦の時には更さらに別の怪物が現れたのだが──この怪物は、両陣営の苛か烈れつなる将軍達によって討ち取られたらしい。
　その時に来た怪物が弱かったのか、あるいは歴史に名を残す将軍達がそれこそ怪物を超こえる英雄だったのか、それは分からない。
　しかし、ひとつだけ確かなのは、その怪物はいずれも、人という存在そのものに仇あだなす殺さつ戮りくの使者だったという事だけだ。

そして、その怪物は『死し徒と』と呼ばれているという。
　自みずからその異形の名を名乗った男は、他になんと口にした？
　──私の……マスター……？
　針のような冷気が背骨を走り抜け、ギチリ、ギチリと女アサシンの心を軋きしませせる。
　──馬ば鹿かな、マスターは……始末した筈はず……。
　そんな彼女の心を見抜いたかのように、ジェスター・カルトゥーレと名乗った男は、恍こう惚こつとした表情で自分自身の胸の辺りを撫なで回まわした。
「苛烈なる口付けにも似たあの掌てのひらの感触、私は忘れる事はないだろう。まさしく、ハートを鷲わし摑づかみにされたよ。一度死んだショックで顔も変わってしまったな」
「……ッ！」
　ジェスターの言葉で、彼女は確信する。
　この男は、確かに自分が殺した筈の男であると。
　──私がまだ存在しているのは……？
　──この怪物に……魔ま力りよくを分け与えられているから……？
　どうしようもない嫌悪が、彼女の全身を駆け巡った。
　血の一滴すら残さず、毒の汚お泥でいに穢けがされたかのように感じられる。
　人ならざるもの。
　更に、僅わずかな言動を聞いただけでも解わかる。この男はありとあらゆる人類にとって、確実に有害な者だと。
　そんな存在の魔力が自分の身に流れているという事が、彼女には許せなかった。
　死徒に首輪を付けられていた事すら気付かぬ、己おのれの未熟さが憎くて仕方ない。
　彼女はせめてその穢れを自らで祓はらおうと、気付けば足を踏み出していた。
　目の前の怪物を滅ぼし、己の穢れを祓おうと。

自分の身を消し去りたいという衝しよう動どうにも駆られたが、それは信仰により許されていない。そんな事を考えてしまった事自体が未熟の証あかしと恥じ入りつつ、彼女は全力で、目の前の『敵マスター』を排除しようと試みた。
　だが──

「……令れい呪じゆを持って命じる。可能な限り、この街まちから離れた場所へと転移せよ」
　ジェスターが笑いながらそう言うと同時に、女アサシンの身体からだが光を放つ。
「……ッ！」
　女アサシンが何かを叫ぼうとするよりも速く、光は彼女の全身を包み込み──
　そのまま、この場ならざる何処いずこかへとその姿を消し去ってしまった。

　そして、ジェスターは残された警けい官かん達を見渡し、肩を竦すくめながら宣言する。
「バトンタッチという奴やつだ。私も聖せい杯はいが必要なのでね。つまり、まあ、なんだ……」

「とっととくたばってくれないか？　血袋ども」

×　　　　　　　　　　×

市内某ぼう所しよ

「死し徒と……死徒と来たか！　吸きゆう血けつ鬼きか！　マジか!?」
　パソコンの画面から流れ来た声を聞き、キャスターは驚おどろいた

ように手を鳴らす。
　警官の何人かの宝ほう具ぐには、通信のシステムを組み込んでいた。
　本来魔ま術じゆつ師しではない自分にとっては付け焼き刃のようなものだが、自みずからの『宝具改変』能力に上乗せして、なんとか形だけは仕上がっている。
　もはや通信ではなく盗とう聴ちようと呼ぶべき代しろ物ものなのだが、キャスターはそれをアフターサービスの一環だと考え、特に罪悪感もなく使っていた。
「こいつはますます面白くなって来やがった。だが、戯ぎ曲きよくにするにゃ、ちょいと荒こう唐とう無む稽けいな要素を詰め込み過ぎか？　まあいいか。俺おれは今回は野次飛ばすだけの観かん客きやくだしな」
　そんな事を言いながら、やや難しい顔をして呟つぶやく。
「しかし、兄弟達にとっちゃ、ちいと不味まずいな」
　溜ため息いきを吐くキャスターの脳裏に、生前の記き憶おくが思い浮かぶ。

×　　　　　　　　×

19世紀前半　パリ

　若き日のキャスターがパリにやってきたばかりの頃ころ。
　彼が本場パリの芝居を見ようと、サン・マルタンにある劇場を訪れた時の事だ。
　芝居のタイトルは『吸きゆう血けつ鬼き』。
　何度かトラブルに巻き込まれた後、彼はようやく席につく事ができた。
　しかし、隣となりに座ったのは、少々変わった男だった。
　ずっと本を読みふけっていたかと思うと、唐突に顔を上げ『何が吸

血鬼だ！　巫山戯ふざけるな！』などと野次を飛ばしたり、『この吸血鬼を演じる役者達には想像力と創造力が足りない……』などと独り言の愚ぐ痴ちを呟つぶやき続つづける。
　自分より20歳ぐらい年上の男がそんな事を騒さわいでいるのを奇妙に思い、キャスターは堂々とその男に尋たずねる事にした。
「吸血鬼みたいな御お伽とぎ噺ばなしが嫌いなら、どうしてここに？」
　キャスターがそう尋ねると、男は首を振って答えた。
「吸血鬼が御伽噺？　とんでもない！　彼らは本当に存在している、何しろ、私は彼らに会った事があるからねえ。だからこそ、この芝居を楽しみにしていた。ところがどうだ！　彼らの演技はまるでなっちゃいない！　吸血鬼の事を欠片かけらも理解していない、理解しようともしていないんだ！」
　これは面白い男の隣に座ってしまった。
　そう思いながら、彼は芝居をそっちのけで、吸血鬼の事を色々と聞く事にする。
「最初の一人はイリリアで出会った。私は夜な夜な出歩く生きた死体と会話をし一緒に食事を取るようになった」
「食事を？」
「別に一緒に血を啜すすったわけじゃない。普通の食事さ。……だが、彼は人としての死を望んでいたんだ。私はそんな彼の願いを聞き、墓場で彼が眠りに落ちている……死んでいる間に、彼の心しん臓ぞうを取り出して焼いたのさ。だが、本当の意味での『吸血鬼』と出会ったのは、その後だった。吸血鬼と交流し、永遠の眠りを与えた私に、もっと力を持った輩やからが会いに来たんだ」
　どこか遠くを見ながら、男は過去を懐なつかしむように語る。
　しばらくその『力のある吸血鬼』とのやりとりを語った後、彼は吸血鬼の異名を口にした。
「彼らは死し徒とと呼ばれている。人に取とり憑つく悪あく霊りようだの妖精だのとは明確に違うのだよ。彼らは、地球の一部でありなが

ら、人類というものを嫌っている。そう、彼らは意志を持った、地球そのものの影法師なんだ」
「人を嫌ってる？」
「ああ、そうだ。死し徒とのすべてがそうとは言わないがね。だが、人との間には明確な壁がある。それを貫く事ができるのは、人の作りし刃やいばでは無理だ。神による聖別、あるいはそれに類する人間とは異なる類たぐいの『力』がなければ、その刃が彼らを貫く事はないだろうな。とにかく、ただの悪あく霊りようや魔ま獣じゆうの類だと思っているなら、それは大きな間違いだ」
「この芝居の吸きゆう血けつ鬼きは、ただの悪霊ってわけか……でも、本物の吸血鬼を見た事がなければ、無理もないでしょうよ」
「見ていなくても、演じる事はできる。人間の想像は誰だれしもが幻想に到達しうるものだからね」
　男は穏おだやかな口調でそう言った後、吸血鬼のみならず、様々な経験談からパリの街まちの仕組み、ローマ皇帝ネロの話やお勧めの文学作品に到るまで、様々な話を、隣となりに座った『知りたがり』の若者に語ってみせた。
　それは彼の確かな人生経験に裏打ちされた話であり、キャスターはいつしか、芝居よりもその男の話に釘くぎ付づけとなってしまっていた。
　だが、彼は暫しばらくして芝居にちらりと目を向けると再び顔色を変え、舞台上の役者に野次を飛ばし始める。
「ああ、そうじゃない！　ただ恐怖で怯おびえさせるだけの幽ゆう鬼きではないんだ！」
　そのまま男は『もっと彼らに抗議しやすい席に移動する！』と言って席を立った。
「そうだ、これも何かの縁えんだ。君の名前を聞いておこう」
　親子ほども年の離れた男にそう尋たずねられ、キャスターは少し照れながら答える。

「私の名前は……デュマです。アレクサンドル・デュマ」

「そうか、私はシャルルだ。縁があればまた会おう」
　男の背を見送りながら、まだ若き青年は、あの面白い男と再び出会えるよう祈る。
　キャスターことアレクサンドル・デュマは、この時まだ知らなかった。
　今しがた話していた男はフランスでも有名な作家の一人であり、この『吸血鬼』の舞台の元になった作品を書いた内の一人だと。

　そして、後に自みずからと文学界の橋渡しをしてくれる、とても重要な人物になるという事も。

×　　　　　　　　　　　　×

現在

「ああ、俺おれなんかがいるぐらいだから、シャルル先生も当然『座ざ』にいるたぁ思うが、どうしてんのかねえ。あの人にゃ世話んなりっぱなしだったからな……」
　マスターである署長に対するものとはまったく違う素の敬意を言葉に滲にじませて呟つぶやいた後、キャスターは慌てて本題に意い識しきを向け直す。
「やれやれ、本当に吸きゅう血けつ鬼きだとすりゃ、今の装備じゃ、勝ち目ねえぞ？」
　溜ため息いきを吐きつつ、パソコンのキーボードをカタカタと打ち鳴らすキャスター。
「今のカスタマイズは『人の力』を押し上げるのに特化してるからな……。それにしても、吸血鬼……『死し徒と』ねえ……」
　キャスターはパソコンの画面に次々と現れる情報を弄いじりつつ、

自じ嘲ちよう気ぎ味みに笑いながら呟いた。

「本当に関わりあう事になるたぁ、長生きはするもんだな。もう死んでるけどよ」

×　×

警けい察さつ署しよ　通路

　ロビーからだいぶ離れた区画にある通路を歩いていたセイバーは、ふと立ち止まって、ある方向に目を向けた。
　それは、まさしく署長達が戦っているロビーの方角だったのだが、彼には知る由よしも無い事だ。
「どうしたの？」
　アヤカの問いに、セイバーは少しだけ目を細めて答える。
「……魔ま物ものの気配がするな」
「魔物？」
「……ああ、昔の話だが」
　奔ほん放ぽうな空気を滲ませていた彼には珍しく、やや悲しげな色を表情に浮かべながら言った。
「ある戦いくさの時、俺と好敵手の戦いに割り込んできて、両陣営の部下を虐ぎやく殺さつした魔物がいてな。そいつらと似た気配を感じる」
「……良く解わからないけど、魔物が英えい霊れいとして喚よばれたっていう事？」
「いや、違うな、英霊じゃない。そもそも奴やつらが『座』に行くのかどうかも分からない」
　嫌な予感を覚えつつ、セイバーは周囲への警戒を強めながら、一刻も早くアヤカを外に逃がそうと決意した。
　歩き始めると同時に、その魔物の特徴を思い出しながら言葉を続け

る。

「早い話が……君達の文化では、吸きゆう血けつ鬼きとか呼ばれるような連中さ」

×　×

警けい察さつ署しよ　ロビー

「念の為ために聞いておくが」
　ジェスターの声が、ロビーの中に響ひびき渡わたる。
「お前達に宝ほう具ぐを与えたサーヴァントは呼ばなくていいのか？　もっとも、その宝具を作る事自体がメインの能力なら、荒あら事ごとにさほど期待はできないのだろうがね」
　彼は、『とっととくたばってくれないか？　血袋ども』と言った場から、未いまだに一歩も動いてはいなかった。
　それでも、彼の周囲には多くの警官が倒れ伏している。
　まだ死者こそはいないようだが、それもその筈はずだ。
　ジェスターと名乗った死し徒とは、未だに何一つ『攻こう撃げき』をしていなかったのだから。
　そんな彼に向かって、三階から女性警官が弓を引き絞る。
　金色の矢が三本同時に放たれ、音速に近い速度で三通りの曲線を描きながらジェスターの心しん臓ぞうに迫った。
　だが、その矢の輝きは彼に接近するに従ってくすみ始め、届いた時にはただの鉄弓となって服すら破る事ができずに弾はじかれる。
　彼は何も動いていない。それにもかかわらず、単純に矢が皮ひ膚ふに阻はばまれたのだ。
　龍りゆうのような鱗うろこが生えているわけでも、鋼こう鉄てつ化かしているわけでもない、ただの白い柔やわ肌はだにしか見えないその皮膚に、音速の弓が通じなかったのである。

更さらに言うならば、あのジェスターという男を攻撃すればするほどに、こちらの体力が奪われているような気がしてくる。
宝具の力を引き出し始めた斧おの使いが、『距離を無視して敵を斬きり潰つぶす斬ざん撃げき』を撃うち放はなつが──手応えこそあるものの、ジェスターの髪かみの毛ひとつ揺らがせる事ができなかった。
「う、うおおおあぁぁあ！」
巨体を誇る警官が大盾を構えて突進するが、まるで巨大な壁に突進したかのように、すべての勢いが自分へと跳はね返かえり、大きなダメージを受けてしまう。
三十人近い警官がそれぞれの宝具を駆く使しして攻撃を加えるが、ジェスターはそのすべてを無視して、上から目線の論説を口にし続けた。
警官達の目に、徐々に『恐怖』が芽生え始める。
先刻自分達は、あの暗殺者の英えい霊れいを相手取り、まともな戦いができていた筈だ。
それなのに、この状況はなんだ？
聖せい杯はい戦せん争そうには本来関わりが無い筈はずの『死し徒と』などという化け物が、闘とう争そうの場を理不尽に蹂じゆう躙りんしていく。
英えい霊れいとはなんだったのか？　それを打倒しようとしている自分達はなんなのだ？
この世には、『座ざ』より召しよう喚かんするまでもなく、これほど強い怪物が存在しているではないか。
そんな畏い怖ふと絶望の視線を心地ここち好よく受け止めながら、ジェスターはニヤニヤと笑ったまま語り出した。
「勘違いするな。俺おれが英霊より強いというわけじゃあない。実際、俺は一度あの麗うるわしきアサシンに殺されているからな」
謎なぞの疲労によって膝ひざをつきながら、警けい官かん隊たいが訝いぶかしげに眉まゆを顰ひそめる。
現在もまともな戦意を保って立ち続けているのは署長と女秘書を含

めて五人ぐらいのものだが、彼らの攻こう撃げきもジェスターに通じる様子はなかった。
　残った警官が槍やりの宝ほう具ぐの加か護ごを受け、渾こん身しんの力で突進する。
　だが、ジェスターは肉にく食しよく獣じゆうの爪の如ごとき速さで突き込まれた槍を、人差し指一本だけで受け止めた。
「つまるところ——」
　砕くだけ散ちる槍と、絶望に満ちる警官を見て、ジェスターは憐あわれみを籠こめた笑顔で語り始める。
「英霊とは人類史を肯こう定ていするモノ。人間世界の秩序ルールを護まもるものだ」
　割れた槍の欠片かけらを指先で弄いじりながら、ジェスターは小さく首を振る。
「我ら死徒は人類史を否ひ定ていするモノ。君達のルールを汚すために存在してきた」
「人類史の……否定だと？」
「ああ、そうだとも。故ゆえに、人が作りし宝具、あるいは神が人の為ために用意した宝具の加護を、我々は否定する事ができる。神が神の為に作った宝具ならばまた話は別かもしれんが、そこまでの代しろ物ものはそうそう用意できまい？　これは、純粋に相性の問題だ。私は蛇へびで、君らはカエル。ただそれだけの単純な話だ」
　ジェスターはそこで、やっと足を動かし始める。
　ロビーの空気が負の色彩に満ち始めた今、最後の仕上げを行う為に。
「もちろん、同じ宝具でも『座』の使者たる英霊が使うならば話は別だがな。英霊ならば私に勝てたやもしれん。だが、人の身である君達がいくら宝具を使おうと、敗北は必然だ。戦略や気合いでどうこうできるものではない」
　英霊ならば勝てたかもしれない。
　それは、希望ではなく絶望の言葉として警官達の心を締め付けた。

英霊で戦うという道を捨て、人としての強さを選んだが故に──英霊でもない化け物に圧倒的に蹂躙されている。
滑こつ稽けいとも受け取れる現実を前に、警けい官かん達の多くは歯を食いしばる。
だが、それでも彼らの心はまだ折れてはいなかった。
署長がまだ、ロビーの中央に立っていたからだ。
人の身に残された可能性。その最後の牙が城じようであるとでも言わんばかりに。
ジェスターもそれに気付いたのだろう。
彼は不敵な笑みを浮かべると、署長に向かってゆっくりと歩みながら問い掛けた。
「君達に足りないものが何か分かるか？」
「……強さか？」
日本刀と拳けん銃じゆうを左右の手に持つ署長は、ジェスターの問いに真しん摯しに答えた。
だが、ジェスターは首を振って正解を告げる。
「尊さだ」
「……」
「分かるぞ、君達は神どころか、上位存在の類たぐいを何一つ信じていない。英えい霊れいも『座ざ』も、あるいは聖せい杯はいすらもだ。その上、自分達の力すら信じていないから、道具には頼ろうとする。そこに尊さはない」
ジェスターはニヤニヤと笑いながら、手近にあったロビーの長なが椅い子すを、片手でヒョイと持ち上げる。
長さ３メートルの鈍器と化した長椅子を手に、ロビー内にいるすべての警官に対して告げた。
「私には尊さを教える事はできない。だが、貴様らの儚はかなさは教えてやれる。この武具ですらない家具で貴様らが信頼している署長とやらの頭を叩たたき潰つぶそう。そして、その後は逃げだそうとした奴やつから順に足をへし折るとしよう。十人までなら同時に折れる。

『せーの』で全員逃げれば数人は助かるかもしれんぞ？」
　ケラケラと笑いながら、ジェスターが更さらに一歩署長に近づく。
　既すでに長椅子の間合いだ。
　署長は明確な『死』が自分に迫りつつあるのを感じていた。
　だが、彼は泣きも喚わめきもせず、逆に心を研ぎ澄ませていく。
　──同じだ。
　──ここで私に向かって歩いてくるのが、死し徒とだろうと、英えい雄ゆう王おうであろうと同じだ。
　強力無比な英霊を相手にする上で、自分に死が訪れる可能性は織おり込こみ済ずみだ。
　ここまで早く訪れるのは想定外だったが、それでも、受け入れる覚悟はできている。
　──だが……抵抗はさせてもらうぞ。化け物め。
　心を無にし、銃を床に落とすと同時に、刀を両手で握り込んだ。
「ほう……」
　空気が変わった事を察したジェスターが、一いつ瞬しゆん足を止め、口元を緩ゆるめた。
「なるほど、あくまで人として一矢報いるつもりか？　令れい呪じゆに縋すがりサーヴァントを盾として生いき足掻あがくと踏んでいたのだがな。だが、無駄な覚悟だ。私には何ひとつ届かんよ」
　クツクツと笑いながら、ジェスターが楽しげに椅い子すを振り上げる。
「どんな英えい霊れいが貴様らの背後にいたのかは気になるが、なに、貴様を喰くらってその令呪を頂くとしよう。通常の身では無理でも、今の私ならば二体、いや、五体までは同時にサーヴァントを使し役えきする事も……」
　ジェスターの言葉が、不意に止まった。

　バシャリ、と。
　背後から唐突に、黒く温ぬるい液体を浴びせかけられたからだ。

「……」
　確認するまでもない。
　服に染みた香りだけで、その液体が冷めかけたコーヒーだと理解できた。
　呆ほうけた顔でジェスターが後ろを振り返ると──
「何一つ届かないねぇ」
　数メートル離れた場所に、紙コップを持った神父が不敵な笑みを浮かべている。
「コーヒーは届いたな？」
　相手が神父である事を確認すると、ジェスターは顔から笑みを消し、忌いま々いましげに呟つぶやいた。
「なるほど、聖せい杯はい戦せん争そうの監かん督とく役やくか」
　そして、溜ため息いきを吐き出しながら首を振る。
「嘆かわしい事だ。この聖杯戦争には教会は関わらぬと聞いたから馳はせ参さんじたというのに、結局この街まちも教会に尻尾しつぽを……」
　バシャリ、と。
　首を振った所を狙ねらって、残ったコーヒーが掛けられた。
「……」
「話が長いんだよ、屍しかばねめ」
　神父は空になった紙コップを折りたたみ、近くにあったゴミ箱に投げ捨てる。
「これがオペラかミュージカルなら、お前の台詞せりふは半分ぐらいカットして欲しい所だ」
「ハンザ・セルバンテス……まだいたのか」
　署長に名前を呼ばれ、ハンザは肩を竦すくめながら言った。
「大変そうだな、署長」
「どういうつもりだ」
「監督役として、生き延びる為ための助言をしてやろうと思ってな」
　コーヒーを滴したたらせながら無言で俯うつむいているジェスター

をよそに、ハンザは淡々と署長に対して言葉を紡つむぐ。
「このレベルの死し徒とには、聖別された専用の武器を使うか……魔ま眼がんや獣じゆう化かの『特異点』持ち、あるいは純粋に高レベルの魔ま術じゆつ師しでも無い限りは対処できない」
「……」
「あんた達が未熟なんじゃない。ただ、相性が悪かっただけだ。まあ、正直さっきは英えい霊れい相手によくやったと思うぞ？　良い物を見せて貰もらった」
　素直に署長達に賞賛の言葉を述べた神父に対して、ジェスターは顔にかかったコーヒーを拭ぬぐった後、笑みも怒りも浮かべぬまま淡々と語りかけた。
「死徒我々について少しは知っているようだな。なるほど、監かん督とく役やくというだけあって、それなりの話を聞ける地位にいるというわけか」
　ジェスターは、そのまま自みずからの服に視線を落とし、コーヒーの染みた服の一部をつまみながら問い掛ける。
「それで？　これはどういうつもりだ？」
「俺おれの奢おごりだ。その公務員連中の血の代わりに啜すするといい」
「ははははは！　そうか！　なるほど、奢りか！」
　ジェスターはそこで堰せきを切ったように笑い出す。
　笑い、笑い、笑い――
　次の瞬しゆん間かん、表情を反転させ、長なが椅い子すを神父に向かって投げつけた。
「受付で無料支給してるコーヒーだろうがぁッ！」
　ブーメランのような勢いで、長椅子が高速回転しながら神父に迫る。
　すると神父は、その長椅子を避けようともせず――ただ、垂直に蹴けり上あげた。
　轟ごう音おん。

僅わずかに遅れて、天井の方角から破は砕さい音おんが聞こえて来る。
　警けい官かん達が見上げると、三階部分まで吹き抜けとなったロビーの高い天井に、長椅子が深々と突き刺さっているのが確認できた。
「……何？」
　人間離れした所業に、署長も秘書も警官達も、長椅子を投げつけたジェスターですら思わず視線を奪われる。
　次の瞬間──ハンザの姿は、その場から跡形も無く消えていた。

「……あ？」

　ジェスターが呆ほうけた声をあげる。
　一瞬前まで数メートル離れた場所にいた筈はずの神父が、いつの間にか自分の眼前で拳こぶしを振りかぶっている事に気付いたからだ。
　そして、ジェスターが反応するよりも僅わずかに速く、ハンザの右みぎ拳こぶしがジェスターの顔面を殴り抜く。
　勢い良く吹き飛ばされたジェスターが、ロビーの壁を突き破って奥の部屋へと叩たたき込こまれた。
「……首を吹き飛ばしたと思ったんだが、流石さすがに硬いな」
　手をブラブラとさせるハンザに、署長が目を細めながら口を開いた。
「どういうつもりだ？」
　署長の問いに、ハンザがあっさりと答える。
「バトンタッチって奴やつだ。あいつは、俺おれが消そう」
「我々に手を貸すというのか？」
　訝いぶかしむ署長に、神父が首をコキリとならしながら言った。
「監かん督とく役やく以前に、俺は神父だからな。だが、まあ……欲しい見返りはある」
「なんだ」

「俺がコーヒー飲み物を粗末に扱った事、教会の連中には黙っててくれ」

「師し父ふ殿どのに叱られるのが怖いんでね」

今から20年ほど前。

ディーロという老ろう齢れいに差し掛かった神父が、スペインのとある山岳地帯に赴任していた際の出来事だ。

『山に悪あく霊りようがいる』という登山家の話を聞き、神父が山に入ると──一人の少年が、山の崖の中腹に腰掛け、オオヤマネコたちと何かを食べている所に出くわした。

「何を食べているんだい、坊や？」

そう言うと、少年は警けい戒かいするようにこちらを睨にらみ、そのまま崖から崖へと飛び移りながらどこかへと去って行ってしまった。

案内した村人達はそんな少年を見て『やっぱり化け物だ！　あいつはきっと山に迷い込んだ登山者を喰くってたんだ！』と言って逃げ去ったが、神父はそのまま少年を追う事にする。

少年が食べていたのが人間などではないというのはすぐに分かった。

何故なぜなら、道の先に大型の熊くまの死体があり、横に干し肉を作った跡があったからだ。

──干し肉を作れるのか。ふむ、魔ま獣じゆうの類たぐいではなさそうだ。

そんな事を考えながら更さらに進むと、先ほど逃げた少年が立ちはだかった。

「お爺じいさん。貴方あなたは人ですか？　それともオバケ？」

妙な事を尋たずねて来た幼さの残る少年に、神父は興味を持って答えた。

「どうだろうねえ。わしから見ればわしは人だが、君からみたらオバ

ケかもしれん。わしも、君が人なのかオバケなのか分からぬでな」
「……」
「でもなあ、人だろうと化け物だろうと、仲良くなれるかもしれんとは思わんか？」
　言葉は通じるようで、ディーロが根気強く接触を続ける内に、徐々に自分の事を話すようになり始める。
　世界一危険な道と言われる絶ぜつ壁ぺきの足場、『カミニート・デル・レイ』。それに勝るとも劣らぬ、山道に隠された道を進んだ先の遺跡に、彼は一人で住んでいるのだと言う。
　他の家族はと聞くと、少し前までは、数十人の集団で村のようなコミュニティを作っていたらしい。
「山の外には、人と仲良くなるオバケもいるの？」
「ああ、世界は広い、探せばいるさ。人と家族になるオバケだっているかもしれない」
　およそ神の徒とは思えぬ言葉を、穏やかに語る老神父。
「そっか。でも、僕が見たオバケは優やさしくなかったみたい」
「？」
　淡々とした調子で、少年は自分が見たものについて語り出した。
「山のみんなは……血を吸うオバケに殺されちゃったよ」
「……」
「そのオバケも、最後にお母さんに殺されたよ。でも、その時の傷でお母さんも死んじゃった」
　老神父は、その時は敢あえて深くは聞かず──
　何度か山に登った後、少年を街まちへと連れていく事にしたのである。

　数カ月後。
　養よう護ご施し設せつで暫しばらく育った少年が、すっかり街の暮らしに溶け込んだ頃ころ──とある神父が街にやって来た。
　ディーロより少し若い、気だるげな顔をした壮年の神父である。

施設の庭に呼び出されたハンザの前で、その見知らぬ神父がディーロに対して愚ぐ痴ちを零こぼした。
「その、ええと……ディーロ司教……。なんで私を？」
「いやあ、わしの知ってる中で、君が一番カンフーとか武術とか得意そうだったんでなあ。この子、そういうのが好きらしいんだ。強い力を持った子に調和の大切さを教えるには、自分より強い人から教わった方が分かりやすいだろう？」
ハンザは気付く。どうやらこの人と目を合わせようとしない神父は、自分の為ためにこの街まちまで呼ばれたらしい。
つい先日『山での生活と同じ事をしたい』と言い、周囲の子供達を巻き込んだ結果、危うく大おお怪け我がをする子供が出そうになった事と関係があるのだろう。
ディーロさんに迷惑をかけてしまった。
そう思ってハンザがしゅんとしていると、呼び出された神父は誰だれとも目を合わせぬまま、ディーロに対して口を開いた。
「ええと、ねえ、司教殿どの？　子供を武術で鍛きたえるっていう話なら、言ことと峰みね殿でもいいのでは？　彼の八はつ極きよく拳けんはマスター級ですし。あなたとも懇こん意いだ」
「璃り正せい君は、日本で何か重要な仕事につくそうだよ。わしはそっち方面は良く知らないんだが、何かとても重要な仕事らしい。それに彼には、もう息子さんがいるからねえ」
「ええー……それ、もしかして、実の子と同じぐらいガッツリ面倒を見ろって事ですか……？」
「君、優ゆう秀しゆうな後継者が欲しいって言っていただろう？　まあ、この子は人よりも体力はあるし、覚えも早い。正しい力の使い方を教えてあげておくれ」
「……人を道場の師し範はんか何かと勘違いしてませんか？」
溜ため息いきを吐いた後、見知らぬ神父はハンザに向かって声を掛ける。
「君、お小遣いが欲しいかい？」

「お小遣い？」
「ああ、『取れたら』君にあげよう」
　こちらを見ないまま、神父はそう言い──
　どこかの国の銀貨を、弾丸のような勢いで射出した。

　──やれやれ、司教殿は私の裏の顔を知らんから気軽に頼んでいるんだろうが……。
　その銀貨は、ハンザから一メートルほど横を通り過ぎて、奥にある木に突き刺さる筈はずだった。
　──子供を引き込むのは、流石さすがに罪悪感があるからな。
　少し脅おどかせば子供の方から嫌がるだろう。ディーロの知人の神父はそう考えたらしい。
　だが──

　射出と同時に少年はコインの方向に飛び、パシリと銀貨を摑つかんでしまった。
　木に突き刺さる勢いで撃うち出だされたコインを、素手で──
「……え？」
　そこで初めて、壮年の神父は少年の方に目を向ける。
　少年は手の中にある銀貨を見て目を輝かせており、無邪気な笑顔を浮かべて言った。
「銀貨だ！　わあい！　ありがとうございます、神父様！」
　ディーロはそんな光景を見てニコニコと笑いながら、少年についての情報を付け加える。
「街まちの格かく闘とう技ぎジムのトレーナーに言われたよ。彼はジムでは面倒を見切れないそうだ」
　先刻の『道場の師し範はんか何かと～』という言葉に対する返答なのだろう。人の良さそうな笑みを浮かべたまま、老神父が続けた。
「なんでも、普通の格闘技では、本気を出さずとも相手の心しんの臓ぞうを止めてしまいかねんとね」

暫しばらく少年を見た後、壮年の神父は、とりあえず少年に問い掛ける。
「ええと、その……名前を教えて貰もらっていいかな？」
「ハンザです」
ハキハキと名乗る少年と目を合わせ、壮年の神父は自みずからの名を口にした。
「私はデルミオ・セルバンテスだよ……まあ、よろしくね」

それから20年。
ディーロという老神父はただ『健すこやかな人生を』と望み、デルミオという養父は、単純に『この異様な体質を持つ子供を鍛きたえたらどうなるのか見てみたい』と望み――紆う余よ曲きよく折せつを経て、彼は双方の望みを叶かなえる事となる。
健やかに強く育ち、彼自身も人生を謳おう歌かしている。
奇くしくも、山育ちの少年は、故郷を襲った怪異――死し徒とと関わり合う生業についた。

『代だい行こう者しや』と呼ばれる、神に成り代わって、絶対悪たる存在を消し去る存在に。

×　　　　×

現在　警けい察さつ署しよロビー

「油断したぞ……油断したなぁ……」
崩ほう壊かいした壁の奥から、クツクツと笑うジェスターの声が響ひびき渡わたる。
「ああ！　断言しよう！　俺おれは今、油断していたよ！　これが慢まん心しんという奴やつか！　まったく良い経験になった！　強者の

寿命を縮ちぢめる最上の毒薬は『慢心』というのは本当だなぁ！」
　声だけが聞こえる不気味な状況。
　署長達も息を潜ひそめて成りゆきを見守っているが、ハンザはその穴の正面に立ちながら言った。
「そう謙けん遜そんするな。お前は油断などしていなかった。いつだって全力だ。尊敬する。凄すごいな」
「……」
「お前は全力でやって俺おれに殴られた。そうだろ？」
　あからさまな挑発をするハンザに、笑い声が消える。
「気に食わんな。気に食わんよ神父……。貴様……『代だい行こう者しゃ』か？」
『代行者』。
　その存在は署長も知っている。
　魔ま霊りようや悪魔、死し徒とと言った『教義上、この世に存在してはならぬもの』を祓はらうのではなく、神の力と裁きを代行すると称し、対象を抹まつ消しようせしめる存在だ。
　一時的に祓うエクソシストとは違い、完全に消滅させる事を旨むねとした武ぶ闘とう派は集団である。
　当然ながら、そういった者達を相手どる実力者達が任命される役やく職しよくであり、聖せい杯はい戦せん争そうとはまったく異質の戦いに身を置いている者達だ。
「代行者は休職中でな。……今日きようは監かん督とく官かんとして来ている」
　淡々と答えるハンザに対して、穴の奥の声が止み――
　次の瞬しゆん間かん、壁の穴から、無数の瓦が礫れきが射出される。
　通常の何倍もあるカノン砲に瓦礫を詰め込んで撃うち出だした。
　そう言っても信用されるであろう、寧むしろそれ以外では納得しがたい光景である。
　ハンザは懐ふところから剣の柄つかのようなものを複数本取り出す

と、それを両手の指に挟み込んだ。
　すると、次の瞬間にはその柄に銀色の刀身が具現化し、ハンザの両手に巨大な鉄てつ爪そうのようなシルエットを造り出す。
『黒こつ鍵けん』──
　魔力を通す事で起動し、柄から刃を具現化させる、代行者達の基本的な武装のひとつだ。
　そして、無呼吸のままダン、と強く床を踏み、瓦礫を正面から迎え打つ。
　ユラリ、と、陽炎かげろうのように神父の両腕が揺らめいた。
　次の瞬間──直系１メートル以上もあるコンクリート片が混ざった瓦礫の散弾が、神父の身体を霧となって通り抜ける。
　もっとも、正確には、通り抜けたように見えただけだ。
　ハンザの前で瓦礫が次々と破は砕さいされ、砂すな埃ぼこりのようになってロビー内へと拡散したのである。
　一体どのような速さで、どのような剣技を用いればそうなるのか。
　署長はかろうじてその動きを目で捉とらえる事ができていたが、その動きについて行けるかと問われれば答えはＮＯだ。
「なるほど、我々に囲まれても余裕なわけだな……」
　呟つぶやき漏もらされた署長の言葉に、ハンザが背を向けたまま反応する。
「どうかな？　あんたらの宝ほう具ぐの効果は、死徒には効かないが俺には効く。すべては相性の問題という奴やつだ。スペックですべてが決まるなら、聖杯戦争はバーサーカーの取り合いだろうよ」
　確かに、と署長は思う。
　アインツベルンは冬ふゆ木きでの五度目の聖せい杯はい戦せん争そう時、最高クラスの大英雄をバーサーカーとして呼び出し、狂化によってすべての能力値を底上げしたという情報を入手していた。
　だが、その聖杯戦争がどのような経緯を辿たどったのかは分からないが、少なくともアインツベルンが聖杯を手にしたという情報は入っていない。

フランチェスカは『アインツベルンはいつだって極端なんだよ。裏技をやろうとして失敗したら、次は正攻法の大英雄を召しよう喚かんしてさ。それが失敗したら、別の大英雄をバーサーカーにして徹てつ底てい的てきに数値を底上げしたりねー。もっと気軽に戦争を楽しめばいいのに』と言っていた。

単に数値の差ではなく、相性も大きく関わる聖杯戦争において、それぞれの英えい霊れいとマスターの特性をどう生かすかが重要となってくる。

場合によっては時の運すら計算にいれねばならぬのが聖杯戦争の常。

そういう意味で、自分達は今は幸運に恵まれていたと言っていいだろう。

対立していたのは事実だし、教会に帰すつもりもなかった。

だが、少なくとも今は──この神父が敵ではないという運命に感かん謝しゃしていた。

何度目かの瓦が礫れきの『射出』を凌しのごうとした瞬しゅん間かん、ハンザは飛来する瓦礫の隙すき間まに見覚えのある布地を見た。

それがジェスターの纏まとっていた服だと気付いた瞬間、ハンザは最大の瓦礫を始末した後、敢あえて他の瓦礫を身に受けながら、両手の『爪つめ』となった黒こつ鍵けんを心しん臓ぞうの前に交差させる。

まさにその場所に、ジェスターの手刀が叩たたき込こまれた。

パイルバンカーを打ち込まれたかのような威力。

ジェスターはそのまま更さらに跳ちよう躍やくし、衝しよう撃げきで後ろに飛ぶハンザに追撃を試みた。

ハンザはそれを受ける一方で反撃も試み、黒鍵の刃と死徒の爪が激げき突とつする。

手刀と刃が交差し、普通ならばあり得ぬ筈はずの金属音と、肉の焦こげるような臭いが周囲に充満し始めた。

「愚おろかな選択だ！　ハンザ・セルバンテス！　私を倒すという事は、監かん督とく役やくとしての中立性を放ほう棄きするという事ではないか！　そのような不公平が許されるとでも思っているのか！」
「はて、お前が聖杯戦争のマスターなどという話は聞いた事もない！」
　互いに心臓を貫きうる連撃を繰くり出だしつつ、迎撃という形でやはり互いに止め続けるという状況。
　そんな命がけの攻防の最中も会話を続けるのは、相手の隙を引き出そうとしているからか、それとも単に興こう奮ふんしているだけなのだろうか。
「さっき私がアサシンの前で断言しただろうがぁッ！」
「サーヴァントはお前の存在ごと否定したがっていたようだが？」
「そこがまた……美しい！」
「はッ……答えになっていないぞ！」
　強がりか、はたまた一種の倒とう錯さくか、神父と死し徒とはお互いに笑いながら戦せん闘とうを繰くり広ひろげた。
　柱や壁に跳とびつつ、そこを新たな足場として殺し合う二人。彼らが一歩跳ちよう躍やくする度たびに床や柱に亀き裂れつが入り、人間の領域を超こえた次元の戦いだという事を警けい官かん隊たいの目に焼き付ける。
　そして──それが警官隊に限定されるのは、残り数秒の事だった。

　牽けん制せいの為ために放ったハンザの蹴けりを、ジェスターがわざと受け──
　その勢いを利用し、ロビーの出入り口へと跳躍する。
　強化硝子ガラス製せいの回転ドアを突き破り、そのままジェスターは街まちへと飛び出した。
　まるで、代だい行こう者しやであるハンザを外に誘い出すかのように。

夜明け前とはいえ、まだ無数の人間が行き交うスノーフィールドの中ちゆう心しん街がいへと。

×　　　　　　　　×

カジノ近辺　大通り

「む……？」
独特な高級感に包まれたキャディラックのオープンカー。
両手を後部座席の背もたれにかけて尊大な雰囲気で座っていたギルガメッシュが、眉まゆを僅わずかに顰ひそめながら道路の先に目を向けた。
車自体はティーネの部下である黒服の若い女が緊きん張ちようした面持ちで運転しており、助手席では不可視化を解除したティーネが人形のように大人おとなしく座っている。
カジノの装飾の一部として飾られていた車なのだが、ギルガメッシュが気に入り、大勝ちしたチップの半分と引き替えに入手したものだ。
実際に換金すればディーラーから何台も買える程のチップを持っていた為ため、カジノ側としては悪く無い取引として特別に譲ゆずられた形となる。
ティーネの部下の名義で譲じよう渡と手続きを手早く行い、そのまま上じよう機き嫌げんでカジノを出たギルガメッシュだったが──
そこで、車の前方の騒さわぎに気が付いた。
道の先にある大きな建造物。
その駐車場の周囲に野次馬が集まっており、時折派手な衝しよう撃げき音おんが鳴なり響ひびいていた。
「……警けい察さつ署しよですね」
自みずからも異変に気付いたティーネが、そう呟つぶやきながらそちらに注視する。

すると──
駐車場に停めてあったと思おぼしきパトカーが数台、轟ごう音おんと共に高々と舞い上がり、そのパトカーの合間を縫ぬう形で二つの人影が交こう錯さくしているではないか。
あまりにも常じよう識しき外はずれな光景に、ティーネは『サーヴァント同士の戦せん闘とうか』と身構えたが──その人影をいくら見ても、サーヴァント特有の気配が感じられなかった。
「英えい霊れいじゃない……？」
驚おどろきと共に、遠見の魔ま術じゆつを行使し、より鮮明に現場の人影を観かん察さつする。
「あれは……さっきカジノにいた神父と……。もう一人の男は一体……？」
ティーネは答えを求めるようにギルガメッシュを見る。
すると、素の視力で見えているらしきギルガメッシュは、自信に満ちあふれた声で答えた。
「うむ、よくわからん」
堂々と『知らない』という事を断言し、自分の簡かん単たんな見識を述べるギルガメッシュ。
「よくわからんが……人ではないというのは分かる、大方魔ま物ものか怪異の一種だろうよ。我オレの敵として立たち塞ふさがるなら片付けもするが、取りたてて興味はないな」
英えい雄ゆう王おうの答えを聞き、ティーネは考える。
──この御お方かたは、人間以外にはあまり興味が無いのかもしれない。
彼の纏まとう空気も、本来あるべき量と比べて神性が大幅に減げん衰すいしている。それについて尋たずねたら「奴やつらとは縁えんを切った。連中の加か護ごなど我オレには必要ないものだ」と言っていたが、何かそれに関係しているのではないかと考えた。
その推測を裏付けるかのように、ギルガメッシュは寧むしろ神父の方に興味を持ったようで、人間離れした眼帯の男を見ながら呟きを漏

もらす。
「しかし、人間の業ごうの深さには、ほとほと呆あきれかえるものよ」
「？」
　首を傾かしげるティーネの視線をバックミラー越しに受けつつ、英雄王は皮肉に満ちた笑みを貼はり付つけながら言葉を続けた。

「あの神父……あのような身体でまだ神の道具と成り果てていないとはな」

×　　　　　　　　　　×

警察署　駐車場

　空中に舞い上がったパトカーのうちの一台を、ジェスターが勢い良く蹴けりつける。
　そのパトカーを両断し、ハンザは分かれた車体の合間から数本の黒こつ鍵けんを投とう擲てきした。
　ジェスターはその刃を手で握って受け止め、手から血と煙を漏もらしながら不敵に笑う。
「野次馬が見ているぞ？　聖せい杯はい戦せん争そうの隠いん匿とくはどうした？」
　パトカーを足場として更さらに高く跳ちよう躍やくしながら、ハンザが答えた。
「この『作業』は聖杯戦争とは無む縁えんだからな、問題ない」
　実際には教会的に問題は大ありなのだが、何らかの対策があるのか、野次馬達の視線を感じつつも余裕の表情を浮かべている。
「監かん督とく官かんとしての任務を捨ててまで俺を始末する気か？　重ねて言うが、俺は貴様らが保ほ護ごすべきマスターだぞ？」
「……教会が聖杯戦争に干渉するのは、奇跡を秘匿し、人類の安あん

寧ねいを護まもる為ためだ。吸きゅう血けつ鬼きにその奇跡が渡る可能性を容認した方が教会の監督役としては失格だろう？」
「そこまで俺を殺したいとはな。さては死し徒とに親か恋人でも殺されたか？」
　挑発的な問い掛けに対し、ハンザは数度切り結んだ後、地面に着地してから答えた。
「まあ、一族郎党殺されはしたが……正直、それを恨うらみには思ってない」
　そして、新たな黒鍵の刃を具現化させながら、淡々と自分が戦う理由を語り始める。
「吸血鬼ならなんでも憎いというわけじゃあない。代だい行こう者しや失格と言われる所以ゆえんだが、俺は死徒への憎しみや主への崇すう拝はいでこの仕事をやっているわけじゃないからな」
「なら、何故なぜ俺とこうして殺し合いをしている？　この戦いになんの意味がある？」
　パトカーから漏れ出したガソリンに引火し、周囲が炎に包まれる。
　明け方ではあるが野次馬も徐々に増えているのだが、奇くしくも人目を引く炎によって、二人の姿が隠される形となった。
「言動がどう見ても悪党だった。その理由じゃ不服か？」
「……貴様の言動は一々俺を苛いらつかせるな。さしたる信念も感じられんままただ死徒を徒いたずらに殺すというのか。あの麗うるわしの暗殺者とまるで逆の醜みにくさだ」
　口元は笑っているが、目では嫌悪するようにハンザを見るジェスター。
　ハンザはそんな死徒の敵意を受け流しつつ、反論を口にした。
「衝しよう動どうを抑えながら静かに慎つつましく暮らしている死徒なら、見逃す事も吝やぶさかじゃあないぞ？　そういえば、人間の食事に執着し、本能に抗いながら料理を作り続ける死徒がいるなんて話も聞いた事があるが……本当にいるのか？」
「知るか！」

顔から笑みを消し、ジェスターは両手を広げたかと思うと、その手を勢いよく身体からだの前で交差させる。
　手から流れる血が飛ひ沫まつとなって宙に舞うと同時に、激はげしい風がその場に巻き起こり、小さな竜たつ巻まきを生み出した。
　そして━如何いかなる魔ま術じゆつか能力か、その風に、周囲の炎が『融ゆう合ごう』する。
　風に煽あおられて炎が巻き上がるのとは違い、本当に流れる空気そのものが炎へと変化したかのような赤い竜巻が、ハンザに向かって襲おそいかかった。
「くッ……！」
　ハンザは初めて笑みを消し、その竜巻を寸前で躱かわす。
　熱が襲いかかる中、ハンザはジェスターの姿を探すが━既すでに、先刻立っていた場所に死し徒とは存在していなかった。
　━どこだ？
　疑問に思い、周囲に視線を巡らせた一いつ瞬しゆんの隙すき。
　それをジェスターは逃さなかった。
　炎の竜巻の中から腕が伸び、ハンザの腕をガシリと摑つかむ。
「！」
「貰もらったぞ！」
　死徒はそのまま人間の限界を遙はるかに超こえた膂りよ力りよくでハンザを引き寄せ、もう一方の手で首筋を貫かんとした。
　相手が空いた腕で黒こつ鍵けんを振るうよりも先に、自分の手刀が代だい行こう者しやを絶命たらしめる。
　そう確信したジェスターだったが━
　次の瞬間、その予測は裏切られる事となった。
　あまりにも想定外なハンザの反はん撃げきによって。

　ガシャリ、と、機械的な音がジェスターの鼓こ膜まくを震わせた。
　次の瞬間、彼はハンザの腕を摑んでいた手を離してしまっている事に気付く。

いや、強制的に剥はく離りされたのだ。
どこかから滑り込んだ刃に、指をすべて切り刻まれた事によって。
「……ッ！」
ジェスターは大きく一歩下がり、ゆっくりと黒鍵を拾うハンザを睨にらみ付つける。
そして、彼は見た、
神父の腕の辺りの布が切り裂かれ──そこから、黒鍵と同じ性質の刃が生み出されているという事に。
「貴様……義手か！」
「言ってなかったか？　お前らみたいな化け物の相手をしているからな、身体からだの七割は聖別済みのカラクリ仕掛けだ」
「驚おどろいたな。まさか教会にそんな技術があろうとは」
「教会は人を導くもの。あらゆる技術と秘術の最先端を収集するのは当然だろう？　まあ、実際のところはよくわからんがな」
ハンザはこともなげにそう言いつつ、先刻からの一連の流れを鑑かんがみる。
同時に彼は、切り落とした筈はずのジェスターの指が、いつの間にか手と接合されている事に気が付いた。
死徒ならではの肉体復元能力とも考えたが、治り方がいつも相手にする死徒達とは違う気がする。
「さっきの風といい……それがお前の能力か？」
「悪いが小心者なんでな。自分の能力を高説するつもりはない」
ジェスターは忌いま々いましげにハンザを睨にらみ付つけた後、手近にあった炎上中のパトカーの車体に手を突き刺し、そのままフレームを握りこむ。
片手で車一台を持ち上げたジェスターは、野球ボールのような勢いでその車をハンザに対して投げつけた。
ハンザは片足を上げてそれを受け止めると、下半身に仕込まれた魔術的な機械バネの力によって、勢い良く車体を押し返す。
その車体を飛び越え、死徒は警けい察さつ署しょの建物を駆け上

がった。
　神父は躊躇ためらいもなくそれを追い、自みずからも警察署のビルを垂直に駆け上がる。
　彼が走った後の壁には深い傷が生まれている事から、恐らくはなんらかの仕掛けを使っているのだろうが──それでも、一般人には到底マネできぬ行為だ。
　ビルの屋上に上がった所で、ハンザはサブマシンガンの洗礼を受ける。
　いつの間に拝借していたのか、ジェスターは警察の特殊部隊の装備品から景気良く弾を吐き出させた。
　同時に、左手では同じく警察装備のショットガンを撃うち放はなち、常人ならば挽ひき肉にくとされかねない量の銃弾がハンザの身に迫る。
　だが、彼は黒こつ鍵けんすら使わず、陽炎かげろうのように身体からだそのものが揺らめいたかと思うと、すべての弾丸の一部を自らの手ではたき落としながらその大半を回避した。
　アクション映画さながらの光景をみて、ジェスターは素直に賞賛する。
「なるほどなるほど、貴様は今まで見た代だい行こう者しやの中でもトップクラスだ！」
「世辞を言っても手加減はしないぞ」
「事実を言ったまでだ。その腕っ節……さては噂うわさの『埋まい葬そう機き関かん』という奴やつか？」
　埋葬機関と呼ばれる、代行者の間でも選りすぐりの者達で構成された組そ織しきがある。
　そこに所属する面子メンツは、吸きゆう血けつ種しゆ達の頂点と呼ばれる『二十七祖』と闘たたかえる実力を持ち、時には単体で屠ほふり去さるらしいと、死徒達の間では伝説と恐怖、そして戒いましめとして語り継がれていた。
　ジェスターはこれまで何度も代行者達を撃げき退たいしているが、

このハンザという男に比べれば、その誰だれも彼もが赤子も同然というレベルだったように思える。
　相手の強さに対して敬意を表して『埋まい葬そう機き関かん』に例えたジェスターだったが━ハンザは逆に、顔から余裕の笑みを消して、僅わずかに顔を顰しかめながら口を開いた。
「埋葬機関だと……？　この俺おれが？」
　そして神父は、『お前は何も分かっていない』とばかりに、呆あきれた調子で首を振る。
「巫山戯ふざけた事を言う屍しかばねだ。俺など『あの方々』の足元にも及ばん。いや、同じ地平にすら立たせては貰もらえんよ」
「なんだと？」
　眉まゆを顰ひそめるジェスターに、ハンザは淡々と語り続ける。
「俺は確かに核ミサイルや化学兵器程度のダメージなら貴様らに与える事はできるだろう。だが、主の影を歩くあの御お歴れき々れきは、人間の生み出した兵器など遠く及ばん！　一人一人が天変地異、主の御み業わざそのものを代行する……。主の領域を侵おかした邪悪を、主の御力で討ち滅ぼす。それが代行者の頂点たる『彼ら』の領域だ。俺などと比べる事は侮ぶ辱じよく以外の何物でもない」
　ハンザは小さく呼吸を整え、どうやら本気と思おぼしき構えをとった。
「貴様が侵したのは、『人』の領域に過ぎん。故ゆえに、俺が━━人の力で討ち滅ぼす！」

　何かの武術がベースになっていると考えられる構え。
　それを見た瞬しゆん間かん、ゾワリ、と、ジェスターは全身の細胞が震えるのを感じ取った。
　━なるほど、ここからが本気というわけか。
　確実に負けるとは思わない。
　だが、すべての実力をさらけ出さねば、この男の撃げき退たいは不可能だろう。

──聖せい杯はい戦せん争そうの序じょ盤ばんで、他の魔ま術じゅつ師しや英えい霊れいに手の内を明かすのは不味まずいな。
　どこで使い魔が見張っているか分からない。
　先刻の警けい察さつ官かん達のような宝ほう具ぐ頼りの戦いを仕掛けてくる面子メンツならば意に介する事もないが、本当に強力な魔術師が相手だった場合、こちらの能力をすべてさらけ出すのは弱点を教えているも同義であった。
　更さらに理由を言うならば、彼は屋上からの景色で気付いたのである。
　東の夜空が色を無くし、徐々に白み始めている事に。
　すなわち、間も無くこの空間に『朝』がやってくるという事に。
「……潮しお時どきか。まあ、今日きょうは挨あい拶さつだけという事にしておこう」
　そのままジェスターは転身し、隣となりに建つつホテルへと向かって跳ちょう躍やくする。
　だが──

「逃がさんよ」

　派手な機械音と共に、ハンザの右腕が勢い良くジェスターに向かって伸ばされた。
　再び顕けん現げんさせた黒こつ鍵けんを握ったまま、鋭いフォークのように突き出される右腕。それがまるでカエルの舌のように伸び、ホテルに向かって跳とぶ男を捉とらえんとした。
　しかし僅わずかに届かず、ギリギリの所で、機械の腕の伸長が止まる。
　思わず宙で身を捻ひねって身構えつつも、安あん堵どの笑みを浮かべて笑うジェスター。
　ところが──
　ガシャリ、と、再び機械音が響ひびき、伸ばされた先の手首が折れ

る形で開くと──断面の空洞から、何かが勢い良く射出された。
「なッ……」
　それがグレネードに似た特殊な榴りゅう弾だんだと気付いた時には既すでに遅く──

　聖水混じりの弾頭がジェスターの腹部に突き刺さり、そのまま勢い良く炸さく裂れつした。

警けい察さつ署しょ　裏口側駐車場

「……なんなの、あれ」
　警察署の裏口から脱出したアヤカとセイバーが、銃声に気付いて裏側の駐車場から見た物は──屋上の端から隣となりのビルに飛び移ろうと跳ちよう躍やくした男と、それに向かって腕を伸ばす神父。　そして、神父の腕が流りゆう麗れいな動きで数倍の長さまで伸びたかと思うと──その機械的なフォルムの腕の先から榴りゆう弾だんが飛び出し、男に直ちよく撃げきして小さな爆ばく発はつが起こった。
　そして、そのまま相手は隣りん接せつするホテルの窓へと叩たたき込こまれ──
　少し遅れて、腕を元の長さに戻した神父が、両手に何本もの剣を構えながらホテルへと跳躍する。
　隣接するといっても10メートル以上の距離が開いており、通常の人間ならば走り幅跳とびの世界チャンピオンでも落ちるような距離だ。
　だが、神父服の男は軽々とそれを飛び越え、ホテルの中へと入っていく。
「私、夢でも見てるの……？　それとも、あれも英えい霊れいって奴やつ？」
　その言葉を聞き、セイバーがふと気になったように尋たずねる。
「君は、俺おれを見て何か感じないか？」
「こんな時にナンパ？　勘弁してよ……」
「いや？　君は確かに魅み力りよく的てきな女性だが、今はそういう意味じゃない。俺を見て、筋力や魔ま力りよくの強さをなんとなくイメージで掴つかめたりはしないか？　ハッキリと文字という形で浮か

んでくるとか……」
「ちょっと何言ってるのかわかんないんだけど……」
　訝いぶかしげなアヤカの声を聞き、セイバーはフム、と考えた。
「そうか……やはり正式なマスターではないからか……」
「なんの話？」
「まあ、それは後でゆっくりと説明しよう。見えないのなら意味の無い事だしな。今重要なのは、君は今、英霊と普通の人間の区別がつかないという事だ。目立つ格かつ好こうをしてる英霊ならともかく、私服に着替えられたら外見は普通の人間と変わらない奴が多いからな」
　そこまで言って、セイバーは自分の身なりを確認した後、遠くの空が白むのを見て呟つぶやく。

「俺も私服を調達したい所だが……うん、丁度夜明けな事だし、宣言した通り俺もこの敷地から出るとしよう」

×　×

ホテル内部

　警けい察さつ署しよに隣りん接せつしているホテルは、場所が場所だけに、街まちでもっとも治安の良い宿泊施設という位置づけだったのだが──その評価は、この日覆くつがえされる事となった。
　突然近隣から銃声や爆ばく発はつ音おんが響ひびき渡わたったかと思うと、その爆発の余波に襲おそわれ、一部の客室に被害が出たのだ。
　たまたま無人の客室だったから良かったものの、風評被害は免まぬがれないだろう。
　ホテルのスタッフ達が、そんな客きやつ観かん的てきな状況も摑めずにかけずり回っている中──
　その『被害にあった客室』からホテル内部に侵入した神父は、結局

ジェスターの姿を見つける事ができなかった。
　完全にその気配を消し、魔力の流れすらも完全に途切れている。
　代わりに残されていたものは、廊下に倒れて呻うめいている数名の怪け我が人にんだった。
　恐らく、警けい察さつ署しょ方面の銃声などを聞いて起きた者が廊下に出て来たのだろう。中には女子供も含まれており、腕を切られて出血している者もいる。
「おい、大丈夫か？」
「うう……何が……」
　襲しゅう撃げきされた者達も自分の身に何が起こったのか理解していないようだ。
「傷口を布で押さえておくといい。すぐに救急車を呼ぶ」
　とは言ったものの、もしも死し徒とに何かされていたりするようならば、迂う闊かつに街まちの病院に運ばせるわけにはいない。下手へたをして生きる屍しかばねの大量発生などとなっては、それこそ聖せい杯はい戦せん争そうどころではなくなってしまう。
　──見た所、血を吸われたり、呪のろいを仕込まれている様子はないが……。
　するとハンザは、階段の陰からこちらを見てカタカタと震えている子供に気付いた。
「おい、少年。何か見たか？」
　まだ10歳さい前といった年とし頃ごろの少年は、青ざめた顔のままコクリと頷うなずいた。
「こわいおじさんが……『じゃまだ』っていって……みんなを……」
「その怖いおじさんが、どっちに行ったか分かるか？」
「……消えちゃった」
「……そうか、無事で良かった。もう安心だぞ」
　──なるほど、殺さなかったのは足止めのつもりか。
　フルフルと首を振る少年の頭を軽く撫なでた後、ハンザは携帯電話を取りだした。

「俺おれだ。野次馬への『暗示』は誰だれか一人に任せて、残りの三人でビルを囲め。外に避難する連中の中に紛まぎれているかもしれんから気を付けろ。怪しい奴やつは見逃すな」
　指示を出し終えたハンザは小さく溜ため息いきを吐き、世を憂うれうように呟つぶやいた。

「やれやれ……、死徒が聖杯を求めるとは、本当に世も末だな」

×　×

警察署近辺　大通り

「止まって下さい」
　警察署から立ち去ろうとしたアヤカ達の前に、一人の女性が立ちはだかる。
　若い黒くろ髪かみの女性だが、顔立ちは良く解わからなかった。
　なぜなら彼女は、両目を覆おおう形で奇妙な形のアイマスクをしており、その革とも布地ともつかない材質の目隠しの中心には、十字架の装飾が施されている。
　全身も黒いウェットスーツのようなものに身を包んでおり、その身体からだにフィットした布地の各所にも奇妙な装飾が見受けられた。
　腕に巻き付けられた純白の布がはためいており、アヤカは何かサーカスでもあるのだろうかなどと考えてしまう。
「申し訳ありません、周囲にいる怪しい人間を調べろと言われております」
「いや、そっちの方が何倍も怪しいし……」
　眉まゆを顰ひそめながら言った所で、アヤカは気付く。
　野次馬達が裏口側のこちらでも大勢行き来しているが、その怪しげな格かつ好こうをした彼女に目を止めている者はいない。
　──え？

──もしかして、私だけに見えてる？
　ゾワ、と背中に悪寒が走った。
　頭の中に、赤いずきんの少女がフラッシュバックする。
　狼ろう狽ばいしかけた彼女に対し、セイバーが安あん堵どさせるように言った。
「視線避けの結けつ界かいだ。恐らくその腕の布の力だろう。俺おれ達にだけ姿を見せてる状態だから気にするなアヤカ。それにしても、さっきから警けい察さつ署しよの周りに立ちこめてるこの匂においⅠ……集団暗示をかけやすくする香の類か」
「集団暗示？」
「大方、さっきの魔ま物ものと神父の戦いを隠いん蔽ぺいしようという腹だろう。聖堂教会の狩人かりゆうど連中は８００年経っても変わらないな。だが、俺が魔物か別の何かかぐらいは流石さすがに解わかるだろう？」
　セイバーの言葉を聞き、奇妙な格好の女が恭うやうやしく一礼した。
「サーヴァントとマスターの方とお見受けします。失礼致しました」
「いや、君が謝あやまる必要はないさ。職しよく務むに忠実なのはいい事だ」
　そんな事を言っていると、ホテルから次々と人々が避難し始めるのが見えた。
「吸きゆう血けつ鬼き……まだあのホテルにいるの？」
「はい。出入り口は結界で封ふう鎖さしていますので、死し徒とが通れば反応があります」
「それって、あそこから吸血鬼が出てくるかもしれないって事？」
「はい」
　淡々とした調子で頷うなずく謎なぞの女の言葉に、アヤカはちらりとセイバーを見る。
「面倒に巻き込まれるのは御ご免めんだからね……私はここを離れるよ」

「そうだな、俺もついていこう」
「来なくていいのに……」
　呆あきれたように溜ため息いきを吐きつつ、アヤカは足早にその場を後にした。
　その背に、『暇ひまを見て中央教会に来て下さい。マスターの方に、監かん督とく役やくからお話がある筈はずです』という声を受けるが、アヤカにとっては関係の無い話だった。
「悪いけど……私はマスターじゃないんだ。ごめんね」
「？」
　首を傾かしげる女の背後では、次々とホテルからの客が避難していく。
　その中に紛まぎれて、一人の子供がちらりとアヤカ達の方に目を向けた。
　視線避けの結けつ界かいを張っている筈はずの、教会関係者の女も含めて。

　先刻ハンザに頭を撫なでられたその子供は──
　代だい行こう者しやである女を見て、無邪気さとは程遠い笑みを浮かべる。
　そして、背中に移動した令呪を意い識しきしながら心の中で呟つぶやいた。
　──ああもう、疲れたからとりあえず一休みしようっと。
　暫しばらく避難の列に並んだ後、少年はそっと列を離れ、明け方の街まちの中に消えて行く。
　代行者の結界を潜くぐり抜ぬける事も、昇りつつある朝日を全身に浴びる事も、今の彼にはなんら問題の無い事だった。
　ジェスター・カルトゥーレの肉体は現在、死し徒としてのものではなく──ただの人間の少年のものに他ならなかったのだから。
　そして、少年は年相応の無邪気な笑みを貼はり付つけ、呟いた。
　笑顔の裏に、子供らしからぬ歪ゆがんだ欲情を交えながら。

「アサシンのお姉ちゃん、早く戻ってこないかな！」

×　×

警けい察さつ署しよ

「大丈夫か」
　戦場となった警察署。
　聖堂教会の代行者達が上手うまく暗示をかけた事もあり、事件は『逮捕された武装強盗を仲間が救おうと襲しゆう撃げきしてきた』という形で収束させる方向で落ち着いた。
　だが、まだロビーや駐車場には生々しい傷跡が残っており、警官達も満まん身しん創そう痍いといった状況である。
　そんな空気に満ちた署内の医い療りよう室しつで、死徒に右手首を奪われた警官が治療を受けていた。
　大鎌の宝ほう具ぐを持った女性警官から治ち癒ゆ魔ま術じゆつを受けているようで、傷口からの出血はかろうじて止まっている。
　だが、失われた手首の再生となるとかなり高レベルの治ち癒ゆ魔ま術じゆつが必要となる。通常の義手を用意するという手段もあるが、その状態ではすぐに戦線に復帰する事は無理だろう。
「君は無理をするな。あとは我々で何とかする」
「……いえ、やります。やらせて下さい」
「その怪け我がでか？　次はそれこそ英えい雄ゆう王おうやセイバー、そしてまだ情報すら摑つかめんライダーとの戦せん闘とうになるかもしれん。アサシンよりも過か酷こくな戦闘の中で、足手まといにならんという保証でもあるのか？」
「それは……」
　悔しそうに歯を軋きしませる警けい官かんに、署長は思う。
　──彼は、この作戦に対して最もつとも前向きだったな。

各地から集めた、はぐれ魔ま術じゆつ師しの血を引く『魔術回路持ちの警官達』の一人。
最初は単なる手て駒ごまとしか考えていなかった署長だが、彼のような熱意に満ちた者もいると知り、考えを多少改めた。
だからこそ、無駄死にをさせるわけにはいかない。
この戦争で敗やぶれ自分が死んだ後に、次の機会の為ためにそれを引き継ぐ者が必要だからだ。
「君にはまだ未来がある。無駄にそれを散らす事はない」
「でも……俺おれは、街まちの未来を守りたいです」
「街の未来だと？」
「英えい霊ゆうとの戦いだけなら、諦あきらめがついたかもしれません。ですが、あんな悪あく辣らつな輩やからを放置したら、街がどうなるか……。魔術師としてじゃない、警官として放って置けません」
まだ30代に届くか届かぬかという警官の言葉に、署長は溜ため息いきを吐きながら言葉を紡つむぐ。
「心意気は買おう。だが、根性論に乗じて全体を危険にさらすわけにはいかん。まだ闘たたかえると言うのなら、片腕や義手で武器が扱えると実証してみせる事だ」
「……やってみせます」
闘志に満ちた声で言う若い警官に、署長は更さらに声をかけるべきかどうか迷っていたが──
胸元の電話が鳴り、強制的に会話は中断させられた。
「……私だ」
『よう兄弟！　災難だったな！　まさか吸きゆう血けつ鬼きとは！　こりゃ、あれだ。俺じゃなくてフランケンシュタイン博士でも召しよう喚かんしてよ、怪物を大量に繕つくろってもらった方が良かったんじゃねえか？　なあ？』
キャスターの相変わらずの調子に対し、署長は溜息を吐いた後に淡々と言葉を返す。
「冗談としては笑えんね。死人こそでなかったが、重傷の人間が出て

いるんだ」
『まあそう言うな。戦争に怪我人はつきものだ。あの化け物相手に一人も死ななかったのは僥ぎよう倖こうだぜ？　今回の経験を元に、お前らの装備の力をまた引き上げてやれるってもんだ』
「期待しているぞ」
　心の底から、そう告げた。
　自分達の経験を積むと同時に、宝ほう具ぐの限界を引き上げる必要がある。
　まだ宝具の力を完全に引き出してはいないが、徐々に宝具の真しん名めいを解放し、万全に能力を振るう者も現れるだろう。宝具の多くは、エクスカリバーやゲイ・ボルクといった『真名』を詠えい唱しようする事で、最大限に力を発揮する事ができる。それを全員がこなせるようになれば、いよいよもって高レベルの英えい霊れいを相手に勝利も見えてくるというものだ。
『今んところ真名の解放に一番近いのは……そうだな、兄弟、あんたの日本刀だ』
「そうか。他の者もすぐに追いつかせる」
　断言する一方で、決して皮算用では動くまいと自みずからに言い聞かせる署長。
　そんな署長に対し、キャスターは言った。
『それはそうと兄弟。獅し子し劫ごうって奴やつから、例のブツが届いたぞ？』
「……ああ。噂うわさ通りの仕事の速さだ。できれば身内のマスターとして引き入れたかった程だ」
　獅子劫というのは、凄すご腕うでで知られるフリーランサーの魔ま術じゆつ師しの名である。
　大金を叩はたいて『あるもの』の入手を頼んでいたのだが、聖せい杯はい戦せん争そうの期間中に間に合うかは五分と五分だと踏んでいた。
　こんなにも早く届いた事は、出鼻を挫くじかれた中に見えた光明で

あると言えるだろう。
　それを証明するかのように、電話の向こうでキャスターが所見を述べた。
『こいつなら、並の英霊だろうが吸きゆう血けつ鬼きだろうが、俺おれが処理すりゃ多分心しん臓ぞうに届くと思うぜ？』
　だが、その直後、署長にとって予想外の言葉が吐き出される。
『兄弟の横で怪け我がしてる若造の為ために作ってやるよ。喰くわれちまったダガーの代わりにな』
「……彼が闘たたかえる事を証明したらの話だ」
『ああ、待ってるぜ？　その間に、神かみ代よの干物を水に戻して、最高の武器を作ってやるよ』
　まるでその警官が復帰する事を確信しているかのような物言いをした後、キャスターは電話の向こうで『あるもの』の名を口にした。

『このヒュドラの毒短剣英雄殺しを下敷きにしてな。ははッ！』

×　　　　　　　　　　×

スノーフィールド西部　大森林

　街まちから数十キロメートル離れた森林の中──
　女アサシンは深い森の中に蹲うずくまり、自らの未熟さを悔いていた。
　──なんという事を……。
　──私は、なんと愚おろかな真似まねをしてしまったんだろう。
　自分の魔ま力りよくが尽きぬ事を、殆ほとんど疑問にも思っていなかった。
　ただ、前だけを見ていた。自分の成すべき事しか見えていなかった。
　その結果がこれだ。

魔物から与えられた魔力で、偉大なる長おさ達の御み業わざを行使してしまった。
――長達の偉業を穢けがしてしまった。
――私にはもう……自分を信徒だと名乗る資格もない……。
彼女が暗殺者の長、『山の翁おきな』として選ばれなかった理由は、彼女の狂信者としての一面を周囲の人間が恐れた事をはじめ、多々あるのだが――そのひとつに、彼女は暗殺者とするにはあまりにも愚ぐ直ちよくすぎたという事があげられる。
警けい察さつ署しよの一件にしても、普通の暗殺者ならば、正面から叩たたき潰つぶすという選せん択たく肢しは取らぬであろう。民衆に『暗殺者の力』を誇示する為ためにわざと人目に付く場所で殺害を行う事もあるが、『山の翁』と呼ばれる長達は、真に『暗殺者』と呼ぶに相応ふさわしい振る舞いをする者が多い。
彼女の中ではそうした『暗殺者』というよりも『戦士』としての面が強く見られたからこそ、当時の幹部達は彼女が『山の翁』となる事を恐れた。
組そ織しきが変質し、表舞台に自分達の臓ぞう腑ふを晒さらす危険を感じ取ったのである。
自覚の無い女アサシンは、自分自身の未熟さを責め続けた。
――私は何様のつもりだったんだ。
――このような未熟者に、長達を惑わした異端の儀式を誅ちゆうする資格などあったのか？
――かく言う私自身も、聖せい杯はいに引き寄せられた身ではないか。
――ああ、私は最初から聖杯の喚よび出しに応じていたんだ。
――聖杯を求める者が聖杯戦争に喚ばれる。
――押しつけられたこの知ち識しきが本物であるならば、私も聖杯を求めていた事になる。
――そうだ、私は実際に聖杯を求めていた。
――聖杯を求め、それを破は壊かいする事で、自分の信仰心を示そう

とした。
　──自じ己こ顕けん示じ欲よくの為に、私がそうすると……。
　──結果的に聖杯を望むと、聖杯戦争の混沌に見抜かれていたのだ。
　地面に跪ひざまずき、彼女は己おのれの弱さを恥じる。
　──このような異端の儀式にすら、私の賤いやしい内面を見透かされていたのだ。

　義務である礼拝の時間が訪れた事を、彼女の体内時計が告げる。
　だが、彼女は現在の穢れた自分に、その資格はないと考えた。
　代わりに彼女は、瞑めい想そうに耽ふけり、自分自身の弱さと向き合う事にした。
　それから、どれほどの時間が経過しただろうか。
　彼女はゆっくりと立ち上がると、その双そう眸ぼうに、暗く鋭い輝きを満たしていた。
　──まだ……終わりではない。
　普通ならば、心を折り、闘とう争そうを諦あきらめていたかもしれない。
　あるいは、『死し徒との魔ま力りよくだろうと知った事か』と妥協していたかもしれない。
　しかし、彼女はそのどちらも選ばず、さりとて逃げる事もせず、自分の立場を見つめ直した。
　──ここに私が存在しているのも、神の思おぼし召めしによるものだ。
　──今、この時間も与えられた『定じよう命みよう』の一部なのだとすれば──私は成すべき事をせねばならない。逃げる事など許される筈はずも無い。
　──私が成すべき事は……何も変わらない。この異端の儀式を破は棄きする事だ。
　──そして……あの魔物を、狩る。
　──私の未熟さなど……立ち止まる理由にはならない。それを言い訳

にするなどできない。
　彼女の行動が、自みずからの感情を整理する為ためなのか、あるいは他の何かの為なのかは解わからない。
　女アサシンはただ、この数分間蹲うずくまって時間を無駄にした自分自身の弱さを恥じた。
　──ああ、私はなんと未熟なのだろう。
　朝日が森に差し込むのを確認した彼女の目に既すでに迷いはない。
　その弱さを認めた上で、彼女は改めて戦う道を選んだのである。

　──あの魔物を倒すには、如何いかなる手を使うべきか。
　人ならざる魔。
　一度は妄想心音ザバーニーヤで心しん臓ぞうを握にぎり潰つぶせた事は確かだ。だが、まだ存在し続けているのも事実だ。
　──奴やつに、心臓はいくつある？
　──どうすれば、奴のすべてを消す事ができる？
　改めて、女アサシンは自分の持つ力について考える。
　先せん達だつの御み業わざの模も倣ほう。だが、性質は同じであれど、威力まで完全に同一というわけではない。
　彼女本人はすべての業について『先達には及ばない』と考えていたが、その効果には波があり、実際の『山の翁おきな』が使っていた技と同等の力を持つものもあれば、勝っているものも劣っているものも存在していた。
　例えば、かつて『静せい謐ひつ』と呼ばれた山の翁が使っていた『妄想毒身ザバーニーヤ』という業がある。
『静謐』本人の身につけていた力は実に強力であり、ありとあらゆる体液、爪つめや皮ひ膚ふ、吐息すらも含め、己おのれのすべてを猛もう毒どくとなしていたという。万軍を相手にしても、風に毒を乗せる事でそのすべてを屠ほふり去さったという恐ろしき伝説が残されていた。
　だが、女アサシンは自分の『血』に毒を濃のう縮しゆくさせ、一時

的にその真似まね事ごとをするに過ぎない。これは彼女が、無差別に周囲に死をばらまき、同胞や無む辜この民すら殺しかねない事態を想像してしまったが故ゆえに、毒の濃度が減ったせいだと言われている。
『狂想閃影ザバーニーヤ』などは髪かみの毛を自在に伸しん縮しゆくさせて操あやつる業わざだが、実際の使い手だった『山の翁おきな』は、髪の毛一本一本を蜘蛛くもの糸の如ごとき細さに変質させ、数里先から誰だれにも気付かれる事なく相手の首を跳はね飛とばす事も可能だったとの口く伝でんが残されていた。
　逆に女アサシンは知らぬ事だが、可か聴ちよう領りよう域いきを超こえた歌声で相手を操る『夢想髄液ザバーニーヤ』などは、本家の威力を超こえる力を持っていた。先刻のように大人数が相手ならば、脳を揺らし魔ま術じゆつ回かい路ろうを暴走させる効果に終わるが、一人に『歌』を集中させた場合は、並のサーヴァントに膝ひざをつかせ、人間ならば脳そのものを支配し操る事もできる程だ。
　本家にもそこまでの威力は無かったのだが、彼女がそれを知ったとしても、認める事はないだろう。彼女にとっては、自みずから力で編み出したという時点でかけがえのない偉業なのだから。

　女アサシンはそのような無数の『宝ほう具ぐ』の域に達した技術を頭の中で並べ、魔物を消し去るのに最適な方法を思案し続けた。
　だが、その最中、ほんの僅わずかな違和感を覚えた。
　生前にも、時折感じていた疑念である。
『瞑想神経ザバーニーヤ』と呼ばれる、周囲の地形構造を完全に我が身として知覚する技術。
　警けい察さつ署しよで電源を探すのに使用した御み業わざだが、この業についてだけは、どうにも妙な違和感に囚とらわれるのだ。
　この御業は、とある『山の翁』が使用していたと言われているが、一体いつの時代に存在していた『山の翁』なのかは、正確に把握されていない。

彼女のみならず、彼女の同胞達や指導者、それこそ現げん役えきの『山の翁』の間でもだ。
ただ、そうした御業を使う『山の翁』がいたという伝承だけが残されており、それを元に御業を再現して見せたのだが——
——本当に、この『瞑想神経ザバーニーヤ』は、このような能力なのだろうか？
——いや、本当に『瞑想神経ザバーニーヤ』などというものを使う『山の翁』は存在していたのだろうか？
狂信者と呼ばれる彼女にさえ、そんな疑念を抱かせる。
いや、すべてを捧げてありとあらゆる御業を模倣してきた彼女だからこそ、その疑問を覚えたのかもしれない。

——何かが……隠されている気がする。
——この『瞑想神経ザバーニーヤ』を使っていたという『山の翁』は本当に実在を——————
そこで彼女は強制的に思考を止めた。
疑念などあってはならない。
そのような事を考えるのはやはり自分が未熟だからだと恥じ入り、彼女は再び敵を倒す為ための思案に耽ふける。

心の底で、その奇妙な違和感と、『何かが起こるかもしれない』という運命的な予感が小さく呻うめき続つづけるのを感じながら。
まるで、何かに共鳴しているかのように。

×　　　　　　　　　　×

コールズマン特とく殊しゅ矯きよう正せいセンター

時は僅わずかに遡さかのぼる。
「さて……そろそろ時間ですね」

警けい察さつ署しよが女アサシンによって襲しゆう撃げきされる直前、ファルデウスは施設刑務所の最奥にある、自分自身の地ち下か工こう房ぼうにその身を置いていた。
彼は、近代的な刑務所の中とは思えぬ魔ま術じゆつ的てきな装飾の施された工房の中央に立ち、ゆっくりと呼吸を整えていた。
周囲には精巧なマネキンから呪じゆ術じゆつに使うような布人形まで、様々な種類の人形が鎮ちん座ざしており、そのいくつもの『目』が中央の台座を見つめている。

ファルデウス・ディオランド。
彼は代々人形を使う魔ま術じゆつ師しの家系であり、かつて『冬ふゆ木きの聖せい杯はい戦せん争そう』に参加した魔術師の縁えん者じやでもある。
第二次世界大戦の前に行われた『第三次聖杯戦争』。
アサシンを使し役えきしたという魔術師の闘とう争そうは、彼の使っていた人形に魔術的な『記憶』として刻み込まれ、その人形を介して一族に伝えられてきた。
一子相伝ではなく、遠縁の者まで含めて、広く、際限なく。
しかし、一族の誰だれからも、『我こそが聖杯戦争を征する』と名乗り出る者は現れなかった。
掟おきて破りに次ぐ掟破り。禁きん忌きの術と魑ち魅み魍もう魎りようが渦うず巻まいていたと言われる第三次聖杯戦争。
その生々しい記録を見てしまえば、並の魔術師が二の足を踏むのも仕方のない事だった。
あるいは、一族の中でも力のある者は、その聖杯に何かよからぬモノが混じってしまったと気付いていたのかもしれないが。
そんな中──ファルデウスの祖父は合衆国の政治家、軍部と手を組み──一つの計画を練り上げた。
聖せい杯はい戦せん争そうを、自みずからの土地で執とり行おこな

うと。
　不可能な話だと思われた。
　何しろ聖杯戦争の根幹たる、土地に根ざす『大聖杯』の仕組みすら、アインツベルンの秘術として外部には漏もれていないのである。
　しかし、それは今後の課題として、冬ふゆ木きの土地に匹敵する霊れい地ちを確保し、下地とする準備だけは進めてきた。
　どちらにせよ、有用な霊地の確保は政府としても不可欠だったのだろう。
　聖堂教会の権力が強い合衆国においては、魔ま術じゆつを政治に絡からめようという動きは抑えられ、あくまで一部機関の管轄という事で落ち着いていた。
　１００年後、２００年後に少しでも冬木の聖杯戦争に近づければ良い。
　例えアメリカという国家のシステムが変わろうとも、そこを基き盤ばんにし続ける組そ織しきを練り上げるのだ。
『彼ら』はそう意気込み、土地守の一族から土地を強引に奪い取り、土地の霊脈を大規模に弄いじり続けたのである。
　しかし、ファルデウスの父がその事業を受け継いだ頃ころ、１００年を待たずして、大きな転機が訪れた。
　ファルデウスの家系とは別に、政府の暗部に関わりを持っていたとある魔ま術じゆつ師しが――大聖杯のシステムの一部を再現できると提案してきたのである。
　――「冬木の聖杯の一部を、盗んでくるよ」
　――「それを、こっちで培ばい養ようすればいい」
　何を戯ふざけた事を。
　誰だれもがそう思ったが、その魔術師が過去に政府に対していくつもの実績を残していた為ため、無視する事もできなかった。
　しかし、大聖杯を培養した所で偽にせ物ものは偽物だ。完かん璧ぺきな存在である冬木の聖杯と比べて霊脈との繋つながりも強くはない。

それで本当に再現できるのかと尋たずねたファルデウスの父に、魔術師は言った。
──「呼び水を使えばいいよ」

「呼び水、ねえ」
父から聞かされていた話を思い出し、ファルデウスは苦笑しながら独りごちる。
「その『呼び水』が、街まちの南にガラスのクレーターを作ったとは、皮肉にも程がある」
大きな溜ため息いきを吐いた後、スウ、と笑みを消し、自らの任務を開始する。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公──」

ファルデウスの口から漏もれ出す言葉は、紛まぎれもなく『英えい霊れい召しよう喚かん』の呪じゆ文もんだった。
長く長く呪文が語られるにつれ、空気の質が変じていく。
ありえない詠えい唱しよう。
起こりえぬ儀式。
聖せい杯はい戦せん争そうを知る魔ま術じゆつ師しならば、誰だれもがそう思うだろう。
何故なぜなら、すでに英霊はすべて召喚されているのだから。
スノーフィールドでの英霊は六柱。
ファルデウス自身がランガル達魔術協会に対して喧けん伝でんした事だ。
そして、その言葉に偽りはない。
偽いつわりの聖杯戦争。
本物でありながら、偽りの儀式のパーツとして喚よばれた英霊達。
彼らは生いけ贄にえに過ぎない。

霊脈を荒らし、一定方向に『波』を集約させる為ための。
そして、その反動を利用し━本当の聖杯戦争を開始する為の。

「───抑止の輪より来たれ、天てん秤びんの守り手よ……！」

詠唱を終えた瞬しゅん間かん━ファルデウスの工こう房ぼうが輝きに満ちる。
周囲に鎮ちん座ざしていた無数の人形達の目がその光を反射し、カタカタと小刻みに震え始めた。
英霊の顕けん現げんを祝福するかのように。
あるいは、満ちる死の気配に怯おびえるかのように。

そして、光が部屋の一点に収束し━

何も起こらなかった。
「……？」
光が消えると人形達のざわめきも止まり、ただ、冷たい静寂だけが工房を包み込んでいる。
「……失敗……？」
英霊の気配も、魔力の繋つながりも感じない。
なにより、英霊からの『汝なんじがマスターか』と問い求める声もなかった。
「ふむ……」
しかし、ファルデウスの顔に焦しよう燥そうの色はない。
正直な話、五分と五分だと思っていた。
六柱の英えい霊れいを呼び水として追加で七柱の『英霊』を呼ぶなど、デタラメにも程がある。
なにしろ既に英えい雄ゆう王おうのような強力な英霊が顕けん現げんしており、『呼び水』としては総量が多すぎるのだ。
「まあ、ならばプランＢという事にしますか」

ファルデウスは小さく溜ため息いきを吐くと、そのまま工こう房ぼうを後にした。

×　×

　第二の工房でもあり、モニタールームにもなっている刑務所内の一画。
　そこに入った所で、ファルデウスは作業をしていたアルドラをはじめとする部下達に告げた。
「プランＢに移行しましょう。フランチェスカさんとオーランドさんに連絡を」
「……英霊は顕現しなかったのですか？」
　アルドラの直接的な問いに、ファルデウスはあっさりと頷うなずいた。
「ええ。やはり『時間制限』をつけたとしても一度に顕現できるのは七柱が限度なのでしょう。用意していたプラン通り、セイバーを『本物の一柱目』ではなく『偽にせ物ものの七柱目』として、偽いつわりの聖せい杯はい戦せん争そうを遂行します」
　──この場合、聖杯が顕現するのかどうかは解わからないが……それも含めて、次回への課題という所か。
　──しかし、令れい呪じゅだけはしっかり浮かんできたんだが……。
　──現在のマスターを始末し、この令呪で英霊と再契約する事も可能なのか？
　右手の令呪を冷めた目で見て、ファルデウスはメモ用紙にペンで経過を書き込んだ後、各方面へ連絡を繋つなごうとする。
　そして、彼はほんの僅わずかな違和感に気付いた。
　整然と並べられたモニターのいくつかに、ノイズが走っている。
　それならば単なる故障とも考えられたのだが──問題は、『使つかい魔まからの映像』にまでノイズが走っているという事だった。
　モニターの形はしているが、魔術的なものである。

通常のノイズなどありえないので、誰だれか外部の魔ま術じゆつ師しから干渉を受けているのかと疑った。
そして、モニターチェックをしている最中──ファルデウスは、自分が手元のメモ用紙に落書きをしている事に気が付いた。
──おっと、つい。
──普段はこんな事しないんだが……。
──やはり英霊が召しよう喚かんできなかった事に対して、多少ショックを受けているのか？
自分の行動に首を傾かしげた後、メモ用紙を破こうとした。
そして、不意にその手が止まる。
落書きの中に、自分の筆跡とはまったく違う文字で、明確な意味を持つ文章が書かれていたからだ。

『問おう　汝なんじが我のマスターか？』

後頭部のあたりから、血が一斉に引くような感覚があった。
焦しよう燥そうを気取られてはならぬと、ゆっくり周囲に視線を巡らせるファルデウス。
そこで彼は、暗くら闇やみを見た。
ノイズの走ったモニターに映っているのは、刑務所の外の様子だ。
照明の死角となっている森の影。
そのひときわ深い暗闇に、ファルデウスの視線が引き寄せられた。
正確には、その中央に浮かぶ、小さな白い物体に。
モニターは使つかい魔まとリンクしている魔術器具の方だ。
彼は使い魔に指示を送り、その暗闇に近づかせた。
やがて、ファルデウスは確信する。
その闇の中に浮かんでいるものが、歪いびつに歪ゆがんだ髑髏どくろ面めんであると。
「……失礼、少し外の空気を吸ってきます」

ファルデウスは部屋を出ると、足早にその映像の場所へと向かった。
　外部の魔ま術じゆつ師しの罠わなという事も考えられる。
　慎しん重ちように周囲を警けい戒かいしたまま、刑務所の通路を進む。
　夜明け前の長い通路。
　窓からは殆ほとんど灯あかりが差し込まない廊下を足早に歩いていると──
　廊下の突き当たりにある蛍光灯が明滅し、ついには完全に消えてしまう。
　前方に唐突に生まれた暗闇。
　その中に、ファルデウスは見た。
　色濃い闇の中に浮かぶ、白い髑髏面を。
　──間違いない。
　──あの髑髏面は……アサシンの英えい霊れいだ。
　召しよう喚かんに成功していたのか？
　いや、既すでに召喚されている、『生いけ贄にえ』として呼ばれたアサシンではないのか？
　様々な憶おく測そくが飛ぶ中──廊下の先の蛍光灯が再び点灯し、同時に、白い面が消えていた。
「今のは……」
　呟つぶやいた瞬しゆん間かん、今度は自分の真上の蛍光灯が消えた。
　それと同時に、背後から声がかかる。

「……振り返るな」

　かろうじて男だと解わかる声。だが、年ねん齢れいや体格などはまったく想像できない無機質な声が、ファルデウスのすぐ背後から囁ささやかれたのだ。

「……ッ！」
　ファルデウスはその瞬間、自分の死を覚悟した。
　ここから何をしても、すべては無駄に終わる。
　自分の持てる如何いかなる魔ま術じゆつを行使したとしても、この状況から助かるのは不可能だと。
　それ程明確な『死』の予感を覚えるファルデウス。
　背後に何がいるのかは解らない。
　無限に暗くら闇やみが広がっているような気さえしてくる。
　それ程までに、何も感じなかった。
　殺気に満ちた声などという話ではなく、まるでその逆──
　背後からの声には、何一つ気配というものが感じられなかったのである。
　空気すら存在しない『無』の空間が、直接自分に声を掛けてきているかのような感覚。
　それこそ、自分の妄もう想そうが生み出した幻げん聴ちようなのではないかと疑う程──その『声』の存在感は希き薄はくだった。
　それでも、ひとつだけ想像できる事があった。
　自分の背後に何かがいるのだとすれば──それはつい今しがた、暗闇の中に浮かんでいた白い面なのだろうと。

「問おう……汝なんじが我のマスターか」

　虚無の問い掛け。
　振り返ればそこに答えがある筈はずなのに、ファルデウスにはどうしてもそれができなかった。
　ただ彼にできるのは、静寂の中、自分の背に立つ男に対して口を開く事のみ。
「……ええ、先ほどの召しよう喚かんで貴方あなたが現れたのであれば、そういう事になります」
　僅わずかな間を置いて、囁き声がファルデウスの鼓こ膜まくを揺ら

す。
「……汝に、信念はあるか」
「信念……？」
　訝いぶかしむファルデウスの背から、声はただ、淡々と言葉を投げかけた。
「……汝なんじには、人生を捧げるべき信念があるのか？」
　少し考えた後、ファルデウスは呼吸を整えながら答えた。
「我らが合衆国の為ために魔ま術じゅつのすべてを捧げる。それが私の信念ですよ」
「……人の命脈を止めてでも、それを貫き通す覚悟があるのか？」
「人を殺してでも、という事ですか」
「……我と契約するというのは、そういう事だ」
　聖せい杯はい戦せん争そうである以上、命のやりとりは覚悟している魔ま術じゅつ師しが大半である。だが、この自分に迫る『死』を色濃く実感する状況で即答できる魔術師がどれだけいるだろうか。
　僅わずかな沈黙を経て、若き魔術師は、驚おどろく程に穏やかな心で口を開いた。
「もちろん。合衆国の為なら、私は国民を殺す事すら厭いとわない」
　断言したファルデウスの言葉に、暫しばしの静寂を経て、背後の暗くら闇やみが言葉を放つ。

「……我が名は、ハサン・サッバーハ」

　英えい霊れいは、自みずから真しん名めいを告げた。
　ファルデウスは確信する。まだ契約が成立していない以上、これは念話ではない。
　だが、確実にその名乗りは、自分の耳にしか届いていないであろうと。
　本当に、ただファルデウスの脳の一点だけを揺らす囁ささやきだった。

まるで、臓ぞう腑ふに染み込む呪のろいのようにも感じられる。
「汝なんじが信念を失わぬ限り、我は汝の影となろう」

そして、最後まで姿を見せぬまま──『影』は最後の言葉を残し、そのまま闇の中へと消えていった。
後に残されたのは、今だに動けぬファルデウス。
魔ま力りよくの線が、遠くにいる『何か』と繋つながったような気がする。
だが、魔力の移動は殆ほとんど感じられず、本当にリンクしているのかどうかすら、即座に判断する事はできなかった。
「なるほど……今いま更さらながら実感しましたよ」
答えをひとつ間違えたら死んでいたかもしれない。
召しよう喚かんした英えい霊れいも、ひとつボタンを掛け違えれば死神へと変わる。
英霊の理不尽さ、そして恐ろしさを実感し──
ファルデウスは冷や汗を滲にじませつつ、小さく笑った。

「これが……聖せい杯はい戦せん争そうか」

ゆめのなか

「わあい！　わんちゃんだー！」
　無邪気な声が、日の照る庭に響ひびき渡わたる。
「ネコさんも、リスさんもいる！」
　彼女は庭の芝生の上を行き交う動物達をトテトテと追いかけ、そのうちの一匹を捕まえて抱き上げた。
「みんな、まっくろさんが連れてきてくれたんだね！　ありがとう！」
　少女が視線をあげると、そこには黒く巨大な影──ライダーが蠢うごめいている。
　椿つばきはこのサーヴァントを『まっくろさん』と呼んでおり、特に怖れている様子はない。
　空には無数の鳥が群れを成して飛んでおり、彼女の周囲には小動物が元気に駆け回っている。
　ちょっとした動物園のふれあい広場といった空気の中、椿は幸せを感じていた。
「椿つばき、そろそろお昼ごはんにしましょう？」
「ちゃんと手を洗うんだぞ？」
「はあい！」
　両親の言葉を受け、家の中へと入っていく椿。
　彼女は一度庭を振り返り、日光に満ちた庭の光景を見つめ直した。
　鳥の囀さえずり。
　犬や猫が日向ひなたぼっこをする芝生。
　木の実を齧かじるリスの親子。

彼女が理想に描いていた『庭』の風景だ。
　ただひとつ、その中心に黒い巨大な影が揺らめいているのが異様なのだが、椿はその異様さにも気付かぬまま、満足そうに微笑ほほえむ。

　そのささやかな庭の代だい償しように、世界で何が起こっているのかも知らぬまま。

×　　　　　　　　　　×

安モーテル

『続いてのニュースです。スノーフィールド市内の動物病院が、現在パンク状態です。今朝けさ未明から、市内各地で動物が昏こん睡すい状じよう態たいになるという事象が多発し、新種の伝染病ではないかと住民達に不安が広がっています。昏睡状態になった動物はすぐに意い識しきを取り戻しているとの事ですが、皮ひ膚ふに赤黒い斑点が浮かんでいる事から、市は衛えい生せい局きよくと連携して調査を――』

　市内のケーブルテレビでそんなニュースが流れる中、安モーテルの部屋に暢のん気きな声が響く。
「うわあ、やっと手続きが終わった！　やりましたよジャックさん！」
『うむ。喜ぶのはいいが、とりあえず、私の真しん名めいを堂々と口に出すのはどうかと思うぞ』
「あ、そうですよね！　ごめんなさい！　……じゃあ、何か渾名あだなを考えましょう！　ええと……英国式ヘルスラッシャーさんとか……」
『素直にバーサーカーと呼びたまえ』

テンションが上がりぎみのフラットに、狂戦士バーサーカーウォッチが釘を刺す。
　フラットがはしゃいでいるのは、手にしている携帯電話に関してだ。
　写真付きのＥメールなどを送れる、国際電話にも対応した最新型の携帯電話で、これで時と計けい塔とうの師し匠しように連絡が取れると喜んでいる。
「やっと色々と繋つながるようになったんですよ。せっかく本体は昨日きのう買ったのに、ただのカメラとラジオとしてしか使えなかったですからね」
　画面を見ながら、様々な写真を写し出していくフラット。
　その中には、爆ばく発はつしたオペラハウスの写真なども写っている。
「昨日きのうの英えい霊れいの人の演説、写真に撮とっておけば良かったなあ。俺おれ自身がインタビュー受けて舞い上がっちゃってたから、ついうっかり写真に撮り損ねちゃいましたよ……」
『まあ、敵の英霊の情報を得る為ためには、写真を撮るというのも手か……』
　なんとか前向きに受け取ろうとするジャックに対し、フラットは目を輝かせながら言った。
「あ、でも、死し徒との人と、もう一人英霊を写真に撮ったんですよ俺！」
　フラットが腕時計に向かって携帯の画面を見せつける。
　するとそこには、昨日警けい察さつの駐車場で暴れていた死徒の姿が映っていた。
「これって貴重ですよ！　写真撮ってた他の人は、教会の人の暗示で自分でデータを消したりしちゃってましたから！　ああ、暗示回避の訓練を積んでおいて良かったぁ！」
『ちょっと待ちたまえ。吸きゅう血けつ鬼きも気になるが、それよりも「もう一人の英霊」というのについて詳くわしく教えてくれたま

え』
「あ、そうか。ジャックさんはあの神父さんと死徒のバトルに釘くぎ付づけだったから、気付いてなかったんですね」
『なぜその時私に言わなかったのかね!?』
「いやあ、一いつ瞬しゅんだったんで後でいいかなって」
　あっさりと言うフラットの言葉に、バーサーカーは『そろそろ一度本気で説教をした方がいいだろうか』と思い、念話で大声を張り上げようとしたのだが——
　それより一瞬早くフラットが紡つむいだ言葉によって、冷や水を心に浴びせかけられる。

「それに……多分下手へたに騒さわいで見つかってたら、一瞬で殺されてたと思いますし」

『……なに？』
「あんなに凄すごいエネルギーの『塊かたまり』を見たのって初めてですよ。どんな能力を持ってるかとか、真しん名めいはなにかとか、そんな以前の話で……目をつけられただけで瞬殺されてたろうなーって思います」
　フラットの表情はいつも通りだったが、バーサーカーは直感で理解した。
　この少年は、何一つ嘘うそは言っていないのだろうと。
　自分達が死の横を通り過ぎていたという事をサラリと言うどころか、今の今まで伝えるのすら忘れていたというこの少年に、バーサーカーは不安と同時に奇妙な安心感も抱いていた。
『……まったく君は……。ただのバカかと思いきや、妙な所でドライだな』
「今までバカだって思ってたんですか？」
『怒ったかね？』
「いえ、逆になんか嬉うれしいですよ」

楽しげに笑い、フラットは第二の故郷とも言える時と計けい塔とうを思い返しながら言った。
「俺おれ、子供の頃ころから変に怖がられたり避けられたりしてばっかりで……。そうやって面と向かってバカとかアホとか怒ってくれるのって、教授とその妹のお姫さんと、同じ教室のみんなとＯＢの人達ぐらいでしたから……」
　しんみりと語るフラットに、バーサーカーは一いつ瞬しゆん同情しかけ、ふと考え直す。

『いや……それ……普通に結構多くないかね？』

×　　　　×

数分後　ロンドン　時計塔

　スノーフィールドが朝を迎えた一方、夜明けにはまだ遠いロンドン。
　魔ま術じゆつ協きよう会かいの中ちゆう枢すうたる時計塔の一室で、二人の幹部が『スノーフィールドでの聖せい杯はい戦せん争そう』問題についての顧こ問もんとして顔を付き合わせていた。

「やはりあいつは……馬ば鹿かで阿あ呆ほうだ……」
　頬ほおを引きつらせながら呻うめくロード・エルメロイII世に対し、同席していた老ろう齢れいの男──ロッコ・ヴェルフェバンが溜ため息いきを吐いた後に口を開いた。
「同情するよ、II世殿どの」
　二人が見ていたものは、スノーフィールド現地に潜入させている魔ま術じゆつ師しから送られてきた映像である。
　魔術通信に使う水鏡に映し出されたのは、スノーフィールドの地元ケーブルテレビのニュースの映像を録画したものだ。

──『え？　これ、テレビですか⁉　うわー、教授やライネスちゃん、見てるかなあ！』
　そんな事を言ってカメラに向かってはしゃいでいるフラットを見た瞬間、エルメロイII世は胃が下手へた糞くそなバイオリンを弾きながらダンスを踊っているかのような錯さっ覚かくを覚えた。
　眉み間けんの皺しわが深く刻まれたエルメロイを見て、ロッコが憐あわれみ混じりの言葉を贈る。
「押しつけたわしにも責任の一いっ端たんはあるわけじゃが、正直、まだあやつを抱え続けるお主には感服を通り越して呆あきれるぞ」
　老齢の魔術師は、ギイ、と椅い子すを軋きしませながら言葉を続けた。
「師し弟てい揃そろって、教授の目を盗んで聖杯戦争に参加とは……。無鉄砲さも教えのうちといった所じゃな」
「返す言葉もありません」
「しかしな、フラットは問題児じゃが、紛まぎれもない天才でもある。万が一、大だい聖せい杯はいのシステムを時と計けい塔とうに持ち帰る事ができるのなら、それに越した事はないのだがな。それこそ英えい霊れいそのものを時計塔に連れてこれるのならば、歴史を覆くつがえす研究対象になる」
　要するに、美味おいしい所だけをかすめ取れないかと言い出す老人に、エルメロイII世は軽く肩を竦すくめて言った。
「なるほど、召しよう喚かん科学部長にして降霊科のロードらしい御お言こと葉ばだ。まあ、ユリフィス降霊学部長ならば『研究対象』を通り越して『資産』と言い切るのでしょうがね」
「皮肉はよせ、代理のロードになんの意味もないのは、お主が一番知っておろうに」
「ええ、私も同じです。あくまで席を預かっているに過ぎません。うちの姫が成熟するのと、冬ふゆ木きをはじめとする特殊霊地に出向中の大名行列が戻るまで、どちらが先になることか」
「皮肉はよせというに」

ロッコは時計塔の中でもガチガチの保守派であり、本来ならばエルメロイII世のような『保守派にも革新派にもつかない仮かり初そめのロード』などは頭から見下しそうなものなのだが、現在はまるでほぼ対等であるかのように話している。
　それも一重に、彼の立場がエルメロイII世と少し似ているからだ。
　本来の降霊科のロード──学部長であるユリフィス家の当主と、それに次ぐ立場のブラム・ヌァザレ・ソフィアリが、とある特命のため時計塔を一時的に離れている。
　そして、彼らが長期の特命から戻るまでの間、ロッコがその代行としてロードの座につく形となっていたのだ。
　権力欲はあるものの、自分がロードの座に不相応である事も理解している為ため、会議ではだいぶ肩身が狭い思いをしている。バルトメロイをはじめとする他のロードに睨にらまれた時など、明確に寿命が縮ちぢむのを感じる程だ。
　その為、自分以上に肩身の狭い思いをしているであろうエルメロイII世には同情的になっている面があるらしい。
「しかし……フラット以上に問題なのは、その後に映った鎧よろいの男よ。あれが英霊だとするならば、合衆国側の連中には、聖せい杯はい戦せん争そうを完全に隠いん匿とくする能力は無いとみて良いだろうな」
「流石さすがにあれは想定外だとは思いますが……」
　テレビに自分から映る英霊など前代未聞、と言い切りたい所だったが、エルメロイII世の脳裏には、映るチャンスがあれば自分から真しん名めいまで名乗り上げていたかもしれない、とある豪ごう放ほう磊らい落らくな英霊の姿が思い浮かんでいた。
「……いや、まあ、何が起こるか解わからないのが聖杯戦争だからな」
　誤ご魔ま化かすように呟つぶやいた後、エルメロイII世は隠匿についての所見を述べ始める。
「聖堂教会や我々の手による秘ひ匿とくが通用するのはあと５年が限

界でしょう。その頃ころには、誰だれもが携帯電話からハイビジョン映像をリアルタイムでソーシャルネットワーク上に流す時代が来ます。そうなれば、情報の拡散力は秘匿の為ための圧力を上回る。新しい形の秘匿方法を模も索さくするか、あるいは一部を開放するかを考える分岐点が来ているんですよ」
「うむ……不勉強で申し訳ないが、ソーシャルネットワークというのは、なんの分野の魔ま術じゆつ用よう語ごかね？」
「……」
　目の前の老人が携帯電話どころか普通の電話回線を引く事すら嫌がるガチガチの保守系魔ま術じゆつ師しだという事を思い出し、どこから説明するかと迷うエルメロイII世。
　すると、そのタイミングで彼の懐ふところの携帯からメールの着信音が鳴なり響ひびいた。
「失礼」
　確認すると、知らないアドレスではあったが──『絶対領域マジシャン先生へ！』というメールタイトルだけで、エルメロイII世はすべてを理解する。
　心中で『ファック』と叫びながら、必死で平静さを保つエルメロイII世。
「馬ば鹿かで阿あ呆ほうな弟子でしから、やっと連絡が来たようです」
「ほう、それは僥ぎよう倖こうじゃな」
　そして、メールの内容を確認するエルメロイII世だったが──

『ハーイ教授！　俺おれも今日から携帯メールデビューです！　教授のおかげで、最高の英えい霊れいを召しよう喚かんできました！　見て下さい、このバーサーカーさんを！』

　そんな内容のメールに、スチームパンク風の腕時計の写真が一枚添付されていた。

「何を言ってるのか……サッパリわからん……」
　もしや弟子の方が狂化のスキルを得てしまったのではないかと思いつつ、フラットはもとから持っていたかもしれんと考え平静を保つII世。
　それから更さらに数秒後、フラットから別のメールが送られてきた。

『街まちで第一英霊発見です！　あ、バーサーカーさんと鎧よろいの人を入れれば第三英霊かな？　怖そうだったんで流石さすがに声は掛けられませんでしたけど、どうすれば仲良くなれますかね？』

「まったく、あの馬鹿は……」
　自みずからの胃がデスメタルに合わせてヘッドバンギングを始める錯さつ覚かくを覚えつつ、そこに添付されていた写真を開く。
　そして、写真に写っていた、キャディラックの後ろに乗る派手な服の男を見て──
　彼の胃の慟どう哭こくが、唐突に停止した。
　胃だけではない、呼吸も、瞬まばたきも、もしかしたら心しん臓ぞうも数秒止まっていたかもしれない。
「馬ば鹿かな……」
「どうした、II世殿どの」
　心配するロッコの言葉を聞きながら、エルメロイII世の中でピースが繫つながる。
　砂漠にクレーターが生み出されたという情報。
　そして、服装や髪かみ型がたこそ自分の知るものと違うが、見間違えよう筈はずもない。それはかつて、冬ふゆ木きの土地で見た途と轍てつも無く強力なサーヴァントの姿。
　あの英えい霊れいが絡からんでいるのならば、クレーターのひとつも生まれようというものだ。

青ざめたII世の顔を見て、また心労で倒れるのではないかと不安げに見つめるロッコだったが──不意に時が動きだし、エルメロイII世は、逆に気力を漲みなぎらせながら立ち上がった。
「……失礼、少しメールをしても宜よろしいか」
「む……ああ」
　真剣な表情のエルメロイII世を見て、『メール？　ここで手紙を書くのか？　ペンはどこだ？』などと訝いぶかしみながらも、気け圧おされるように頷うなずくロッコ。どうやら彼は、先刻の着信も魔ま術じゆつ的てきな念話か何かでやり取りしていたと思っているらしい。
　そんな老ろう齢れいの魔ま術じゆつ師しを背に、エルメロイII世は物凄いスピードで携帯メールに文章を打ち込んでいく。

『教授として課題を出す。その英霊には、何があってもお前は決して近づくな』

　そして、少し考えた後にひとつの追伸を付け加えた。

『さっさとその携帯電話の番号をメールしろ。この×××××が』

×　　　　　　　　×

同時刻　スノーフィールド『クリスタル・ヒル』最上階　ロイヤルスイート

　自分の写真が元で一人の魔術師が心臓を数秒止めた事など知りもせず、ギルガメッシュは全面ガラス張りの最上級ルームから、眼下の街まちを見下ろしていた。
「ハハハ！　やはり街がい路ろや楼ろう閣かくの並びだけを見比べても、ウルクの街の方が美しいな！」
　かつて自分の統治していた都市と比べながら、上じよう機き嫌げん

で笑うギルガメッシュ。
　彼はキャディラックで一度ティーネ達の工こう房ぼうに戻ると、必要最低限のものだけを持たせて、ティーネをこのカジノホテルの最上階に連れてきたのである。
　資金は当然昨夜のカジノの収益であり、ホテル側からすれば『うちで勝った大金をうちで使ってくれる最上の客』として扱われていた。
　ティーネの他に、彼女の部下である黒服達も数名護ご衛えいとして泊めている。
　一人の目立つ男と、それに恭うやうやしく付き従う面々。
　ホテルの従業員からすれば、『どこかから来た大だい富ふ豪ごうとその従者』として見られている事だろう。ティーネは年ねん齢れい的てきに従者の娘か、富豪の養子か何かだと思われている可能性もある。
　ティーネにはギルガメッシュの意図が分からなかったが、王であるが故ゆえに街まちで最もつとも豪ごう奢しやな部屋を拠点としたかったのかもしれない。
　しかし、彼女にとってはこのような目立つ場所に移るのは不安でしかなかった。
　敵対する『街』を造り上げた魔ま術じゆつ師し達には監視されているだろうし、ここは工房ですらない為ため、襲しゆう撃げきに対する準備を整えるのも一苦労である。
　また、ここを工房化したとしても、それで不安が解消されるわけではない。
「かつての聖せい杯はい戦せん争そうでは、ホテルそのものを倒とう壊かいさせる事で工房を潰つぶした例もあると聞きます。敵の組そ織しきは強大ゆえ、この『クリスタル・ヒル』ごと破壊するかもしれません」
　そう進言した所、ギルガメッシュはあっさりと答えた。
「そんなもの、好きにさせればよかろう。本来ならばその程度の些さ事じは自分で乗り越えよと言う所だが、ここに呼びつけたのは我オレ

だからな。落らつ下か傘さんぐらいは貸してやろう」
　本気とも冗談ともつかぬ言葉を吐き出し、優ゆう雅がに立ち振る舞いながら街を見下ろし続けるギルガメッシュ。
　彼はそのまま部屋の西側に移動し、景色の果てに見える大森林を見つめて呟つぶやいた。
「ふふ、我が友も随分と浮かれているようだ。ああも広い森をすべて踊らせるとは」
　その言葉を聞き、ティーネも森の方を見る。
　土地守の一族として、何が起こっているのかはすぐに解わかった。
　森全体が変動し、ひとつの生き物であるかのようにざわめいている。
「友、ですか」
「ああ、奴やつの事は興が乗ればいずれ話してやろう。だが、なかなかに充実した再会の宴うたげだった。邪じや魔まさえ入らねば、三日三晩は続けたものを」
　──あの凄すさまじい戦いを……三日三晩……。
　気の遠くなるような事を言うギルガメッシュに、背に緊きん張ちようの汗を滲にじませるティーネ。
　冗談などではなく、この英えい雄ゆう王おうがやるといえば、本当に三日三晩戦う事ができるのだろう。
　もしそれができぬ理由があるならば、それはマスターである自分のせいだ。
　先祖代々の力を受け継ぐ魔術師として、力はあるつもりだった。
　しかし、この強力な英えい霊れい達の前で自分には何ができるのだろうか？
　そう迷い続けるティーネだったが、それでも彼女は、持てるものはすべて使う事にした。
「……現在、私達の仲間が他の魔ま術じゆつ師し達の動向を追っています。街まちのシステムを構築した一人と思おぼしき繰くる丘おかの当主は、現在は聖せい杯はい戦せん争そうとは無む縁えんのように振

る舞っていますが……」
「それを我オレに報告してどうする。マスターとして如何いかに動くかはお前が決めよ」
「……はい」
　シュンとするティーネにチラリと視線を向け、底意地の悪い笑みを浮かべて問い掛けた。
「なあ、ティーネよ。お前はこの土地を取り戻したいのだろう？」
「……！　もちろんです！」
「ならば、その雑種の魔術師どもを、この凡ぼん庸ような景色ごと更さら地ちにしてしまうのが最もつとも早いと思わないか？」
「え……」
　単なる冗談とは思えなかった。
　英えい雄ゆう王おうギルガメッシュは、今言ったことを簡かん単たんに実行できる。
　それほどの力があると、一日前の砂漠の戦いで知ってしまっているからだ。
「お戯たわむれを……」
「戯れ？　お前の『先祖の悲願』にとって最も近しい答えではないのか？　我オレを最初に呼び出した道化の命と、この街にただ蠢うごめくだけの雑種どもにどのような差がある？　その令れい呪じゆとやらを用いて我オレに『街を消せ』と命じるのがもっとも手っ取り早いのではないか？　お前の仲間達が避難する程度ならば待ってやっても良いぞ？」
「……」
　暫しばらく考えた後、ティーネはおずおずと答えを口にした。
「そんな暴ぼう虐ぎやくを行えば……この土地を奪った魔術師達と同じになります」
「足りぬな。それは自おのずから考えた答えではなく、見つけた答えだろう」
「……！」

簡単に見透かされた事に、ティーネは深く恥じ入った。
　自分でも、その答えは違うと解っていた。
　──私は、魔術師達よりも強欲になり、土地を奪い返すと誓った筈はずだ。
　──それなのに、何故なぜ私は躊躇ためらうんだろう。この街そのものを滅ぼす事を。
　──何故。──何故。何故。
　自分の心すら解らず、ティーネはショックを受けて俯いた。
　王の問いに答えられない。これでは自分は、処断されても仕方が無い。
　捨てた筈の少女の心に、恐怖の感情が満ち始める。
　死はもとより覚悟の上だ。しかし今は、この英霊を失望させる事の方が恐ろしい。
　ティーネの様子を見たギルガメッシュは、彼女の心を見透かし、笑いながら言葉を続けた。
「疑問が生まれたか、ならば良しとしよう」
「え……？」
「それこそが、盲信を打ち破る礎いしずえよ。……なに、お前があまりにも不景気な顔をしているのでな、少しからかっただけだ。流すがよい」
　あきらかに『からかう』という類たぐいの内容ではなかったのだが、ティーネはとりあえず安あん堵どした。ただし、先刻の自分自身への疑問は消えぬまま、ティーネの心にへばりついた。

　ギルガメッシュは再び街まちを見下ろしながら、退屈そうに言葉を漏もらす。
「しかし……お前の願いは別としても、人ごみを見ていると、つい消し飛ばしたくなるとは思わないか？」
「……？」
「まったく……昨日きのう手ずから街を巡ったが、この時代の雑種ど

もは価値の無い者が多い。雑種が我オレの庭で繁はん栄えいするのは好ましいが、ただ数のみで蔓まん延えんする様は醜しゅう悪あくよな」
「なにを……なさるおつもりですか？」
　ティーネは、英えい雄ゆう王おうが突然市民達を視界から『排除』するのではないかと緊きん張ちようしたが、そんな彼女の疑念に答えるかのように、ギルガメッシュは肩を竦すくめた。
「案ずるな。塵ちり芥あくたの掃除など我オレがわざわざやる事ではない」
　肩を竦めながら街を見下ろし、退屈そうに語るギルガメッシュ。
「受肉でもして本格的に生を謳おう歌かするのでもあれば話は別だがな。その時には生きるに値あたいせん雑種どもを間引く事も考えようが、今の我オレには関係の無い話だ。雑種どもが緩ゆるやかな滅びを選ぶなら、その愚おろかな末路を観かん測そくし一笑に付すまでだ」
　そして、遠い過去を懐かしみながら、半分独り言のように言葉を続けた。
「我オレの庭で暴れる魔ま物ものによって滅びるというのならば捨て置けんが、雑種どもが自おのずから選んだ道ならば何も言わん。選せん択たく肢しが残っている事に気付いていないというのなら、道標として艱かん難なん辛しん苦くぐらいは与えてやるかもしれんがな」
　そんな言葉を聞き、ティーネは安堵と畏い怖ふを同時に覚える。
　この英雄王は、まさしく地球すべてを庭とする王なのだろうと。
　確固たる『己おのれ』を持ち合わせ、人類に対しあらゆる裁定を下す王の中の王。
　天罰とは違う何かを感じる。
　その『何か』を見み極きわめようとティーネはじっとギルガメッシュを見つめ続けた。
「どうした？　やっとこの世で最高の娯楽が我オレの栄光を見る事だと気付いたか？　良かろう、許す。存分に我オレを睨ねめ回まわし、星が滅びし瞬しゅん間かんまで子々孫々に語り継ぐがいい」

今度こそ冗談だと思ったが、どうも本気のような気がしてならない。
―良く解わからないけど、本当に凄すごい人なんだ……。
大人おとなびているとはいえ、根本がまだ幼いティーネは、ギルガメッシュの奇異な言動や人の常じよう識しきで量れば度を超こしている一面も『王とはそういうもの』として受け取るようだ。
ある意味相性が良いとも言えるのだが、当の英えい雄ゆう王おうはどこ吹く風で、再び好き勝手な事を口にする。
「さて、今日きようやるべきは……まずは羽虫どもの掃除だな」
「羽虫、ですか？」
「ああ、我オレと友の再会の喜びを邪じや魔ました無ぶ粋すいな輩やからがいるらしくてな。昨日きのうの昼は一日街まちを回ってその不ふ埒らち者ものを探したが見つからなかった。なれば、向こうから現れるのを座して待つのみよ」
「待つ……。ここで、ですか？」
首を傾かしげるティーネに、英雄王は自信に満ちた声で答えた。
「無論だ。これだけ目立つ場所に聖せい杯はい戦せん争そう最大の難敵の一人が陣取っているのだ。気付かぬとは言わせん。まあ、もう一人の難敵である我が友も森で派手に騒さわいでいるが……どちらに引かれようが、羽虫は減るというものだ」
如何いかなる根拠があるのか、とにかく自信満々に告げるギルガメッシュ。

「虫は眩まばゆい光に抗あらがえぬものよ。誘い込んだ所で跡形もなく燃やし尽くしてくれよう」

そして、次の瞬しゆん間かん―
スノーフィールドの街の中を、鋭い風が吹き抜けた。

×　×

警けい察さつ署しょ　署長室

「やっほー、元気してるー？　新米君☆」
　キャピキャピとした声をあげるフランチェスカに、署長が吐き捨てるように答える。
「帰れ、老害が」
「あれれれ？　陰口でそう言ってるのには気付いてたけど、流石さすがに面と向かって言われると傷ついちゃうよ？　私は精神的な傷より肉体の傷の方が嬉うれしいんだから、配慮して欲しいなあ」
「黙れ」
　署長はゴスロリ少女に対し露ろ骨こつな敵意を向けるが、彼女が帰る様子は欠片かけらも無かった。
「はいはい、黙りますよーっと。でもひとつだけ言わせて？　老害老害って言うけど、この身体からだはまだ使い始めて３年しか経ってないんだからね？　内ない臓ぞうだってすっごく綺き麗れいだよ？　見てみる？」
　そう言いながら、フランチェスカがぺろりと自分の服の一部を捲まくり上あげ、臍へそのあたりを露ろ出しゅつさせる。
　するとそこには、異様なものがあった。
　一見すると綺麗な腹部なのだが、本来ある筈はずの無いものがある。
　肉に直接取り付けられた、幅の広いファスナーだ。
　人の歯のような材質でできたそのファスナーは、左右の肋あばらのあたりから伸びて臍の下で繋つながっており、もしも開けば何が見えるのか、あまり想像したくない状態である。
「見る？　見たい？　見たいよね？　女の子の、ナ・イ・シ・ョ・の・ナ・イ・ゾ・ウ☆」
　クスクスと蠱こ惑わく的てきに笑いながら言うフランチェスカだが、署長は眉まゆひとつ動かさなかった。

「何の用だ。いいようにあしらわれた我々を笑いに来たのか？」
「まさか！　お見舞いだよう！　災難だったよねえ。まさか死し徒とがマスターだなんて、私も全然予想できなかったよ！　早く排除しなくちゃね！」
「嘘うそをつけ、内心では面白くなってきたと喜んでいるのが丸わかりだ」
「あ、やっぱり？　でもね、私は死徒は嫌いだよ？　あいつら、人類の敵だからね。私は人類の味方だから、あいつらなんかに渡さないよ？」
　自信満々に胸を張るフランチェスカに、署長が再び吐き捨てる。
「餌えさの取り合いをしているだけだろう」
「あれれれ？　不ふ機き嫌げん？　そんなにショックだった？　あのイケメンの神父さんに美味おいしい所を持って行かれちゃったのが」
「そんな事より、聖堂教会の扱いはどうする」
「とりあえず無視でいいよ。駆け込みたいマスターがいれば勝手に駆け込むだろうしさ」
　傘をクルクルと回した後、フランチェスカは不意に、プウ、と頬ほおを膨ふくらませた。
「どっちにしろ、私にだって、夕べの件は面白くない所もあるんだよ？」
「何がだ」
「だって、最後に目立ってたの、代だい行こう者しやと死徒だったじゃない！　ダメダメ、ダメだよう！　序じよ盤ばんからあんな部外者に大きな顔させちゃー！」
　拳こぶしと傘をブンブンと振り回しながら言うフランチェスカ。
　彼女は不意に動きをとめ、両腕を大きく広げながらどこかの誰だれかに対して断言する。
「聖せい杯はい戦せん争そうの華はなは、やっぱり英霊サーヴァントと魔術師マスターなんだからね！」
「……」

「……そう思わない？」
　彼女が署長の方を向いて、ニヤリと笑った瞬しゅん間かん──

　爆ばく音おんが周囲を包み込み、署長室の窓まど硝子ガラスがすべて砕くだけ散ちった。
「!?」
　署長室だけではない。警けい察さつ署しよの北側の窓のすべてが、轟音と風に押し負け割れ踊る。
「アハハハハハ！　さあ、始まり始まり！　パンフレット買った？　ポップコーン持った？　ああ、警察署長ならやっぱりドーナツ？　早くしないと世紀の一戦を見逃しちゃうよぉ？」
「貴様……ッ！」
　フランチェスカを睨にらみ付つける署長は、この時点ではまだ知らなかった。
　ガラスが割れたのは、警察署だけではなく────

×　×

数十秒前　スノーフィールド北部　大だい渓けい谷こく

　ギルガメッシュが召しよう喚かんされた洞どう窟くつよりも、更さらに北に数キロ進んだ所にある赤土の渓谷。
『クリスタル・ヒル』の最上階とほぼ同程度の標高になる高台に、その男は立っていた。
　身長２メートルを超こえようかという、ガリガリに痩やせた細身の男。
　その手には、一振りの弓が握られていた。
　通常の木弓よりも大きいが、長身の男の手中にある為ために少し小振りにすら感じられる。
　男の服装は、奇妙を通り越して『異様』と形容すべきものだった。

まず目を引くのは、身体からだに縦に覆おおい被かぶさる柄付きの長布だ。
肩にかけている、などというものではない。
布の中心を頭頂部に置き、そのまま顔面と後頭部を完全に覆い尽くした後、身体の前面と背面を隠す形で垂れ下がっている。
顔のパーツで布の隙すき間まから見えるのはせいぜい耳回りぐらいであり、本人に前が見えているのかどうかすら解わからなかった。
布の下に腰布や下した穿ばき、靴くつなどは身につけているが、上半身に布以外何も纏まとっていないようで、濃い色の染料が露ろ出しゅつした肌全体を染め上げている。
更に白い染料で身体に何か紋もん様ようのようなものが刻まれているが、先述の布地に隠れて全体像を伺うかがい知しる事はできなかった。
一見すると何かのホラーゲームにでも出て来て主人公を追い回しそうな格かつ好こうをした男が、顔を覆う布地の下でニイ、と笑い、無言のまま軽く弓を引き絞る。

そして、弓の弦つるから指が離れ、一本の矢が撃うち放はなたれた。

風の速さを遙はるかに超こえ、音の速さすらも凌りよう駕がして。

×　×

スノーフィールド上空

斬ざん撃げきの如ごとき風が、スノーフィールドの街まちを一直線に駆け抜ける。
空気を切り裂き、衝しよう撃げき波はを放ち、周囲に轟ごう音おんを響ひびかせた時には既すでに風は吹き抜けた後だ。

風の中心にあるものは、一本の矢。
向かう場所は、スノーフィールドの中心に建つ高層ビル『クリスタル・ヒル』最上階だ。
謎なぞの男によって撃うち放はなたれた矢は、渓けい谷こくの高台から一いつ瞬しゆんたりとも減速せず、高度も落とさず物理法則に逆らいながらレーザー光線のように突き進む。
矢の移動距離は既に20キロに達しており、それだけで、弓使いの男が人間や並の魔ま術じゆつ師しではないという事を証明していた。
衝撃波が街の空を駆け抜け、射線の下にあった建造物のガラスが音と衝撃によって次々と砕くだけ散ちっていく。
こんなものが直撃すれば、人間、いや、英えい霊れいとて無事ですまないだろう。
脳天に突き刺さる間もなく、上半身そのものが粉みじんに砕けちらんという一撃だ。
矢はまっすぐにターゲットに向かって進んでいく。

クリスタル・ヒルの最上階に陣取る英えい雄ゆう王おう、ギルガメッシュ――

その横に立っていた、マスターである少女の頭部へと。

×　　　　　　　　　　×

『クリスタル・ヒル』　ロイヤルスイート

ギルガメッシュの方を向いていたティーネが、ふと、北側の窓に目を向ける。
「え……？」
音はまだ届かない。
ただ、空に満ちる魔力の奇妙な乱れを感じとり、なんとなくそちら

を向いただけだったのだが──
　風が切り裂かれているのを感じ取った時には、既すでに遅かった。
　少女の反応速度では間に合わぬ距離に、小さな点として『死』が迫りつつあった。
　もはやどう動こうが、迫り来る音速超ごえの矢を避ける術すべなどなかった。
　少なくとも、彼女には。

「……」
　刹那せつな、矢がホテルまで20メートルまで迫った所で、ガラスの外に雷鳴が響ひびき渡わたった。
　眩まばゆい閃せん光こうが煌きらめき、小さな雷が無数に空を走る。
　そのうちの一本が矢に直ちょく撃げきしたようで、必殺となるはずだった一撃を直前で宙に四散させた。
　だが、衝しよう撃げき波はでガラスは砕くだけちり、室内にいた面々に襲おそいかかる。

「【　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　】」

　無言の詠えい唱しよう。
　ティーネの手より巻き起こった風が、防ぼう護ご壁へきとなって己おのれやギルガメッシュ、黒服達に降り注ごうとしていたガラス片を弾はじき飛とばした。
「御ご無ぶ事じですか」
　呼吸を整えた後、ギルガメッシュに声を掛ける。
　すると、英えい雄ゆう王おうは無傷のまま不ふ機き嫌げんそうに答えた。
「問題はない」
「今の雷は一体……」

「雷撃そのものは我オレの宝ほう具ぐよ。どうやら、何かを迎撃したようだ」
　こともなげに言うギルガメッシュに、ティーネが思わず呟つぶやく。
「迎撃？」
　ティーネが窓の外を見ると、ビルの上部には、複数の円えん盤ばんが浮遊していた。
　美しい円形に幾き何か学がく模も様ようの装飾が施されたその宝具は、小さな雷を纏まといながら周囲を警けい戒かいするように周回を続けている。
「自動防御宝具オートデイフエンサーだ。我が友が戯たわむれに奇き襲しゆうを仕掛けてくる可能性があったからな。念を入れて仕掛けておいたのだが……」
　ギルガメッシュはそのまま北に目を向け、『宝物庫』からひとつの宝具を摑つかみ取とる。
　取り出されたのは、やはり宙に浮かぶ、奇妙に歪ゆがんだレンズを嵌はめた金色の輪だ。
　それはレンズ単体であるにもかかわらず、望遠鏡のように遙はるか遠方の光景を映し出している。
「まさか、弓兵アーチヤー風情の矢を弾く事になるとはな」
　輪の中に現れたのは、こちらに向かって不敵に弓を構える男。
「弓兵アーチヤー……？」
　ティーネの脳裏に疑問が過ぎる。
　アーチャーはここにいるギルガメッシュに他ならない。
　ならば、弓を武器とするライダーやアサシン、バーサーカー等のクラスだろうか。
　金色の輪越しにその弓兵アーチヤーを見た彼女は、そのまず、そのステータスの高さに驚おどろいた。
　単純にステータスの合計値だけを見るならば、ギルガメッシュをも上回っていると言えるだろう。

──やはり、バーサーカー……？
警けい戒かいするティーネの前で、ギルガメッシュが無表情のまま呟つぶやきを漏もらす。
「……来るか」
だが、『二射目』は既すでに放たれた後だった。
自動防御宝具オートデイフエンサーの雷らい撃げきが発動し、飛来した矢を迎撃せんとするが──数本の雷は当たったものの、雷撃の合間を擦すり抜ぬけてギルガメッシュの元へと飛来する。
電気が空気中を伝わる速度──即すなわち雷の速さは、光よりは遅いものの、それでも通常の弓矢を捉とらえるには十分な速度の筈はずだった。
しかし、その矢の速度は、人類の限界を超こえていた。
ギルガメッシュは即座に鎧よろいを顕けん現げんさせ、その矢を左腕の手甲で打ち払う。
しかし、威力を殺しきれなかったのか、鎧の一部が砕くだけ、黄金の欠片かけらが床に零こぼれ落おちた。
「……ほう」
冷めた表情で自みずからの鎧の欠けを見たギルガメッシュは、僅わずかに目を細めた後──
「大した弓の腕前だが……。礼儀を弁わきまえぬ蛮ばん人じんめ、倉の宝物の錆さび落おとしとしてくれよう！」
次の瞬しゆん間かん──
割れた硝子ガラスの外、最上階に横付けする形で、ひとつの巨大な宝ほう具ぐが現れた。
「これは……」
「ティーネよ、お前は後ろに乗れ」
「宜よろしいのですか？」
「お前をここに残しては、あの忌いま々いましい矢からは護まもりきれん。友との約やく定じようを果たすまで、マスターであるお前に死なれては困るのでな」

淡々と告げた『王』の言葉に、ティーネは力強く頷うなずき、巨大な宝具の後部へと乗り込んだ。

その宝具は──金色のヨットに巨大な妖よう精せいの羽を生やしたかのようなフォルムをしていた。
宝具『ヴィマーナ』。
ギルガメッシュの所有する宝具のひとつである、小型の空くう中ちゆう戦せん艦かんである。
ありとあらゆる宝物が含まれているといわれる王の財宝、その中には武具のみならず、人が生み出すありとあらゆる叡えい智ちの結けつ晶しようが含まれていた。
ティーネがヴィマーナの後部で四よつん這ばいになった所で、ギルガメッシュはその金色の機体を発進させた。
急加速にティーネは思わず吹き飛ばされそうになるが、風よけや重じゆう力りよく操そう作さの魔ま術じゆつを駆く使しして、なんとかバランスと呼吸を整える。
ギルガメッシュはその船首に仁王立ちとなりながら、一直線に弓兵アーチヤーへと向かって船せん艦かんを走らせた。
時折弓兵アーチヤーが放ったと思おぼしき矢が飛来するが、周囲に展開した数十種類の迎げい撃げきシステムが迫り来る矢を完かん璧ぺきに撃うち落おとしていく。
「すごい……」
自分が何に乗っているのかを改めて確認し、少女は思わず声を上げた。
「こんなものまで……」
感情を捨てた筈はずの少女が発した声に籠こめられていた感情は、畏い怖ふか、それとも憧どう憬けいか。

×　　　　　　　　×

スノーフィールド北部　渓けい谷こくの高台

「……ほう」
　弓兵アーチヤーは、自みずからの眼前まで辿たどり着ついた金色の船を見て、静かに呟つぶやく。
　低い声だ。
　その裏側には、素直な感嘆の色と、僅わずかな自じ嘲ちようの色が含まれている。
「奇き襲しゆうを仕掛けたのは貴様だ。よもや命乞いはすまいな？」
　船首から高台に降りたギルガメッシュの言葉に、10メートル程先に立つ不気味な弓兵アーチヤーがゆっくりと顔を上げた。
「……」
「言いい遺のこす言葉はあるか？」
　ギルガメッシュが尋たずねるが、謎なぞの弓兵アーチヤーは何も応えようとしない。
　無言のまま、静かに弓を引き絞り──
　ヴィマーナの後部座席から顔を覗のぞかせたティーネに対し、迷う事無く矢を撃ち放った。
「！」
　音速超ごえの矢が、ティーネの顔面に迫る。
　衝しよう撃げき波はは強力な風の障しよう壁へきで軽減できるが、矢そのものは防ぎきれないだろう。
　ティーネは再び眼前に迫る死を認にん識しきしたのだが──
　ヴィマーナのオプションである迎げい撃げき宝ほう具ぐが、それを寸前で撃うち落おとした。
「たわけが、我オレが降りれば発動しなくなるとでも思ったか？」
「……」
　ギルガメッシュの言葉を無視し、弓兵アーチヤーは二発、三発と立て続けに矢を撃ち放つ。
　既すでにティーネは船の内側に身を隠しているが、ヴィマーナの装

甲ごと貫かんという勢いで弓を引き続ける。
　ピキリ、と、ギルの側頭部から音がする。
　見る者が見れば分かっただろう。
　それは本気でティーネを船ごと射貫こうとしたわけではなく──純粋に、ギルガメッシュという英雄を挑発しようとしているのだと。
　ギルガメッシュはその挑発に気付いていないのか、あるいは気付いた上でなお、自分を無視してマスターである少女を狙ねらい続つづける事に苛いら立だったのか、淡々とした口調の中に怒りの色を籠こめて語り続ける。
「なるほど、確かに勝利に執着するならば、あるいは楽に勝つ道を選ぶならば正しい選択だ。我オレも状況によっては戯たわむれに同じ事をするかもしれん」
　そして、次の瞬しゆん間かん──
「だがな、それは我オレだからこそ許される事よ！　貴様如ごときに許される所業ではないわ！」
　理不尽極きわまりない事を叫びつつ、ギルガメッシュは背後に開いた『王の財宝ゲートオブバビロン』の門より、無数の宝具を射出する。
　高ランクの宝具も入り交じった刃の雨に、弓兵アーチヤーはひとたまりもないと思われた。
　だが、彼は手にした弓を左手で振り回し、英えい霊れいとしての常じよう識しきすら超こえた速度で射出された宝具を打ち払っていくではないか。
「なに？」
「……」
　数十本の宝具を無傷で打ち払った英霊は、無言のままギルガメッシュに手を翳かざし──手の平を上にして、クイ、クイ、と挑発するように手招きをする。
　それを見たギルガメッシュは、目を細め、激げき情じようを押し殺した声を高台の上に響ひびかせた。

「……なるほど、なかなか手て癖くせの悪い奴やつだ。ならば……これならどうだ？」
　底意地の悪い笑みを浮かべ、ギルガメッシュが『王の財宝ゲートオブバビロン』を高台に広く展開させる。
　弓兵アーチャーを取り囲む形で四方に展開された宝物庫への入口が、まるで竜たつ巻まきのようにうねり始めた。
　そして、無数の宝具が機銃の如き勢いで射出され、まさしく光と衝しよう撃げきの竜巻を高台の上に高々と造り上げる。
　数十、数百、数千という数の宝具が、竜巻の中心に立つ男へと降り注いだ。
　あるいはそれは刃であり、
　あるいはそれは叡えい智ちであり、
　あるいはそれは痛みであり、
　あるいはそれは救いである。
　龍りゆう殺しの長刀があった。
　破滅を与える魔ま剣けんがあった。
　英雄殺しの槍があった。
　形を持たぬ雷いかずちがあった。
　人類が手にし、あるいは生み出してきた、ありとあらゆる宝ほう具ぐ。
　その原典が、惜しげも無く投げ放たれる。
　上下左右、三六○度から射出される、人が紡つむぎし地じ獄ごくの雨。
　ティーネはその凄すさまじい光景を見て、恐らくあの弓兵アーチャーは肉片のひとつも残らぬであろうと想像した。
　だが、竜たつ巻まきが収まると、ギルガメッシュとティーネの予想を裏切る光景が現れる。
　それは、無傷のまま身体からだを覆おおう長布の埃ほこりを払う弓兵アーチャーと──その周囲に積み上げられた、無数の宝具の山だった。

「そんな……」
　目を丸くするティーネに対し、ギルガメッシュは無言のまま相手を見つめている。
　暫しばしの間、沈黙が高台を支配したが──
　その静寂は、弓兵アーチヤーの含み笑いによって砕くだかれた。
「く……くく……く……くふッ……くは……くはは……」
　布の奥から聞こえて来る、明らかな嘲あざけりが含まれた声。
「……何がおかしい」
　無表情で問うギルガメッシュに対し、弓兵アーチヤーはハッキリとその単語を口にした。

「───弱い」

　かつてギルガメッシュと対たい峙じした者達が聞いたならば、相手の正気を疑うであろう一言。
「……」
　ティーネは、周囲の温度が急速に冷え込んだかのような錯さつ覚かくを覚えた。
「ただ闇やみ雲くもに武具を投げつけるだけか……砂でもかけた方がマシというもの……」
　そんな空気の中、謎なぞの弓兵アーチヤーは更さらに続ける。
「斯か様ような児じ戯ぎで仕留められるのは、余程の弱者か……理性を持たぬ獣けもののみよ」
　か細い声だが、それは単なる嘲りではなく、なんらかの執着、執念の籠こもった力ある言葉のようにも感じられる。
「……ほう？」
　そこで、ギルガメッシュの表情が変わる。
　ティーネはギルガメッシュが激げき怒どするかもしれないと不安に思っていたのだが──むしろその逆で、彼の口元には僅わずかな笑みすら浮かんでいるではないか。

この瞬しゅん間かん、ギルガメッシュを支配する感情は、『無礼な襲しゅう撃げき者しゃへの怒り』から『強者に対する好奇心』へと切り替わったのだ。
そんな英えい雄ゆう王おうに対し、謎なぞの弓兵アーチヤーが告げる。
「……物置の最奥にある剣を抜くがいい。それで対等だ」
誰だれかから情報を手にしていたのか、あるいは先刻の攻撃で『宝物庫』の中に満ちる格別の気配を感じ取ったのか、『最強の武器で来い』と告げる弓兵アーチヤー。
ギリ、と歯を軋きしませながら笑い、ギルガメッシュが楽しげに挑発を返す。
「エアは我オレの分わかれ身みも同然よ。貴様のような弱者に使う剣ではない」
そして、乖かい離り剣けんエアの代わりに、一振りの剣がギルガメッシュの手の内に現れた。
原罪メロダツク。
世界各地に伝わる選定の剣の原典と言われる剣だ。
彼はその剣で正しく相手を選定しようとしているのだろう。
自みずからの象徴でもあるエアを抜くに値あたいする相手であるかどうかを。
「証明してみせよ。貴様が、エアを拝はい謁えつするに値あたいする強者であると」
「……愚おろかな……抜けば死なずに済んだものを」
弓兵アーチヤーはぼそりと呟つぶやいた後、弓を持たぬ右手を身体からだの横に差し伸ばした。
すると、そこに新たな『布地』が顕けん現げんする。
それは一見すると地味な紋もん様ようが描かれた帯のように見えたが、別の観かん点てんから見る事ができる者達ならば、それがどれだけ異常な物かはすぐに理解できた。
「あれは……間違い無く宝ほう具ぐです……！」

ティーネの目から見ても、その帯の纏まとう魔ま力りよくは異常に思えた。
まるで神そのものが使用していたかのような濃密な神気を纏うその布を見て、ギルガメッシュは僅わずかに目を細める。
「我オレの知る神とは異質の気配だな。だが、根本は同じか……」
神嫌いを自称するギルガメッシュにとって、それは些いささか面白くない宝具に思えた。
だが、この弓兵アーチヤーがこの期ごに及んで如何いかなる変化を見せるのかは気になった。
不意打ちをしようにも『王の財宝ゲートオブバビロン』が通じぬ以上はどうしようもない。
ギルガメッシュは期待半分と言った目で、仁に王おう立だちしながら相手の行動を待った。

「……」

弓兵アーチヤーが布の奥で笑い、その宝具の力を解放せんと構え──
数秒後、神気に満ちた一いち撃げきが大地を大きく震わせた。

× ×

大森林

「ギル……なんだか強そうな人と戦ってるね……？」
エルキドゥはふと作業を止め、森の北東に視線を向けた。
そこには森が広がっているだけなのだが、エルキドゥには別の情報が見えていた。
気配感知のスキルにより、遠く離れたギルの強い気配と、それと相対している同じぐらい強い気配を感じとる事ができる。
「おかしいな。もう聖せい杯はい戦せん争そうで喚よばれる英えい霊

れいの数を超こえてる気がするよ？」
　疑問には思ったが、まあそういう事もあるのだろうと作業を続けるエルキドゥ。
　ギルガメッシュの気配を気にしつつ、彼の気配が弱まればすぐに様子を見に行けるように心の準備を整えながら。
「あれ？」
　そして、数分と経たずに異常を感知する結果となった。
　友人が何者かと戦っている場所のすぐ傍そばに、まったく別の気配が唐突に現れたのだから。

「一人……また強い気配が増えたね」

×　　　　　　　　　　　　×

高台

　神気に満ちたーいち撃げきが、大地を大きく震わせる。
　ただしそれは、謎の弓兵が放った一撃ではなかった。

「……え？」
　ヴィマーナの後部座席から顔を覗のぞかせていたティーネは、その光景が信じられなかった。
　弓兵アーチヤーが宝ほう具ぐらしき布地の力を発現させようとしたその瞬しゆん間かん、どこからともなく馬が現れ、その馬に乗っていた一人の少女が弓兵アーチヤーの後ろに下り立ったのである。
　年とし頃ごろは、16歳さいから18歳前後と言った所だろうか。少なくとも20歳を過ぎているようには見えない。
　長い髪かみが後頭部で綺き麗れいに纏まとめられており、快活的な肌色の身体からだを、柔らかい布地と革が合わさった独特な衣装に包み込んでいた。

全体的に活発な印象を周囲に与えるその少女は、凛りんとした顔つきで音も無く弓兵の背後に歩み寄る。
「……？」
　眉まゆを顰ひそめたギルガメシュの視線に気付き、弓兵アーチャーが後ろを振り返ろうとし──
　布に覆おおわれた顔面のあたりに、少女の拳こぶしが深々と突き刺さった。

　爆ばく発はつとしか思えぬ衝しゆう撃げき音おんが鳴なり響ひびき、弓兵アーチャーの身体からだが砲弾のような勢いで吹き飛ばされる。
　弓兵アーチャーの身体は別の高台の壁へき面めんへと深くめり込み、そのまま小さなその高台が崩くずれ始はじめた。
　一瞬の沈黙の後、単純な事実が、空間を支配する。
　ギルガメッシュの『王の財宝ゲートオブバビロン』の宝ほう具ぐ射出が一切通じなかった男を、少女の細腕が殴り飛ばしたという事実が。
　そして、少女は強い憎しみの籠こもった目で弓兵アーチャーが生き埋めになった瓦が礫れきのあたりを睨にらみ付つけ──背後にいるティーネとギルガメッシュをチラリと見ながら断言した。

「あの外げ道どうは、私の獲え物ものだ。……お前達は手を出すな」

　暫しばしの間を空け、ギルガメッシュが目を細めながら口を開いた。
「……興きようが削そがれるというのは、まさにこの事だぞ……小こ娘むすめ」
　声の質から、ティーネはギルガメッシュがあからさまに不ふ機き嫌げんになっていると判断する。
　心を躍おどらせていた勝負の邪じや魔まをされたのだから、彼の怒

りも当然だろう。
　更さらに言うならば、勝負に水を差されるのは初日を含めてこれで二度目だ。
　ティーネは一触即発のこの状況で、せめて相手の正体を探ろうと試みる。
　だが、ひとつの事実が少女を深く混乱させた。
　先刻の弓兵アーチヤーが腕に巻いていた宝ほう具ぐらしき布地。
　それとまったく同じ物を、目の前の少女も腕に巻いていたのである。
　布に描かれた紋もん様ようだけではない。
　周囲の空気を震わせるような濃密な神気すらも、欠片かけらも違たがわず同じものだったのだ。
　──まさか……同じ宝具……？
　ティーネが混乱し、ギルガメッシュが静かに怒りを渦うず巻まかせる中──
　崩くずれた高台の瓦が礫れきが、轟ごう音おんを伴って火山の噴火のように弾はじけ飛とぶ。

　真しん贋がん入り交じる聖せい杯はい戦せん争そう。
　強者達が大地に集い──
　聖杯の命運は、より深き混沌の沼に引きずり込まれようとしていた。

午後　大森林

　女アサシンは、かれこれ半日も森の中を彷徨さまよっていた。
　街まちに戻る最短のルートを選んだ筈はずなのだが、どうしても森から抜け出せない。
『瞑想神経ザバーニーヤ』を使用して周囲の地形を確認しながら進んだ結果、どうにも厄やつ介かいな事実に辿たどり着ついた。
　どうも、この広大な森そのものが、何者かの意志に従って蠢うごめいているようなのだ。
　地面が少しずつ動き、方向すら変わっていく。
　瞑想神経ザバーニーヤを多用すれば森を簡かん単たんに抜けられるだろうが、彼女はふと考える。
　──この森の結けつ界かいを生み出したのは何者なのか。
　──敵なのか味方なのか、それだけでも確認しておかなければ。
　──もしかしたら、この結界にあの魔ま物ものを引き込めば有利になるかもしれない。
　そう考え、より魔ま力りよくの濃い方へ濃い方へと慎しん重ちように歩を進めた女アサシン。

　その先で彼女は見たものは──
　二人の英えい霊れいらしき存在が、森の中で対たい峙じしている姿だった。

「よくここまで来れたね。余程森に愛されてるか、何か特殊な力が無いとここまでは来れないと思うけど……」

「ロクスレイ……まあ、俺おれの親友に案内してもらった」
「ふうん？　そうか、君、友達多そうだもんね」
　ランサーの言葉に対し、セイバーの英霊はニヤリと笑った。
「見えてるのか？」
「少しはね」
　奇妙な会話を交わした後、ランサーはセイバーに対して話の本題を切り出した。
「それで？　僕になんの用だい？」
　するとセイバーは、背後で狼おおかみを撫なでている眼鏡めがねの少女を見ながら言った。
「いやあ、君の真しん名めいも知らないし、どんな英霊なのかも解わからないんだが……色々と歩き回って、最初に見つけたサーヴァントに頼もうと思ってな」
　そして、セイバーはハッキリとその提案を口にした。
　場合によっては、この『聖せい杯はい戦せん争そう』をますます混こん沌とんの渦うずに巻き込む一言を。

「俺達と、同盟を組む気はないか？」

　あまりにも唐突な提案。
　ランサーはキョトンとした顔でセイバーを見つめた後、優やさしく微笑ほほえみながら口を開く。

　そして、彼が出した答えは————

next episode [Fake03]

成なり田た良りょう悟ご

一巻の著者近影と同じデザイナーさん（５１６０さん）から購入した革財布を持ち、『お金が増える魔術的な財布』とかではなく『この財布が魔術的な財布で、お金を入れる度に〆切が延びるシステムだったらなあ』と、生々しい現実逃避をする34歳埼玉在住作家。

イラスト／森もり井いしづき

たけのこの季節になりましたね。